

靈界物語 第四四卷 舍身活躍 未の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四四卷』愛善世界社

2002(平成14)年11月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～

## 目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 神示の合離 しんじ がふり

第一章 笑の恵 わらひ めぐみ 一七〇

第二章 月の影 つき かげ 一七一

第三章 守衛しゆゑいの囁ささやき（一一七二）

第四章 瀧たきの下した（一一七三）

第五章 不眠ふみん症しやう（一一七四）

第六章 山下やまくだり（一一七五）

第七章 山口やまぐちの森もり（一一七六）

第二篇 月明げつめい清せい楓ふう

第八章 光ひかりと熱ねつ（一一七七）

第九章 怪光くわいくわう（一一七八）

第一〇章 奇遇（一一七九）

第十一章 腰こしぬけ（一一八〇）

第十二章 大歡喜だいくわんき（一一八一）

第十三章 山口やまぐちの別わかれ（一一八二）

第一四章 思おもひ出での歌うた〔一一八三〕

第三篇 珍ちん聞ぶん萬ばん怪くわい

第一五章 變へん化げ〔一一八四〕

第一六章 怯け風ふう〔一一八五〕

第一七章 罵ば狸り鬼き〔一一八六〕

第一八章 一いっ本ぽん橋ばし〔一一八七〕

第一九章 婆ば口く露ろ〔一一八八〕

第二〇章 脱だつ線せん歌か〔一一八九〕

第二一章 小こ北きた山やま〔一一九〇〕

〔 〕

序文 じよぶん

本卷 ほんくわんは大正 たいしやう十一年 じふいちねん十二月 じふにぐわつ七日 ななかより九日 ここのかまで前後 ぜんご三日 みつかかん間に こうじゆつ口述 ひつき筆記 をを了 をはりまし  
た。筆録 ひつろく者は松村 まつむら眞澄 まさずみ、北村 きたむら隆光 たかてる、加藤 かとう明子 はるこ、外山 とやま介昭 かいせうの順序 じゆんじよにて従事 じうじし、二十  
一節 つせつ原稿 げんかう用紙 ようし一千二百 いつせんにひやくしじふまい四十枚 しじふまいです。冬 ふゆの短 みじかき日 ひあし足 あしにも拘 かかはらず、早 はやく脱稿 だつかうの出来 でき  
るやうになつたのは神 かみの御援助 ごゑんじよは申 まをす迄 までもなく、筆録 ひつろく者 しや各位 かくゐが鍛練 たんれんの結果 けつくわに外 ほかな  
らないのであります。大祭 たいさい終了 しうれう後 たかくまやま高熊山 さんばいに参拜 さんばいを濟 すませてから龜岡 かめをかまん萬壽苑 まんじゆゑんに滞 たいざい  
し。『舍身 しやしん活躍 くわつやく』(午 うまの卷 まき)を終述 しうじゆつしてから苑内 ゑんない山林 さんりんの手入 ていれに着手 ちやくしゆし、非常 ひじやうに身 から  
體 だの疲勞 ひらうを覺 おぼえましたので、早々 さうさうに切 きり上 あげて歸綾 きりようし、又 またもや數日 すうじつ間 かん休養 きうやうの上 うへ、  
漸 やうやく一昨 いつさく七日 なぬかより口車 くちぐるまの運轉 うんてんを開始 かいしすることになりました。龜岡 かめをか滞 たいざい在中 いちゆう八木 やぎの福 ふく  
島 しま氏 しより是非 ぜひ來 きて呉 くれとの依頼 いらいありしたため口述 こうじゆつの半 なかばに出張 しゆつちやういたしました。然 しかる處 ところ  
それ限 かぎり物語 ものがたりがピツタリと止 とまつて了 しまひ大變 たいへんに迷惑 めいわくを致 いたしました。神界 しんかいの御氣 おきに  
入 いらぬのでもありますまいが、今春 こんしゆんも八木 やぎの福島 ふくしま家に小 ほ火 やがあつたので火事 くわじ見舞 みまひ  
に行 ゆきました。さうすると又 またその時 ときも口述 こうじゆつが止 とまりました。今 いま一つ不可 ふか思議 しぎなの

は伊豆の湯ヶ島へ入湯に往つて、口述を行つて居ると、  
子この二人ふたりが訪問はうもんくだ下さつた。その時ときも亦また不思議しぎに口述こうじゆつが止とまつて了しまひ何程なにほど願ねがつても  
出来できなかつた事ことがあります。餘あまりの奇蹟きせきですから記念きねんのために爰ここに書かき添そへて置お  
きました。八木やぎの祭神さいじんユラリ彦命ひこのみこと様さまとかの靈れいが憑うつつてサウ急いそぐには及およばぬ、マア  
マア ユラリ ユラリと行やつたが良よからうと仰おつしや有あつて、口車くちぐるまを止とめられたのでは  
あるまいかとも思おもはれるのです。呵か々か。

大正十一年十二月九日

本卷は、三五教の宣傳使治國別命一行が素尊の命に依り、波斯の國齋苑の神館  
 より、印度に向つて言靈征服戦に出陣の途中、河鹿峠の南坂、祠の森にて玉國別  
 一行に袂を別ち、萬公、晴公、五三公、龍公、及び途中に於て圖らずも邂逅した  
 實弟の松彦と共に急坂を下り、山口の森に一宿する折しも怪しき女に出會し、萬  
 公その他の供人が驚愕する所や、又その怪女が晴公の實妹であつて二度吃驚する  
 所や、晴公の兩親に此森の中で廻り會ひ互に抱き付き昔を語る悲劇の幕や、野中  
 の森にて一泊の時、白狐の化身に出會しバラモン教の信徒にして斥候兵なるアク、  
 タク、テクの三人が袂を連ねて三五教に歸順し、小北山の神殿に詣でて盲目の受  
 付に境内を案内され、面白き神名を聞かされて驚く所の細かい物語りであります。  
 河鹿川の一本橋の詰で萬公の古疵が露見して、二人の婦女に身の行状を改むべく  
 涙と共に説諭され、萬公が大に悄氣かへり弱り切つて居る面白き物語であります。

大正十一年十二月九日



第一篇 神示の合離

第一章 笑の恵（一一七〇）

三千世界の宇宙 善と眞との光明に

守り玉へる五六七神 御稜威は宇内に輝きて

御靈のふゆの木の間漏る 祠の森の月影に

面を照らして治國別の 神の命の一行が

冬の御空も晴公や 五三公萬公純公の

四人の伴と諸共に バラモン教の兵士が

逃げ去り行きし其跡の 亂離骨灰微塵となりて

退却したる慘状を 思ひ出して物語る

時しもあれや玉國別の 神の命や道公の

休らふ祠の近邊に ひそかに聞ゆる女子の

囁く聲に耳すませ ハテ訝かしと聞きゐたる

無心の月は皎々と 治國別が頭上をば

木の葉を透して照らしゐる 俄に吹き来る風

木々の枯葉はバラバラと 霰の如く落ち來り

俄に女の囁きも 吹來る風に遮られ

千切れ千切れに聞えつつ 遂には夢のあとの如

ピタリとやみて風の 梢を渡る音のみぞ

あたり響かせ聞えける。

先生、萬公にはシカとは分りませぬが、此山中に思ひも寄らぬ女の聲が聞える  
ぢやありませんか。どうも聲の出所は祠の近邊の様ですが、又道公の奴、氣樂さ  
うにあんな聲を出して、玉國別様に狂言でもして、お慰みに供してゐるのぢやあり

ますまいかな」

「イヤイヤ決してさうではあるまい。風の音に遮られてシカとは聞えないが、どうやら女の聲らしい。何程巧妙に聲色を使つてもヤツパリ贗物は贗者だ。どつかに違つた所があるよ。今の聲には何とはなしに、驚きと喜びと悲しみとが交つてゐる様だ。ヒヨツとしたら、五十子姫様が神様のお示しに依つて、玉國別様の病氣見舞にお越し遊ばしたのではあるまいかと思はれるのだ」

「如何にも、さう承はればさうかも知れませぬ。それならこんな所に安閑としては居れますまい。サア先生、萬公と御一緒に御挨拶に参りませう」

「慌て行くには及ばぬ、玉國別様の方から御用が濟みたら、道公さまがついてゐるのだから、何とか知らして下さるだらう。それ迄はどういふ御都合があるかも知れないから控へて居つたがよからう。世の中には有難迷惑といふ事があるからなア」

「成程流石は先生だ。何から何迄好うお氣の付いた事。此萬公も感心を致しました。折角可愛い奥さまと御對面を遊ばしてゐる所へ無粋な男が飛出しては、殺風

景けいですからなア。此この萬まん公こうも萬まん公こう（滿まん腔こう）の同情どうじやうをよせて、暫しばらく控ひかへる事ことに致いたしま  
せう』

『ウン、それがよかるう。ここらで一眠ひとねむりしたら何どうだ。いい加減かげんに休やすんでくれ  
ぬと、安眠あんみん妨害ぼうがいになつて困こまるからなア』

『へー……』

晴公はるこうはそばから、

『何なんと云いつても、雀すずめの親方おやかたですから仕方しかたがありません。晝ひるの内うちはチユン チユ  
ン チヤアチヤア囀さへづつて居をつても、日ひが暮くれるが最さい後ご、チユンともシユツともい  
はぬのが雀すずめの性せい來しやうだが、此こ奴いつア時とき知しらずだから、何いつ時まで迄さへづも囀さへづるので、吾われ々われも大おほに  
迷めい惑わくだ』

『オイ晴公はるこうさま、俺おれが雀すずめならお前は燕つばめだよ。まだも違ちがうたら轡くつわむし蟲むしだ。ガチャ ガ  
チャ ガチャと聲こゑ計ばかりか、動靜どうせいまでが騒さわがしい落着おちつかぬ男をとこぢやないか。まるで秋あき  
の田たの鳴子なるこのやうな代物しろものだワイ』

『へん晴はるさまはヤツパリ春はるだ。秋あきの田たの鳴子なることは、併しかしよい仇名あだなをつけてくれた

ものだ。しかし鳴子は雀を追拂ふものだからなア、アツハ、ハ、ハ、ハ

「兩人よい加減に寝たらどうだネ、治國別も困るぢやないか」

「コレ御覽なさいませ。どの木の葉にも露が溜り、月が宿つてピカピカと光り、まるで瑠璃光の中に包まれてるやうぢやありませんか。目の奴、眠ることを忘れて、瑠璃光の光に憧がれ、仲々休戦の喇叭を吹きませぬワ。モウ暫く萬公を大目に見て下さいませ」

「ウン、成るべく静かに頼むよ」

「先生、モウぼつぼつおりても良いぢやありませんか。玉國別さまも目が悪いなり、道公一人で、奥さまにやつて来られ、いろいろの愁嘆場を聞かされて困つてゐるかも知れませぬよ。これから五三公は純公と二人で、様子を見て来ませうか」

「どんな御都合があるか知れないから、行くのなら足音を忍ばせて、ソツと往つた方がよい。雀も鳴子もこちらに預けておいてなア、アハ、ハ、ハ、ハ」

「ナル程、逃げる小雀、【なるこ】とならば一足なりと先へ雀と参りませう。なア純さま、お前も俺に従いて前へ前へと進み公さまだ。顔も随分黒いからなア」

「アハ、ハ、ハ、鳴子と雀の二代目が出来よつた。之を思へば世の中に何一つ亡びてなくなるものは無いと見える。此方が沈黙すれば又彼方で騒ぎ出す、一方を押し、一方が膨れる、到底惟神に任すより仕方がないワイ」  
と一人呟いてゐる。萬公、晴公は息を潜め、俄に眠につかむと、自ら寢息を製造して夢中の國へ高飛せむと努めてゐる。風は漸くにして鎮靜し、祠の前の人聲は明瞭に聞え來たりぬ。

五三公、純公の二人は差し足抜き足泥棒が暗夜に人の家を覗くやうな按配式で、漸く祠の後に近付き見れば玉國別の妻五十子姫及今子姫の姿が月の光にボンヤリと浮いたる如くに見えければ、五三公は小聲で、

「オイ純公さまよ、この五三公の察しの通りヤーツパリだ。ヤーツパリはヤーツパリだなア、エ、ー。結構なものだらう。親切なものだらう。有難いぢやないか。羨ましいぢやないか。本當に妬けて來るぢやないか。エ、怪體の悪い、しまひにやムカムカしてくるわ。なア純さま、コリヤ此儘でスミ公といふ譯には行くまいネー」

「やかましう言ふない。聞えたら何うする。純公さまの御主人様だ。怪體が悪いなぞと餘り輕蔑してくれない。嬉しいわい。なつかしい、有難い、辱ない、勿體ないわ」

「それにしても、道公の奴氣が利かぬぢやないか。御夫婦さまの仲でまるで檢視の役人のやうな面をしよつて出しやばつてゐる。彼奴ア、チとおとして來よつたのだな。俺の先生を見よ、隨分粹が利くぢやないか。キツと玉國別さまも五十子姫さまも、心の中では……あゝ旦那様か……女房であつたか、ようマア親切に來てくれた、會ひたかつた會ひたかつたと、互に抱つきしがみつき嬉し涙にくれ玉ふべき所だのに、夫婦の戀仲を隔てて通さぬ道公の馬鹿者、チツと氣を利かしても「よかりさうなものだかなア」」

と思はず知らず高聲が勃發した。さうすると純公は最早ヤケクソになり力一杯大きな聲で、

「道公の奴、道を知らぬも程があるワイ。夫婦の道は又格別だかなア。どの道困つた代物だよ。アハ、ハ、ハ、」

と肩を揺つて、ヤケ糞になつて笑ひ出す。道公は此聲に驚き、慌て祠の後へ進み來り、

「コリヤ純公、馬鹿にするな。御主人様が御病氣で、奥様が慰問しにお出でになつたのだ。それが何が可笑しいか。先生に對して失禮ぢやないか。サアこれから御無禮の罪をお詫するのだぞ。氣の利かぬにも程があるぢやないか」

「ヘン、氣の利かぬのはお前の事だよ。なぜお前は今子姫さまと一緒に治國別さまのお側へ行かぬのだ。折角夫婦が御面會遊ばしてゐるのに、何の事だい。そんな事で弟子が勤まるか。なア五三公、さうぢやないか」

「ウン、お前の云ふのも尤もだ。道公さまの云ふのも道理だ。モウ斯うなつちや仕方がない。こんな枝葉問題を捉へて舌戦をやつてゐる場合ぢやないぞ。早く先生御夫婦に御挨拶を申上げねばなるまい」

と五三公は先に立ち、玉國別の面前近く進む。純公は兩手をついて、  
「先生様、私は純公でムります。お目はどうでムいますか。ヤア奥様、ようマア御親切に來て上げて下さいました。私の女房が來てくれたやうに嬉しうムいます」



五十子姫は顔を掩ひ乍ら、

「ホ、お前は純さま、此度の旦那様の御遭難で、大變に苦勞をかけましたなア。併し貴方は御壯健で御目出たうムいます」

「ハイ、旦那様が御壯健で、私が代れるものなら代つて居れば良いのでムいます。が、何分厄雜者の榮える世の中で、善い者には害蟲のはいるものでムいます。オ

イ道公、どうだ。奥様からこんな結構な御挨拶を頂き、身に餘る光榮ぢやないか、貴様も何か一つ御言葉をかけて頂いたか、どうだい。滅多にそんなことはあるま

い……ソリヤきまつてゐるよ。何を云つても氣が利かない男だからなア。時と場合といふことを知らない石地藏さまは、困つたものだい」

「この道公さまは先生からは特別のお言葉を頂き、奥様は申すに及ばず、今子姫様からも御禮の言葉を……根つから一寸も頂かぬのだ。アハ、ハ、ハ、」

五十子「ホ、何とマア氣樂な方々ぢやなア」

今子「旦那様のお悩みを他所に、そんな氣樂相なことを云つちやすみますまいで、ちとお嗜みなさいませ」

「すみてもすまいでも、純公さまですよ。チツとなつと面白いことを云つて、先生様の御苦痛を軽減すべく努めてるのですよ。女童の知る所でない。エ、しざり居らう、オツと道純が一心變ぜぬ勇氣の顔色取りつく島もなかりけり、シヤンシヤンシヤン……だ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

五十子「貴方は五三公さまぢやありませんか。主人がお世話になりました相です。有難うございます」

「私は五三公、貴女は五十子姫様、男と女の違こそあれ、同じ名前ですからヤツパリ御因縁も深いとみえます。奥様に代つて特別に先生様の御世話を、何くれとなく氣を付けて、まだ致しませぬ。誠にすまぬことでムいます。今から御禮を云はれちや聊か迷惑の至り、これは折角乍ら御返上致します。どうぞ道公さま純公さまの方へ御廻し下さいませやうに」

五十子「ホツホ、ハ、ハ、」

今子「ウツフ、ハ、ハ、」

「コレ、今子さま、俯むいてせせら笑ひを致しましたなア。其笑ひ聲といひ、月

にすかして見た笑顔と云ひ、中々以て意味深長、イヤもう此五三公も、貴女の笑顔には恍惚と致しましたよ。一瞥城を傾けるといふ千兩目許で眺められた時の心持と云つたら、胸をさされる様でムいました」

今子姫は顔に袖をあて、恥しげに俯向いてゐる。五三公は世間慣れのした磯端の團子石の様な圓轉滑脱なあばずれ者、宣傳使の伴となつて、ここ迄伴いて來たものの、物の機みにはチヨイチヨイと生地が現れる厄介至極な滑稽男である。五三公は右の手を額口のドマン中にチヨンと載せ、カイツクカイのカイカイ踊りをし乍ら、治國別の休らふ森蔭をさして、

「オイ道公、純公、粹を利かせよ」  
と呼ばはり乍ら登つて行く。

「ハツハ、ハツハ、玉國別もおかげで餘程頭痛が軽減して來たやうだ。目も何うやら、一方はハツキリとし、一方の方は薄明りが見える様だ。笑うといふことは實に靈肉の藥になるものだなア」

「歡喜の笑聲は天國の門平安の道公を開くと云ひますからなア。臆て先生の目も

開くでせう。どうぞ力一杯笑つて下さいませ」

「笑ひは結構だが、さう俄作りの笑ひも出来ず、何分無粋の玉國別のことだから、笑ひの原料が缺乏を告げてゐるのだからなア」

「先生、貴方の御身體には笑ひが充満して居りますよ。一寸道公が笑はして見せませうか」

と云ひ乍ら後へまはり脇の下を指の先で「くす」ぐらうとする。玉國別は道公の手が障らぬ内にツと立ちて逃出し、早くも笑つてゐる。道公は尻を捲り、腰を屈め、ワザと鰐足になつて石龜の踊つたやうなスタイルで玉國別を追つかける。玉國別始め一同は思はずドツと吹出し、腹を抱へて笑ふ。玉國別も道公に追はれて、何回となく祠の周を笑ひ乍ら逃廻つてゐる。

(大正一一・一二・七 舊一〇・一九 松村眞澄録)

(昭和九・一二・二〇 王仁校正)

第二章 月の影（一一七一）

治國別は萬公、晴公の他愛なき鼯聲を聞き乍ら諸手を組み差俯向いてしばし冥想に耽りある。そこへ慌ただしく、息を喘ませ森の急坂を登り來たるものは五三公にぞありける。

「もし、先生、奥さまが見えました。さア何卒早く祠の前迄お下り下さいませ」  
「何、奥が見えたとは何しに來たのだらう。奥に用はない。面會は相叶はぬから直に引返せと云つて呉れ」

と治國別は不興顔なり。

「何程あなたが権利があると云つて、玉國別様の奥様に對し、そんな命令權があるとは五三公には思はれませぬワ」

「何だ、五十子姫様か、お前は奥様だと云ふから又菊子姫が後を追うて來たのではあるまいか、怪しからぬ奴だと思つたからだ」

「本當に怪しからぬですな。五十子姫様を御覽なさいませ。玉國別様の御身の上

を案じ煩ひ、女の身をも顧みず此山坂を夜を日に次いでお尋ね遊ばされました。

それに同じ宣傳使の奥様菊子姫様こそ、怪しからぬぢやありませんか。夫婦の情合と云ふものは、そんな水臭いものぢやなからうと五三公は思ひますよ」

「アハ、、、人間の心といふものは一人一人違ふものだな。俺は斯うして宣傳しに出た以上は女房も忘れ、家も忘れ、自分の生命までも忘れて居るのだよ」

「何とまあ、水臭い方ですな。菊子姫様がお聞きになつたら嘸失望落膽なさるで

せう。天にも地にも掛替のない一人の夫が左様の（淨瑠璃）水臭いお心とは露知らず、都でお別れ申してより、雨の晨、風の夕、片時たりとも忘れし暇はなきも

のを、思へば情なき貴方の心、あゝ何としようぞいな何としようぞいなア……とお嘆き遊ばすは石の證文に岩の判を押した様なものですよ。肝腎の女房を忘れる

やうな先生だから弟子の私等をお忘れになる位は何でもないでせう。一人途中に放つとけぼりを喰はされては、それこそ……本當に「つれ」ないわ、本當につれ

ないわ」

「アハ、、、、怪體な男だな、河鹿峠の猿の靈が憑いたと見えるわい。エーエ、

困つた人足を連れて来たものだ。一層の事、五十子姫のお歸りの時に五三公を袂の中に入れて這ひ出ぬ様に袂の先を蔓でも括つて歸りて貰ひ雪隠の隅にでも放つといて貰はうかな。アハハ、ハ、ハ、ハ、

萬公、晴公は今迄治國別の厳しき命令に寝れぬ目を無理に塞ぎ、態とに高敷をかき、寢眞似をしてゐたが、餘りの可笑しさに兩人一度に吹き出し、

「ギヤツハ、ハ、ハ、ギユツフ、ハ、ハ、ハ、」

萬公、晴公、治國別に寝た眞似をして見せてゐたのだな、仕方のない男ばかりだな」

「本當に男ばかりでは仕方がありません、殺風景なものですよ。あの祠の近邊を御覽なさいませ。五十子姫様に今子姫様、仲々仕方がたつぷりありますよ。こりや萬公、晴公、いい加減に狸の代理はよしにして先生のお伴に参り祠の前の春の様な氣分を御相伴しようぢやないか。齋苑の館をたつてから異性の香を嗅いだ事もなく、殺風景な場面ばかり、心も氣も荒れ果てた處で春陽の氣の漂ふ絶世のナイスがやつてきたのだから何とはなしに上氣分だ。エーン、いい加減に森を出立

して【ホコラ】（そこら）あたりを五三公と共に迂路つかうぢやないか」

「萬公さまの御耳には、何だか祠の近邊には笑聲が湧きたつて居るやうに聞こえて堪らないがナア」

「それだから【小生】が人間の【處世】法は笑ふに限る、笑ひは天國の門を開く捷徑だと云つてゐるのだよ。さア先生、五三公と共に参りませう。貴方も久し振りで五十子姫様にお會ひになつても、あまり悪い氣は致しますまいぜ。義理の姉さまぢやありませんか。やがて松公さまも伊太公を連れて歸つて來られませうから兄弟の對面も間近に迫つたりと云ふもの、さア早く御輿をお上げなさいませ。如何に重々しいのが宣傳使の威嚴だと云つても、さう尻が重たくては千變萬化の活動は出來ませぬぞや」

「アハ、ソ、ソなら三人の部下に擁立されて治國別も危険區域へ出陣しようかな」

「（芝居口調）早速の御承知、五三公身にとり、光榮至極に存じます。然らば私先登に立つて御案内、あいや、萬公、晴公は治國別宣傳使の前後を守り吾後に



從つて來よ。下に 下に 下に

と杖を以て四邊を拂ひ乍ら祠をさして下り進む。

治國別は漸く祠前に進み、拜禮終つた後、

玉國別様、お鹽梅は如何でございますか。これはこれは五十子姫様、ようまあ

おいで下さいました。やア之で私も一安心、誠に玉國別様はお氣の毒でムりまし

た

治國別様、夫が色々と深いお世話になりました。誠にお禮の申しやうもムりませぬ。

吾々夫婦の改心のため神様が目を覺まさして下さつたのでムりませう。思へば思

へば實に有難い御神徳を頂きました

今子姫様、治國別でムりますよ、御苦勞でしたな。嘸お疲れになつたでせう

エへ、女と云ふものは結構な者だな。玉國別様に一寸義理一遍の簡単な御

挨拶、それから異性の五十子姫様に對しては至れり盡せりの親切振り、其餘波を

今子姫様へタツプリ浴せかけ、いやもう抜目のない先生のやり方、五三公も女に

生れて來たらモチト位やさしい言葉をかけて頂くのだけだな。五十子姫と五三公

との間違ひで、之程社會の待遇が變るものかな」

五十子姫は吹き出だし、

「オホ、何と面白い、治國別様は同勢を連れて居なさいますこと、屹度道中は彌次喜多氣分が漂うて愉快な事でムりませう」

「兔も角神様の御爲めに活動する位、楽しい事はムりませぬ。就いては此處に一つ云ふに云はれぬ有難い事が私の身に突發致しました」

と聞くより五十子姫は驚きの色をなして、  
「それは何より結構でムります。さうして、その嬉しい事とは何でムりますか、早く聞かして下さいませ」

治國別は「ハイ」と言つて首を垂れてゐる。

「先生様に代つて五三公が報告の任に當りませう。治國別様は御兄弟の對面を成さいました。それはそれは立派な弟さまがお在りなさるのですよ。しかも片彦將軍の祕書役ですから随分立派な方ですわ。人品骨柄と云ひ、其容貌と云ひ、先生様と瓜二つですもの」

「何、御兄弟に御對面遊ばしましたと、それはそれはお目出度い事であります。然し乍らバラモン教の片彦將軍が祕書役とは不思議ぢやムりませぬか。運命とか云ふ神の手に人間は翻弄されて居るやうなものですな。如何かして三五教に御歸順遊ばし兄弟揃うて御神業にお盡し遊ばすことは出来ぬものでムりませうか」と稍心配げに治國別の顔を見つめる。

「惟神の御攝理によつて都合よくして下さるでせう。伊太公さまの所在を尋ねて参りましたから、やがて弟は歸順の上、ここへ歸つて來るでせう」

「伊太公さまは何處へ行きましたか。バラモンの手にでも、捕はれたのぢやムりませぬまいかな」

と五十子姫の晴れぬ顔色を見るや治國別は、

「ハイ伊太公はバラモンの軍人に捕へられ、青春山の岩窟に幽閉されて居りますのを私の弟が改心歸順の結果、神様へ御奉公始めに伊太公さまを、とり返しに行つたのでムります。伊太公さまを首尾克く連れ歸る迄は此治國別は兄弟の名乗りを許さない覺悟でムります」

と云ひ終つて涙ぐむ。

斯く話す折しも谷道の下方より四五人の人聲聞え來たる。玉國別は其人聲に耳を聳てバラモン教の殘黨の襲來に非ずやと胸を躍らし待ち構へ居る、斯る處へ伊太公を伴ひ歸り來れるは松公、龍公外數人なりける。松公は祠の前に合掌し感謝の神言を奏上し終つて一同に向ひ恭しく禮を施し治國別の前へ進み出で、  
宣傳使様、松公でムります。お蔭を以て伊太公様を迎へて參りました。それは御苦勞感謝する。まづゆるゆると休息して下さい。伊太公さま、嘸お困りでしたらう。お察し申します。』

伊太公は第一に玉國別に向つて涙と共に挨拶を終り五十子姫、今子姫其他に對し感謝の涙を湛へ無事を祝し、治國別に向ひ容を改め、  
神様の御恵と松公、龍公さまのお蔭によりまして無事に先生のお側へ歸る事を得ました。有難く御禮を申し上げます。』  
貴方の壯健なお顔を見て治國別も安心致しました。お蔭で弟に公然と對面が出来るやうになりました。あゝ惟神靈幸倍坐世。』

と合掌する。

「もし先生、道公の一行はもとの森蔭へ轉宅致しませうか。兄弟御對面につきまして何れ海山の話がありませう。貴方が五十子姫様と御面會の時も治國別様は氣を利かしてあの森蔭に待つて居て下さったのですから、此方も其返禮にしばらく此幕を切り上げようぢやありませんか。ねえ五十子姫様、さうでせう」

「旦那様、私が手を曳いて上げますから、あの森蔭迄遠慮致しませう」

「別に男と男との兄弟が久し振りに巡り合うたのですから、又夫婦の御面會とは模様が違ひます。何卒御遠慮は要りませぬから、ここに居て下さいな」

「伊太公お前は如何だつた。随分困つたらうな。玉國別の言ふ事も聞かずに血氣の勇を揮つて飛び出すものだから皆のお方に心配をかけたのだよ。これからは氣をつけて貰はねば困るよ」

「はい、誠に申譯もムりませぬ。至つて至らぬ伊太公、此後は屹度心得、自由行動は今日限り黽の道切れと【いたち】ます」

「アハ、何處迄も氣樂な男だなア、道公の私もあきれて了ひました。先生、

此奴はもう脈上りですよ。こんなながらを旅につれて歩くのは一つ考へ物です。奥様のお歸りの時に懐へでも入れて持つて歸つて頂いたら如何でせう」

「五十子姫だつて、さう二人も軽い男を懐に入れて歸るのは困ります。ねえ今子さま」

「あの五十子姫様の弱い事を仰有りますこと、今子は齒痒くなりました。男の三人や五人は髪の毛一筋あればつないで歸れるぢやありませんか。現代の男はまるで屁の様なものですからな。ホ、ホ、ホ、」

「此奴あ怪しからぬ。斯う女に侮辱されては伊太公も男子を廢業したくなつて來たわい」

治國別は言葉を改めて、

「今日より松公は治國別の弟、龍公さまは義理の弟、何卒皆さまと一緒に仲良うして神業に盡して貰ひ度い」

松、龍兩人はハツとばかりに嬉し涙に咽び頭も得上げず大地に踞みて俯向き居る。

「皆さまに御免を蒙つて治國別が其方と別れし後のアーメニヤの状況を詳しく聞かして呉れないか。さうして其方は如何云ふ手續きでバラモン教に這入つたのか。その動機を聞かして貰ひ度い」

「兄上様がアーメニヤの神都より宣傳使となつて龍宮の一つ島へ渡られた後、バラモン教の一派に襲はれ刹帝利、淨行を始め毘舍、首陀の四族は四方に散亂し目も當てられぬ大慘事が突發しました。大宜津姫様がコーカス山から敗亡の體で逃げ歸つて來られてから間もない疲弊の瘡の癒え切らない所だから、忽ち神都は防禦力を失ひ常世の國へウラル彦、ウラル姫様一族は其姿を隠し玉ひ諸司百官庶民の住宅は焼き亡ぼされ、ウラル河の邊りに武士の館が少し許り残されたのみ。離々たる原上の草、累々たる白骨叢に纏はれて、ありし昔の都の倂も見えず蓮府槐門の貴勝を初め毘舍の族に至るまでウラル河に身を投じて水屑となつたものも澤山にあり、中には遠國に落ち延び田夫野人の賤しきに身を寄せ或は山奥の片田舎に忍び隠れて桑門竹扉に詫住居する貴勝の身の果敢なさ。夜の衣は薄くして曉の霜冷たく朝餉の煙も絶えて首陽に死する人も少からず。その中にも私は父母兄弟に

生別れ、死別れの憂目に會ひ、廣い天下を當所もなく漂流する内バラモン教の片彦に見出され、心ならずも兄様の所在を探るを唯一の目的として今日まで日を送つて参りました。ア、有難き大神様の御引合せ、コンナ嬉しい事はムりませぬ』と袖に涙を搾る。

一同は松公の物語を聞き感に打たれてすすり泣きするものさへありき。夜は段々と更け渡り、月は黒雲に包まれ、忽ち四面暗黒の帳は深く下ろされぬ。山猿の叫ぶ聲、彼方此方の谷間より消魂しく響き來る。

(大正一一・一二・七 舊一〇・一九 北村隆光録)

### 第三章 守衛の囁(一一七二)

浮木が原の陣營にはランチ將軍、片彦、久米彦將軍が、數多の軍勢を集め、幔幕を張り廻し、治國別の進路を要して、手具脛引いて待つて居る。俄作りの陣營



の表門にはテル、ハル兩人が守衛の役を務めて居る。夜はだんだんと更け渡り雨嵐の聲烈しく、立番も漸く飽きが来て、パノラマ式の門側の一閒に入り、ポートワインの詰を抜きながら雑談を始めた。

「オイ、ハル公、思へば思へば人生が厭になつたぢやないか、僅三百年の壽命を保つ爲に、こんな「しやつち」もない人殺の乾兒に使はれ、死んで地獄の成敗を受ける準備ばかりして居るやうな事では困つたものぢや、些は考へねばなるまいぞ」

「何、吾々は、天の八衢に迷うて居るよなものだよ。此の通り嵐に雨の激しい事、人生の行路を暗示して居る。ハルも何とか身の振り方を考へたらよからう。併し乍ら死後の世界は吾々の目に入らないのだから、有るとも無いとも分らないワ、そんな頼りない事を思つて宗教心を出すと、一日も此世が恐ろしうて居る事が出来ないわ。まあワインでも呑んで、空元氣でもつけるのぢやなア」

「それでも、バラモン教の大黒主様は、死後の世界が恐ろしいから現在に於て難行苦行を積み、未來の樂園を樂しめと仰有るぢやないか、大黒主様が仰有るのだ

から決して間違ひはあるまい。吾々は假令この肉體は現在の此處に置くとともに、靈魂の故郷なる天國淨土に復活し、永遠無窮の生命を保ち、無限の歡喜を味はひたいからバラモン教のためだと思つて、テルもこんな人殺の軍人に使はれて居るのだが、こんな事やつて居ても天國へ行けるだらうか、テルは其點が氣にかかつてならないのぢや、大雲山に現はれたまふ、大自在天大國彦命様の御氣勸に叶うだらうかなあ」

「世の中には裏もあれば表もあるよ。打ち割つて言へば大雲山は莊嚴無比の神聖なる神様の靈場だが、併し内實は恐るべき地獄のやうな所で、いろいろと難行苦行を強られ骨を碎き身を破り、荒行の結果中途に死んだやつは皆骨堂に骨を祀られて居るぢやないか。あの骨堂を有り難がつて拜みに行くやつは氣が知れないぢやないか。バラモン教の骨堂と修業場とお札は實に印度人のために大恐怖の源泉だよ。力の弱い無知識の人間に、死と云ふ恐怖心をもたせて生の自由を束縛して居るのだ、大雲山又はハルナの都の大黒主に所謂神權の存在するのは、これがためだよ。斯かる虚偽的な空漠な權威をもつて、無知識なる人間の心をとらへ、

さうして、宗閥、宣傳使の一統は、多數人民の膏血を絞る手段として居るのだ。バラモンのお札は宗教界の不換紙幣とも云ふべきものだ。バラモン教は恐怖をもつて人類の膏血をしぼる恐るべき社會の地獄と云ふものだ。印度の國民は一人も残らず、この地獄に陥落して居るのだ。それだから三五教と云ふやうな誠の救世教が興つて來たのだ。大黒主は大雲山の骨堂に等しい牢獄とお札に等しい不換紙幣をもつて絶對權威の維持にとめて居るのだから、矢張八岐大蛇の再來と云はれても仕方がないわい。そこを三五教が看破して居るのだから偉いものだよ。河鹿峠の言靈戦に遇つた時には僅か三人の敵に對して三四百の騎馬隊が潰散した事を思へば、到底バラモン教等は三五教の敵で無い事は明白だ、俺等はこんな吹き放しの野營の門番をさせられて居るが、もしや治國別の一行が攻めて來たら一番に正面衝突をするのは、貴様と俺だ。オイここは一つ相談だが大將は皆氣樂に寝て居るだらうから、今の中に脱營して治國別の宣傳使に歸順し命を助けて貰ふ方が餘程當世流だよ。一つしかない命を捨てた所が、大黒主様の國妾養成所の國妾學校を立派にするやうなものだ。實に馬鹿らしいぢやないか、エーン」

「オイ、ハル公、國妾學校と云ふ事があるかい、あれは國立女學校と云ふのだ、立と女と貴様は一つに讀むから國妾なぞと讀めるのだよ。餘程文盲の代物だなア」  
「それだから文盲省の許可を受けて立てて居るのぢやないか、妾もない事を云ふない。大黒主の大將は幾十人とも知れぬ程の澤山の女をかかへ、朝から晩まで絲竹管弦の響に心腸を蕩かし酒池肉林の楽しみに耽り利己主義を發揮して居るぢやないかい、テル公」

「そりや仕方がないさ、カビライ國の淨飯王の悉達太子でさへも美姫三千人を侍らしたと云ふぢやないか、大黒主が五十人や六十人の女房もつたつて何がそれ程不思議なのだ。今頃の女は一人前の女房にする女が無いから、數十人を集めて初めて一人の仕事をするのだ。第一に寢間の伽をする奴、炊事を司る奴、裁縫を司る奴、機を織る奴、會計を司る奴、下僕を追ひ廻す奴と云ふやうに、今の女は、専門的だから到底一人で女房の本職が盡せぬからだ。現代の博士だつてさうぢやないか、部分的の専門學より知らないのだからなア、理學なら理學、文學なら文學、法學なら法學、只それ一つを握へて朝から晩まで頭を痛め、書物と首つ引き

で居るものだから遂に頭腦の變調を來し、やつと博士か馬鹿士になるのぢやないか、總て世の中はこんなものだよ、ハル公

「オイ貴様の名はテルなり、俺の名はハルなり照國別、治國別の三五教の宣傳使の頭字を取つて居るのだから、何か因縁があるのに違ひない。キツと此處を飛び出して行けば許して呉れるに相違ないから行かうぢやないか、行くなら今の中だからなア」

「ハル公、貴様餘程御幣舁ぎになつたと見えるな、大雲山が餘程こたへたと見えるわい、あゝ何だかタンクが破裂しさうだ、賣買契約の破棄をやつて來うかなア」

「テル、貴様は軍人で居ながら、内職をやつて居るのか、そんな事が聞えたら大變だぞ」

「貴様の薄野呂には俺も感心した、賣買契約の破棄と云ふ事は小便すると云ふ事だよ、ハル公」

「アハ、ゝ、それなら大ウン山と、キツパリ斷つて來い、その方が【大便】利かも知れないぞ、屁のやうな理屈をブツブツたれて居た處でつまらぬぢやないか、

何程偉相なにほどえらさつに云つたとところが、暗黒無明あんこくむみやうの世界せかいに湧いた人間にんげんよ、餘程よつほど、智者ちしやぢや學者がくぢやと云つた所ところが俺達おれたちの百萬倍ひやくまんばいの智慧ちゑのある人間にんげんでもやつぱり人間にんげんは人間にんげんだ、人間の暗い知識ちしきでは一匹いっぴきの蝗いなごに一瞬間いつしゆんかんの生命いのちを與あたへる事ことすら出來できないのだ、放屁はうひ一つひとつでさへ、自分の放ひらうと思ふ時おもに注文ちゅうもん通り放ひる事ことの出來できない不都合ふつがふきは極きはまる人間にんげんだからなア、アハ、ハ、ハ、ハ、ハ

「ウフ、ハ、ハ、ハ、ハ」

かく兩人りやうにんが、他愛たあいもなく笑わらつて居ゐる。そこへやつて來たのは片彦將軍かたひこしやうぐんのお近侍そばづきのヨルである。ヨルは雨嵐あめあらしの音おとを壓あつする様やうな蠻聲ばんせいで、

「これやこれや兩人りやうにん、守衛しゆゑいも致いたさず勝手氣儘かつてきままに酒さけを喰くらひ何を喋しやべつて居ゐたのだ。これから片彦様かたひこさまのお耳みみに入れるから覺悟かくごを致いたせ」

と聲高こゝろたかに罵ののしるにぞ、テル公ていこうは頭あたまを搔かきながら、

「ハイ、一寸小便ちよつとせうべんの話はなしをやつて居をつたところですよ。序ついでに大便だいべんも放屁はうひも話頭わとうに上のぼりましたが、別にそれ以外いぐわいに六ヶしい話はなしもムいませぬ、なあハル公こう、さうぢやつたぢやないか」

「ウンその通りその通り、いやもう、糞食時に飯の話をしられて、いやどつこい小便呑み時に酒の話をしられて、イヤもう氣分の悪い事ぢやわい、エへ、へ、へ、」  
「これやこれや兩人、俺を何と心得て居るか、全軍の監督ぢやぞ」  
「監督はよく分つて居りますわい、爛德利ぢやとよろしいが、こいつはポートワインだから、冷德利だ。併しそんな六ヶ敷い顔をせず、一つ召上がつてはどうですか、テルが酌をしませう、いや呑みやがたらどうですか、御神酒上らぬ神はないと云ひますぜ」

ヨルは呑みたくて堪らぬのを耐へて、態と聲高に、  
「其方は酒をもつて此方をたぶらかし、悪事の露顯を防がうと致す、憎くき門番、そんな話ぢやなからう。國妾學校について大變な、酷評をして居たぢやないか、事にヨルと貴様の首が危ないぞ」  
「それだからテルとハルの首のある中に一杯でも呑んで置かねば損ですからなア、まあ一つ聞召せ、随分氣が「はんなり」と致しますよ」  
と云ひ乍ら鼻の先につきつくれば、ヨルは腹の蟲がクウクウと催促をする。

「これやこれや些心得ぬか、戦陣で酒は禁物だぞ。さうして貴様達は、照國別、治國別に歸順しようと話して居たではないか。その方は隱謀未遂罪だから、これから片彦將軍の前に引き立てる、神妙に手を廻せ」

「承知致しました。何時でも手も足も廻しませう。今晚はどうせテルの笠の臺が飛ぶのだから、冥土の土産に、も一杯呑まして下さい。そして貴方も生別死別の杯をして下さいな」

「その方が、この世の別れとあれば役目とは云ひ乍ら呑んでやるのも一つの情ぢや。よし差支ない、いや苦しうない、注がして遣はす」

ヨルの喉はクウクウと二人の耳に聞える程催促をして居る。二人は瓶のキルクを態とに暇を入れて抜いて居る。ヨルは呑みたくて耐らず、人が居らねば飛びつきたい程になつて居る。

「これやこれや、何をグツグツ致して居るか、早く詰を取らないか」

「そんな殺生な事を云つて下さるな、たつた今首の飛ぶ人間ぢやありませんか。素盞鳴尊様かなんぞのやうに爪を取るなぞとそんな二重成敗をするものぢやありませんか」



ませぬよ」

「【つめ】を取ると云ふ事は早くキルクを抜けと申す事ぢや」

「たうとう時節到来、酒瓶の首がキルクと抜けよつた。サアサアお上り遊ばせ、随分いい味がしますよ」

「早く注がないか、ヨル監督に對しては、別に禮式も何もいつたものぢやない、こんな戦陣にあつては上下の障壁を取り、何事も簡単に手取り早くやるものぢや」

「そんなら、この儘ラツパ呑とお出かけになつたらどうですか」

「戦陣にあつてラツパのみとはこいつは面白い、ラツパの一聲で三軍を自由自在に動かすのだからなア、武道の達人が葡萄酒を呑むのは合つたり叶つたりだ」

と云ひながら、ハルがキルクを抜いた酒瓶を一ダースばかりつづけざまに呑み干して仕舞つた。忽ちヨルは足を失ひヨロヨロとしながら二人の前にドスンと倒れ、

「あゝ、そこらがナンとはなしにポーとして來た。これだからポーとワインと云ふのだなア、何と酒と云ふものは怪體な代物だナ、俺はもう軍人が嫌になつた。

オイ、テル、ハル、このヨルさま等がヨルに紛れて此場を【テル】、そして【ハ

ル」バルと、齋苑の館へ歸順と參らうぢやないか、エーン何だか此頃は俺も實の處はバラモン教がいやになつた。三五教の三人や四人の宣傳使に言靈を打ち出され人馬諸共逃げ散るとは實に情なくなつて來た。これを思へば、實に三五教の神様は天のミロク様、バラモン教の神様は大蛇の乾兒様位に違ひないよ、こんな事をして居ると終には地獄の釜炙ぢや。テル、ハル貴様も同意見だらう」

「そいつは何とも明言し兼ねますわい、人の心は分りませぬからな、ウツカリした事は言へませぬぜ、ヨルさまお前さまは俺達二人をとつ捕まへて片彦將軍の前につき出し手柄をする心算だらう、併し賤しい酒に喰ひよつて身體が自由にならないものだからそんな事をいつて俺達の機嫌を取つて居るのだらう。そんな事にチヨロまかされるやうなテル、ハルさまぢやありませんぞえ」

「さう貴様が疑へば仕方がない、併し乍ら俺は決して、酔うては居るが酒呑み本性違はずと云うて嘘は云はない、貴様達二人をとらまへようと思へば何でもない事ぢや、己が懐にもつて居る合圖の笛さへ吹けば、何十人でも此場へ出て來るのだから」

「さうすると、矢張り本音を吹きよつたのだな、ヨシヨシ　ヨルも矢張り吾がテ  
ル黨の士だ。これで三人揃うた。天地人、日月、靈力體だ、御三體の神様だ。  
三人世の元、結構々々こんな結構が世にあらうか、どうだ三角同盟の成立した祝  
に土堤切り發動して見ようぢやないか」

「そいつは一寸待つて呉れ。こんな所で噪いで居ては見つかつては大變だ。オイ  
今の中に此處にあるだけの酒を背に負ひ、夜に紛れて祠の森迄行つて見ようぢや  
ないか。グヅグヅして居ると大變だからのう」

「テルの目からは、ヨルさま、お前其足許であの山路が行けるかい、危ないもの  
だぞ」

「俺は動けなくても構はないぢやないか、貴様達二人の足さへ達者であれば、山  
駕籠に乗せて昇ついで行けばよいのだ。幸ここに山駕籠が四五挺ある、これを一  
挺何々して俺を乗せるのだなア」

「何と甘い事を仰有るわい、併しながら逃げ出すのは今晚に限る、仕方がない、  
オイ、テルさま　ヨルさまを昇ついで夜の山道を上つて行かうぢやないか、河鹿

峠に往けば最早安全地帯だからなア」

ここに三人は一挺の駕籠を盗み出し、ヨルを乗せテル、ハルの兩人は面白可笑しき歌を小聲に喋りながら、ソツと浮木が原の陣營を脱出し、河鹿峠の祠の森をさして進み往く。月は黒雲の帳を破つて三人の頭上をニコニコ笑ひながら覗かせたまふ。

(大正一一・一二・七 舊一〇・一九 加藤明子録)

(昭和九・一二・二一 王仁校正)

#### 第四章 瀧の下(一一七三)

初冬の空に輝く月の光は、河鹿川の谷間を落つる屏風のような瀧に懸つて、玉の如き飛沫をとばし、其飛沫には一々月が宿つて、星の飛ぶ様に見えて居る、ここは祠の森から三町許り下手である。瀧の音を壓して、大聲に笑ひさざめいてゐる

三人の男ありける。

「オイ、イクにサール、今晚は怪體な晩ぢやないか。松公さまが兄貴に會ひ、根本の根本から三五教に歸順して了ひ、俺と一緒に巻込まれて了つたが、併し考へてみれば危ないものだぞ。何程三五教が、神力が強いと云つても、玉國別、治國別の一行めて十人以内だ。ランチ將軍の率ゆる、數多の軍勢に進路を遮られ、何時迄も袋の鼠の様に祠の森近邊に退嬰して居つた所で、さう兵糧は續くまいし、今度は計畫をかへて、捲土重來と、ランチ將軍が指揮の下に登つて來ようものならそれこそ大變だよ。俺達ア敵に歸順したと云つて、キツと槍玉にあげられるに違ない。三五教に歸順すればバラモン教から睨まれる。バラモン教の方へ行けば三五教から攻められるだらうし、イクにも行かれず、逃げるにも逃げられず、エライ、チレンマに係つたものだ。お前達は如何する考へだ」

「此イクさまの肚の中にはイクラも妙案奇策が包藏してあるのだから、さう悲觀したものでぢやない。キツと三五教に歸順して居れば活路は開けるよ。此河鹿峠は敵味方勝敗の分る所だ、が併し乍ら、此喉首を三五教に扼されて了つたのだから

ら、假令百萬の兵士を引つれて、ランチ將軍が登つて來た所で、さう一度に戦へるものでなし、小口から將棋倒しにやられて了ふのは當然だ。それだから身の安全、靈の健全を保つ爲に三五教にスーツパリと歸順したのだ。貴様はまだ迷うてイルのか、信仰心の足らない奴だなア。風呂の蓋でイル時にイラン、入らぬ時に入る代物だよ」

「それだと云つてヤツパリ人は先の事も考へておかねば、サア今となつて周章狼狽した所が、後の祭で仕方がないからのう」

「兔も角も吾々三人をお疑もなく、そこらを遊んで來いと云つて解放してください。ルのような寛大な度量のひろい宣傳使だから、キツと確信があるのだ。モウそんな馬鹿な事はいはずに神様に任せておく方が何程安心だか知れないなア。此瀧水を見い、實に綺麗ぢやないか。此眞白に光つた清らかな水で心の垢をサールと洗ひきよめ、月の光に照されて、自然の境に逍遙し、三人の親友が假令半時でも、かうしてゐられるのは全く貴き神様の御恵だよ。あゝ有難い有難い。バラモン教であつたならば、何うして今に歸順した者に對し、自由行動をとらしてくれるもの

か、之これを見てみても教をしへの大小だいせうが分わかるぢやないか。第一世だいいちよの中なかを刃物はものを以もつて治めようなぞとは實じつに危険きけん千萬せんばんだ。おりや最もう、バラモンのバの字じを聞きいても厭いやになつたよ。バのついたものに碌ろくなものはありませんよ。ババアにババにバケモノ、バクチにバンタ、バリにバカと云いふよなもの、穢きたない物計ものばかりだ。皆穴みなあな（缺點けつてん）のある奴やつばかりがかたまつて居をるのだからなア、俺おれだつてバラモン教けうへ這入はいつてから、世せ間の奴やつや友達ともだちに大變たいへんに擯斥ひんせきされたよ。今いまぢやバラモン教けう以外の奴やつア サール神かみに崇たりありとか云いつて、交際つきあつてくれないのだからなア

「バラモン教けうへ入信はいつてから人ひとが附合つきあはぬようになつたのぢやない、貴様きさまは呑のだくれのバクチ打うちのババせせりのバカ者ものだから、世間せけんの奴やつから排斥はいせきされ、行く所ところがなくなつてバラモンへ入信はいつたのだろ。どうせ、バラモンへ入信はいるやうな奴やつア、皆行詰みなゆきつまり者ものだ。行詰ゆきつまつて約つまらぬようになつてから、つまらぬとは知しり乍ながら入信はいるのだからなア

「さういへば、幾分いくぶんかの眞理しんりがないでもないでござールワイ。併しかし乍ながらイルだつて、さうだろ、世よの中なかからゲジゲジの様やうに厭いやがられ、相手あひてがなくて、バラモンへ

沈没ちんぼつしたのだから、餘りあま大きな聲こゑで人の批評ひひやうはせぬがよからうぞ。此世このよに用ようのな  
い人間にんげんはバラモンへでも入信はいつて、日ひを送おくらねば仕方しかたがないからなア□

□ 俺おれだつて、まだ世よの中に必要ひつえうがあるのだ。イル代物しろものだ。それだからイルと名なが  
ついてるのだよ。弓ゆみもイル、風呂ふろにもイル、人の爲ためには肝きももイル。足の裏うらに豆まめを  
イル。……といふ重寶ぢやうほうな哥兄にいさまだ。餘りあまバカにして貰もらうまいか、こんな事ことを嬢かか  
が聞きいたら一遍いっぺんにお暇ひまを頂戴ちやうだいしなくちやならないワ、なア、イク公こう□

□ 貴様きさま偉相えらさうに言いつてるが、女房にようばうがそれでもあるのか、サール事實じじつありとは根ねつか  
ら噂うはさにも聞きいた事ことがないぢやないか□

□ 女房にようばうが内に要いるからイルと言いふのだ。嫁よめがイル婿むこがイルといつて、一軒いっけんの内に  
はなくてならぬのだ。併しかし乍ながら俺おれはまだ年としが若わかいから、女房にようばうの候補者こうほしやはザツと二に  
打うばかりあるのだが、まだ金勝要きんかつかねの神かみとやらが決定けつていを與あたへてくれないので待命たいめいちう  
中ちゆうだ□

□ 待命たいめいちう中ちゆうなら月給げつきふの三分さんぶの二にはくれるだらう。チツとサールにも分配ぶんぱいしたらどう  
だい□



「イヅレ金勝きんかつ要神かねのかみさまだから、金かねは澤山たくさんに持つてもムるよ。俺おれのは一遍いっぺんにチヨビチヨビ貫もらふのは邪魔じやまくさ臭くさいから、一時いちじき金きんとして頂いたくように、天國てんごくの倉庫さうこに預あづけてあるのだ。欲ほしければ貴様きさま勝手かつてに働はたらいて力ちから一杯いっぱい取とつたがよからう、イルだけ取とらしてやらう」

かく話はなす所ところへ覆面ふくめんの男をとこ二人ふたり、手槍てやりを杖つゑにつき乍ながら木蔭こかげよりノソリノソリ現あらはれ來きたり、黒頭巾くろづきんは大喝だいかつ一聲いっせい「コラツ」と叫さけぶを、三人さんにんは思おもはず聲こゑの方に視線しせんを注そそげば二人ふたりの大男おほをとこが立たつてゐる。

「コレヤどこの奴やつか知らぬが、イル様さまが機嫌きげんよく夜遊よあそびをしてるのに、コラとは何なんだ、一體いったい貴様きさまは誰たれだい。大方おほかた三五教あななひけうの目付めつけだろ、俺おれは勿體もつたいなくも大自在だいじさい天様てんさまの子分こぶんだ。清春山きよはるやまの番ばんをしてゐる、イル、イク、サールのお三體さんたい様さまだぞ。サア是これから貴様等きさまたち兩人ふたりをふん縛しばり、ランチ將軍しやうぐんの前まへへ連れて行くから、覺悟かくごを致いたせ」

「今木蔭いまこかげに於おいて汝等なんぢら三人さんにんの話はなしを聞きけば、最早もはや三五教あななひけうに歸順きじゆんしよつた反逆人はんぎやくにん、そんな言譯いひわけを致いたして、あべこべに此方このほうを三五教あななひけうの捕手とりて呼よばはり致いたすとは、中々なかなか以もつて世智ちに丈たけた代物しろものだ、サアかうならば最早もはや了見れうけんは致いたさぬ。此方このほうはランチ將軍しやうぐんの目付めつけや

役アリス、サムの兩人だ。俺の武勇は天下に聞えて居るだろ。一騎當千の英傑はアリス、サムのことだ。サア覺悟をせい」

「アハ、ハ、ハ、吐したりな吐したりな。アリス、サム、野郎、グツグツぬかすと、生言靈の發射をしてやらうか、モウ斯うなつてイル以上は隠すに及ばぬ、吾々三人は三五教宣傳使治國別の三羽鳥だ。グツグツぬかすと手は見せぬぞ」

「何と俄に噪ぎ出したものだのう。そして貴様等三人ばかりここにゐるのか。何か後押する者がなくては、貴様の口からそんな強い事が言へる筈がない。サア其事情を、ハツキリと申上げるのだぞ」

「大に後援者がアリスだ。イル丈イくらでも加勢をして下サールのだから、大丈夫だ。貴様のやうな弱將の下に仕へてゐるイルさまぢやない、サア美事生捕れるなら生捕つてみよ。今俺が呼子の笛を一つ吹いたが最後、數百萬の獅子は唸りを立てて此場に現はれ、汝等が如き弱武者を木端微塵に噛み碎き、谷川を紅に染ます迄の事だ。サア吾々三人に指一本でもさへられるものならさへてみよ」

と捻鉢巻をし乍ら大の字に立はだかり、槍の切先も恐れず頼桁を叩いてゐる。

谷道の遙下方より坂を上り来る人聲聞え來たるにぞ、アリス、サムを始め、イル、イク、サールの彼我一行は期せずして、其聲に耳をすましける。

高天原の大空に 常磐堅磐に輝ける

天王星の御國より 下りましたる神柱

梵天帝釋自在天 大國彦の大神を

いつき祭つたバラモンの 神の司の此處彼處

ハルナの都の神柱 大黒主の御言もて

道ひ巡る軍人 齋苑の館に現れませる

神素盞鳴尊をば 屠らむものとハルナ城

都を後に鬼春別の 大將軍を始めとし

ランチ將軍其外の 表面ばかりは錚々と

強さうに見える軍師らが 猛虎の如き勢で

河鹿峠の急坂を 上りてウブスナ山脈の

大高原の齋苑館

占領せむと思ひ立ち

片彦久米彦二柱

先鋒隊の將軍と

選まれイソイソ進み行く  
モウ一息といふ所で

治國別の言靈に  
打たれて脆くも潰走し

今は是非なく山口の  
浮木ヶ原の眞中に

俄作りの陣營を  
構へて敵を捉へむと

手具脛引いて待ち居れり  
吾れは片彦將軍の

部下に仕へしテル、ハルよ  
負た戦の門番を

任され酒に酔ひ狂ひ  
思はず知らず脱線し

大黒主の身の上を  
口を極めて誹謗する

其場へ又ツと現はれた  
大監督のヨル司

團栗眼を怒らして  
片彦下へわれわれを

引立て行かむと威しよる  
此奴ア鱒ぢやなけれ共

酒でいたためてくれむぞと  
仁王の如く立つてゐる

ヨルの左右さいうに葡萄酒ぶだうしゆの 瓶びんを見せつけつめよれば

流石さすがのヨルも辟易へきえきし コロイツと参まゐつて了しまふたり

二打にダースばかりの葡萄酒ぶだうしゆを 瞬またたく内うちに平たいらげて

足あしもよろよろヨルさまは ヨル邊渚べなぎさの捨小舟すてをぶね

殺ころそと生いかそとテル、ハルの 瞬またたく内うちに掌中しやうじゆうに

其運命そのうんめいを握にぎられて くたばり返かへつた面白おもしろさ

流石さすがのヨルもそろそろと 酒さけに誘さそはれ本音ほんねをば

吹出ふきだし心こころの奥底おくそこを 物語ものがたりたる其時そのときの

吾等われら二人ふたりの驚おどろきは 譬たとふる物ものもなかりけり

いよいよこれから急坂きふはんだ テルさまシツカリしておくれ

オイオイ、ヨルさま氣きをつけて 紐ひもにしつかり取とり継すがり

身みの安定あんていを保たもてよや づぶ六ろくさまに酔よひつぶれ

二人ふたりに昇かかれて山坂やまさかを 登のほつて行ゆくとはこれは又また

開闢かいびやく以來いらいの大珍事だいちんじ アイタタタツタ躓つまずいた

オイオイ、テルさまモウここで ヨルをおろしたらどうだろう

これから先は馬だとして 容易に登るこた出来ぬ

あゝ惟神々々 御靈幸ひまませよ

旭は照る共曇る共 月は盈つ共虧くる共

大黒主は強く共 三五教の御道に

進みし上は千萬の 艱難苦勞が迫る共

などや恐れむ敷島の 清き涼しき神心

瀧の流れに身を洗ひ 靈を淨めて休息し

祠の森に隠れます 神の司の御前に

進みて行かむ面白や 祠の森に祀りたる

梵天帝釋自在天 許させ玉へ吾々の

清き願を一言も おとさず洩らさず諾ひて

誠の道に進むべく 守らせ玉へ惟神

世の大元の皇神の 御前に感謝し奉る

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸ひましませよみたまさちは」

ヨル、テル、ハルの三人はランチ將軍の陣營を脱け出し、治國別一行に會ひ、バラモン教の策戦計畫を密告し、自分も亦三五教の爲に盡さむと、酒に酔ひつづれた監督のヨルを山駕籠にて昇つぎ乍らやうやう瀧の下まで登つて來た。此歌を聞かや否や、アリス、サムの兩人は道なき山を驅け上り、何處ともなく姿を隠した。ここに彼我六人は暫し休息の上、祠の森を指して登り行く。

(大正一一・一二・七 舊一〇・一九 松村眞澄録)

(昭和九・一二・二二 王仁校正)

## 第五章 不眠症(一一七四)

治國別、玉國別の一行は祠の前を立出で、上方の以前の森の蔭に各蓑を敷き野

宿ゆくなしゐる。そこへ祠ほらの前まへへ見張みりをさして置おいた五三いそ公こうはいそいそとして走はしり来きたり、

「もしもし、治國はるくにわけ別の先生せんせい、俄にはかにお客きやくさまが見みえました。どう致いたしませうか」

此この聲こゑに治國はるくにわけ別べつは不圖ふとめ目を覺さまし、

「此山このやまの中なかでお客きやくさまを迎むかへた處ところで仕方しかたがない。然しかし乍ながら其客そのきやくと云いふのは如何いかなる人ひとか。大方おほかたバラモン教けうの落武者おちむしやであらうなア」

「ハイ、お察さつしの通とほりバラモン教けうの先生せんせいが三人さんにんやつて来きました。さうして氣きの利きいた奴やつで澤山たくさんな葡萄酒ぶだうしゆを山籠やまかこに一杯いっぱいつめ込こみ來きて居をりますぜ。大方おほかた毒どくでも入はいつて

ゐるのかと思おもひ、詰つめをとつて持もつて來きた男をとこに毒味どくみをさして見みましたが大丈だいぢやうぶ夫ぶです。何なんでも一人ひとりは頭あたまの光ひかつた若年わかとしより寄見よみた様やうなテルと云いふ奴やつ、一ひとつは扇あふぎをパツと開ひらいた

様やうな上うへほど頭あたまのハルと云いふ奴やつ、も一人ひとりは足あしのヨボヨボしたヨ口よぐちとかヨルとか云いふ奴やつさまでムこいますわい。それはそれは乙おつな事ことを云いひますぜ。一ひとつ會あつてやつて下くだ

さいませな」

「チツと靜しづかにものを言いはぬか。皆みなさまがお寢やすみの邪魔じやまになるぢやないか。さう



して如何なる要件か、それを聞いたぢやらうな」

「まだ聞いては居りませぬが、委細はイル、イク、サールの三人が承知してゐる筈です。彼奴が引張つて來たのですからな。滅多に裏返る氣遣ひはありません、先づイル、イク、サールの三人を信用してやつて下さいませ」

「兔も角もここで會ふと皆さまの安眠の妨害になるから、祠の前迄出張することにしようかな」

「ハイ、御苦勞乍ら宜しくお願ひ致します」

と云ふより早く五三公は夜の山坂道を飛鳥の如く跳び下り、祠の前に待つてゐる六人に向ひ、ハアハアと息を喘ませ、

「おい、イル、イク、サール、テル、ハル、ヨル、半打の人間さま、五三公さまの交渉委員は大成功だよ。治國別様が特別を以てお目にブラ下つてやらうと仰有るのだ。さア今にも此處に御出張になるのだから襟を正し、體を直して謹みてお迎へをするが宜いぞ」

「それは誠に早速の御承知、有難い、ヨルの如うな者にも逢つて下さいませか、

これと云ふのも全く神様のお蔭だ」

「之と云ふのも幾分かは五三公さまのお蔭だと云つた處で、あまり元のきれる話ぢやないがな、アハ、ハ、ハ、」

斯く笑ふ處へ靜々と足許に氣をつけ乍ら七人の前に現はれたのは治國別である。

「バラモンからお出になつたお客さまとは、お前さまのことかな」

ヨルは恐る恐る前に進み、頭を二つ三つ撫で乍ら、

「ハイ、私はランチ將軍の恩顧を受けてゐるヨルと申す者でゝいます、實の處は、大に感ずる處があつて三五教の貴方様にお願ひの筋があつて遙々参りました」

「願ひの筋とは何事でゝるか」

「實は私は玉山峠に於て三五教の言靈に敬服致し、又もヤクルスの森に於ても言靈の威力に遁走し、片彦將軍の先鋒隊亦脆くも打破られたと云ふ事を聞くより、信仰の基礎がぐらつき出し、これやどうしても吾々の信ずる神は宇宙根本の神でない。神のために働く戦争が之丈け負續けては、何かの原因がなくてはならぬ。ここは大いに考ふべき處だと沈思黙考の結果、三五教に歸順することに決めたの

でムります。それについてバラモン教のランチ將軍の部下に、最もバラモンに熱心にして且つ頑固の身靈の聞えあるテル、ハルの兩人を歸順させ、之を私のお土産として葡萄酒に添へて引き摺つて参りました。何卒この功に免じて今迄三五教に抵抗した罪をお赦しの上、貴方のお弟子に加へて貰ひ度いものでムります」

「三五教が負るのも勝つのも、バラモン教が負るのも勝つのも皆神様の御攝理だ。一度や二度の軍の勝負によつて神の力を試すと云ふ事は僭越の沙汰でせう。それ位薄弱な基礎の下に入信するやうの人ならば、此先三五教が不幸にして負た時は矢張バラモン教の神の方が偉いと云つて、踵を返し逆轉せなくてはなりません。そんなに氣の變るお方は三五教には居りませぬからな」

「何とまあ、六かしい教でムりますな。決してさう云ふ輕佻浮薄な吾々ではムりませぬ。これにはいろいろの動機がムります。只戦争の話をしたのは御参考のため、一部分の理由を申上げたに過ぎませぬ。第一テル、ハルの如き没曉漢を改心させたのを證據に何卒、入信のお許しを願ひます」

「ハア………」

「モシ宣傳使様、此ヨルの云ふ事は當になりませぬよ。實の處は此ハルと私と兩人守衛を勤めテルと、あまり寒うて退屈なので職務不忠實とは思ひ乍ら一寸一杯聞召して居る處へ、恐い顔して此ヨルさまが見廻りにやつて来て、「こりやこりやその方等兩人は、バラモン神や大黒主様の御事を悪く申し、三五教を褒めて居つたぢやないか。怪しからぬ代物だから、これから兩人を面縛して片彦將軍の面前へ引立ててくれむ」と威猛高になり、それはそれは大變な睨み方でムりました。そこを吾々兩人がうまく酒で釣り込み、泥を吐かして見れば、此奴も矢張心の底に三五教の天國が開けて居ると見え、酔がまはるにつけバラモン教をこき下ろすので、此奴ア大丈夫だと、へべレケに酔うたズブ六さまを駕籠に乗せて、ここ迄上つて來たのでムります。このテルだつて決してヨルの云ふ様な悪い人間ではムりませぬ。又、それほどバラモンに熱心なものでもムりませぬから、御安心なすつて下さいませ。なア、ハル、それに間違ないな」

「テル公の云つた通り一分一厘の相違もムりませぬ。貴方もヤンチャの氏子が殖

えたとおも思つて何卒大目に見て拾ひろひ上げて下くださいませえな」

治國別はるくにわけ「敵味方垣てきみかたかきを造りて争あらそふは

鳥獸とけだものの仕業しわざなるらむ。

天地あめつちを造り給たまひし皇神すめがみは

宣のり直なほすらむ醜しこの枉事まがこと。

三五あななひの道みちを尋たづねて來くる人ひとを

つれなくやらふ道みちしなければ。

招まぎ來きたるテル、ハル、ヨルの三柱みはしらに

生言靈いくことたまの宣のり傳つたへせむ。

今いまよりは誠まことの神かみの氏うぢの子こと

なりて盡つくせよ世人よびとの爲ために」

ヨル 有難し心の花も開くなる

治國別の嚴の言靈。

今日よりは心の垢を拭き拂ひ

安く楽しく道に仕へむ

テル 限りなき恵みの露は四方の國に

潤ひ渡るテルの神國。

テルと云ふは空に輝く日月の

光ばかりか吾頭もてる

ハル 〇ハル過ぎて夏去り秋も亦過ぎて

みたまの【冬】を蒙りにける。

皇神すめかみの恩頼みたまのふゆを受けむとて  
露つゆの生命いのちを存ながらへてけり」

イル」大神おほかみの救すくひの道みちに進すすみイル  
吾われは樂たのしき身魂みたまなりけり」

サール」腹帶はらおびを今いまやしつかり締しめ直なほし  
世よ人のためまことに誠まことを盡つくさむ。  
世よを亂みだす枉まがもサールの神言かみことに  
言向ことむけ和やはす君きみぞ尊たふとき。

清春きよはるの山やまの砦とりでにさし籠こもり  
悟さとり得えたりし三五あななひの道みち。

松公まつこうや龍公たつこうさまの御教みをしへに

バラモン雲ぐもは晴はれ渡わたりける〆

治國はるくにわけ別〆 吾われは今いま八岐やまた大蛇をろちの棲すくいたる

ハルナに行ゆかむ道みちの上へにこそ。

さり乍ながらハルナの國くにはいと遠とほし

百ももの山やま河かは横よこたはりあれば〆

ヨル〆夜晝よるひるに心こころの限かぎり身みの限かぎり

曲まがとは知しらず盡つくし來きにけり。

今け日ふよりは心こころの駒こまを立たて直なほし

皇大神すめおほがみの正道まさみちに入いる〆



話はなし變かはつて森もりの木こ蔭かげに寢やすんでゐた道みち公こう、伊いた太た公こう二人ふたりは目めを覺さまし起おき上あり、

「オイ、道みち公こうさま、祠ほらの前まへには又またもや活くわつ劇げきが悠い々うと初はじまつてるのぢやあるまいかな。一ひとつそつと行いつて見みたらどうだらう」

「さうだな伊いた太た公こう、何なんとはなしに騒さわがしい様やうだ。然しかし吾われ々われに對たいし急きふ用ようがあれば先せん生せいは呼よんで下くださるだらうよ。まアじつくりとしたが宜よからう」

「まづ俺おれが偵てい察さつに行いつて來くるから道みち公こうお前まへはここ待まつてゐてくれぬか」

「そいつは御ご免めんだ。又また此この間あひだの樣やうに清きよ春はる山やまにつれて行ゆかれちや俺おれ達たちの迷めい惑わくだから…もし此この道みち公こうが、怪あやしいものだつたら獨どく特とくの哄こう笑せう器きを出だして此この間あひだのやうに笑わらひ散ち

らしてやるのだ。まア待まつてくれ。俺おれが行いつて來くる」

「笑わらひ散ちらしたと思おもへば宣せん傳でん使し樣さまの弟おとうとぢやなかつたか。そんな他た愛あいもなし事ことなら、伊いた太た公こうだつて一いつ旦たん痛いた手てを負おうた上うへは充じゆつ分ぶんの注ちゆい意いをして居をるから大だい丈ぢやう夫ぶだよ。俺おれで

も笑わらひ散ちらし位くらゐは出で來きるよ」

「そんなら道みち公こうが道みち案あん内ないをしてやらう。貴き樣さまはどうしても捕ほり虜よの身み魂たまが憑ついて居ゐるから駄だ目めだ。三さん間げんばかり後あとから俺おれに跟ついて來こい。もし怪あやしい事ことでもあつたら一いつ

生懸命に走つて來るのだ」

「大變に信用を落したものだ。併し神様には信用を受けて居るのだから安心だ。一つここから、治國別様に違ひないから、唵鳴つて見たらどうだらう」

「馬鹿云ふない。大きな聲を出しちや皆が目が覺めるぞ。治國別様が、道公が目を覺まして聞いて居れば俺が寢んで居るものと思ひ、五三公と一緒にひそひそと話して居られたが、何でも何々が何々に來て居るのかも知れぬぞ」

「さうすると道公は寢んでゐる様な顔して起きて居たのだな」

「俺は此頃流行る不眠症とかに罹つてゐるのだが、夜になると目が冴えて神經が興奮して一寸や、そつとには寢られぬのだよ。道公も實に「ふびん」なものだ。

「アハ、ハ、ハ、」

「オイ兩人、そつと行かぬと出来ないぞ。純公さまが目を覺ましちや氣の毒だからな」

「アハ、ハ、ハ、何を云ふのだ。目を覺ましておりやこそ喋つて居るのぢやないか」  
「純公の肉體は寢て居るが、俺や一寸夢を見てゐるのだ」

「夢だか現だか、馬鹿だか、伶俐だか、一寸も測量の出来ない代物だな」

「國治立尊様ぢやないが、スになりましたすみきり給ふと云ふ立派な身魂だから、人間位の智慧で純公さまの智慧がどうして測量する事が出来るものかい。人間に測量出来る様なものは最早神でも何でもない。チヤンときまりきつた相場がついてゐるのだ。馬鹿とも阿呆とも分らぬ處に、純公さまの神格が縦横無盡に活躍してゐるのだよ。それだから此純公さまは隅にも置けないと、何時だつたかな、五十子姫さまがお褒め遊ばした事があるよ」

「それは大方夢だつたらう。なア道公、こんな男を褒めるとは、五十子姫さまも一寸如何かしてゐるぢやないか。さうぢやなければ純公さまが夢を見たのかも知れぬぜ」

「人間は夢の中で夢を見てゐるのだよ。そんな事を大體、本當に見てゐるのが馬鹿だ。人の正邪賢愚が分るものかい。況して落ちた眞珠に氷が張つた様な肉眼では外面だけでも観察する事は不可能だ。況ンや身内に於ける清淨無垢有爲の精神に於てをやだ」

「オイ、ガラクタ共、何を八釜しく云ふのだい。いい加減に寝まないかい、萬公さまの俺は第一、晴公さまは申すに及ばず、五十子姫様、今子姫様、玉國別様の御迷惑だ。さアさア寝たり寝たり。治國別さまが御出張になつてゐるのだから大丈夫だよ。吾々如き小童子武者が起きて居つても何になるものか。起床喇叭が鳴るまで神妙に就寝するのだな」

「いや仕方がない。それもさうだ、道公、純公、萬公寝やうかい。もう夜明けに間もあるまいし、只今と云ふ此時間には萬劫末代取返す事は出来ぬのだから、思ひきつて寝まうぢやないか、伊太公も眠いからのう」

五十子姫「玉國別神の命のいたづきも

早や鎮まりて月は輝く。

皇神の恵の露を浴び乍ら

風に吹かれて寝ぬる嬉しさ

玉國別は目を覺まし、

□ 大空に輝き渡る月の玉を

國別け渡らし進む尊さ。

治國別神の命は雄々しくも

醜の司を教へ居ますか。

吾も亦神の司と選まれて

來りし上は救はでおくべき。

右の目の吾いたづきも止まりけり

月の御神の光浴びしより

鳥は聲を限りに囀り初めた。  
斯く歌ふうちに十七夜の月は西天に色褪せ、鵲の聲はカアカアと清く響き、百

(大正一一・一二・七 舊一〇・一九 北村隆光録)

第六章 山下り（一一七五）

治國別、玉國別の一行は日當りのよき祠の前に集まつてヨルの話を聞いて居る。

治國「ヨルさま、さうしてランチ將軍は、浮木ヶ原に陣屋を構へ持久戦をやる心算だな。なぜ大擧して河鹿峠を渡らないのだらうか」

「どうしてどうして、ランチ將軍は進退維谷まると云ふ羽目に陥つて居るのですよ。貴方方が此處にかうして居られる限り、この峠は突破する事は出来ないのです。そこで止むを得ず浮木ヶ原に陣屋を構へハルナの都に急使を馳せて、「敵の軍勢數十萬押寄せ來れり、徒に進まば勞して功なし、暫く浮木ヶ原で陣を構へ敵を自然に降伏せしむる計劃なり」との報告をやつたのですよ。併し到底勝利の見込がつかぬので、鬼春別將軍は久米彦將軍を伴ひ、大黒主様に對し言ひ譯のためだと云つて、實の處はフサの國を渡り、エルサレムの黄金山に向つて進軍する事になつて居ります」

何？ 黄金山へ進軍すると、それや初耳だ。玉國別さま、これやかうしては

居ゐられますまい。吾われ々はハルナの國くにの大黒主おほくろぬしを言こと向むけ和やはすのが使し命めいだが、先鋒隊せんぽうたいとして照國別てるくにわけ、黄金姫わうごんひめがで居をられるのだから、貴方あなたは此この河鹿峠かじかたうげを扼やくし、敵てきの襲來しゅうらいを喰くひ止とめなさいませ。吾われ々は敵てきの圍かこみを突とつ破ぱしてエルサレムの救きう援えんに向むかひませう。なア五十子姫いそこひめさま、どんなものでせう」

「左様さやうでこりこますなア、これは容よう易いならざる問題もんだいですから、一ひとつ神様かみさまに伺うかがつて見みませう。其神勅そのしんちよくによつてお極きめなさいませ」

「なる程ほどよい處ところへお氣きがつきました。それなら、これから貴女神主あなたかむぬしとなつて下ください。私わたしが審神さにはを致いたしますから」

「暫しばらく靈媒れいばいはやめて居ゐましたからどうか存ぞんじませぬが、兔とに角神様かくかみさまに願ねがつて見みませう」

と云いひながら、五十子姫いそこひめは大地だいちに蓑みのを敷しきて其上そのうへに端坐たんざし、目めを閉とぢ兩手りやうてを組くみ、靈魂れいこんを宇宙うちうに馳はせける。暫しばらくありて神靈感應しんれいかんのうありしと見みえ、五十子姫いそこひめの面めん部ぶは益々ますます麗うるはしく輝かがき初はじめたり。治國別外はるくにわけほか一同いちどうは、ハツと其場そのばに頭かしらを下さげ畏かしこまる。五十子姫いそこひめは口くちを切きつて、

「我は國照姫の命なり。汝治國別、玉國別の神司、バラモン教の鬼春別が黄金山へ軍隊を引きつれ進撃する件に關し去就に迷うて居るやうだが、我は今神素盞鳴大神の御心を體して汝に一切を宣り傳ふべし。これより治國別は萬公、晴公、五三公、松公、龍公と共に、ランチ將軍の陣營を突破し、ペルシヤを越えて黄金山に進めよ。鬼春別の軍隊は未だ遠くは往かじ、今追跡せば、或は途中にて喰ひとめ得むやも計り難し。又玉國別は此處に國祖大神、豊國姫命の御舎を造り且つ教の庭を立て竝べ、齋苑の館の咽喉たるべき河鹿峠を守るべし。サア明日より森の樹を伐採し土引きならし建築に従事せよ。早くも齋苑の館よりは、大工、左官、手傳、石工など此方に向つて急ぎ來る途中なれば、玉國別は此處に留まつて眼の養生を致されよ。又五十子姫は今子姫と共に夫の眼病全治する迄留まつて介抱すべしとの大神の御宣示である。我はこれにて汝に宣べ傳ふる事なし、サラバ」

「一言を残し、神靈は歸らせたまひぬ。バラモン教から歸順した松、龍を初めイル、イク、サール、ヨル、照、晴の面々は、五十子姫の莊嚴なる神懸の威勢に打たれて襟を正し、息を凝らし畏縮し居たりける。」



唯今の御神勅によれば、どうしても吾々は鬼春別の軍勢を喰ひ止めなければなりません。これから時を移さず出陣致しませう。何卒貴方は御神勅通り、此處の探題となつて咽喉扼守の御用をして下さい、暫くは御造營でお忙しい事でございませう。まづ第一にランチ將軍の陣營を、メチヤメチヤに踏み碎き、神力を現はすのを樂しみに、勇んで参ります。玉國別様、何卒御自愛なさいませ。五十子姫様今子姫様其他御一同左様ならば」

と云ふより早く、スタスタと五人の伴を引き連れ急坂を下りゆく。治國別は道々宣傳歌を歌ふ。

此世を造り固めたる  
四方に塞がる雲霧を  
善神邪神を立てわけて  
木草のはしに至るまで  
吾は嬉しき宣傳使

誠の神が地に下り  
息吹に拂ひ清めつつ  
蒼生や鳥獸  
救はせたまふ尊さよ

神素盞鳴大神の

勅畏み曲神の 征途に上り進み往く

河鹿峠の急坂を 上りつ下りつ攻め来る

數多の敵を追ひ散らし 日頃焦がれし弟に

思はぬ處で巡り遇ひ 勇氣も日頃に百倍し

いよいよ此處にバラモンの 寄手に向つて突喊し

三五教が獨特の 大神徳を發揮する

時こそ正に來りけり 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

誠の道の宣傳使 浮瀬に落ちて苦しめる

世人を救はでおくべきか 惡の靈を悉く

生言靈に言向けて 生かして進む宣傳使

鬼春別の軍勢は たとへ幾萬ありとても

皇大神の與へたる 生言靈を打ち出し

一人も残さず皇神の 誠の道に救ふべし

勇めよ勇め皆勇め  
進めよ進めよ いざ進め

河鹿峠は嶮しとも  
虎狼は猛るとも

神の守りのある上は  
天下に恐るるものはなし

あゝ惟神々々  
神の恵の幸はひて

吾一行の往く先を  
いと平らけく安らけく

守らせたまひて逸早く  
神の御前に復り言

申させたまへ惟神  
貴の御前に願ぎまつる

あゝ惟神々々  
御靈幸倍ましませよ

萬公は急坂を下りながら足拍子を取つて歌ふ。

風吹き荒ぶ河鹿山  
世界に名高き急坂を

齋苑の館を立ち出でて  
治國別の宣傳使

晴公、五三公従へて  
進み出でます雄々しさよ

漸く絶頂に登りつき 月の光を浴びながら

南に向つて下る折 やつて来たのはバラモンの

腰抜け武士の一團だ ウントコドツコイやつて来たな

俺の力の試し時 生言靈の連發を

やつて見ようと坂道に 大手を擴げて打ち出すは

神力無限の言靈だ 恐れて忽ち敵軍は

算を亂して逃げて往く ウントコドツコイ ドツコイシヨ

其スタイルの面白さ 勝に乗じて急坂を

神の御歌を歌ひつつ ウントコドツコイ ドツコイシヨ

足の拍子を取りながら 祠の森に来て見れば

玉國別の宣傳使 伊太公さまを敵軍に

奪はれたりと聞くよりも いろいろざつたと胸痛め

漸く神の御恵で 昨日の敵も今日は早

味方となつて松公さま 治國別の弟と

聞いたる時の驚きは 山の崩るやうだつた

ウントコドツコイ此坂は だんだん峻しくなつて来た

晴公、五三公氣をつけよ 松公と龍公も其通り

足の爪先に氣をつけて 迂らぬやうに降りて来い

左手は千尋の谷間だ 右手は断岩絶壁だ

猿の奴めがキヤツキヤツと 怪體な聲で啼いて居る

これやこれや畜生猿の奴 玉國別とは違ふぞよ

神力無雙の宣傳使 治國別のお通りだ

下らぬ眞似をさらしよると この萬公が承知せぬ

早く立ち去れ逃げて往け 貴様の出て来る幕ぢやない

アイタ、アイタ、又迂る 踵の皮をすりむいた

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 三五教の吾々は

神の力を身に帯びて 八ルナの城に蟠る

八岐大蛇の醜魂を 山の尾上や河の瀬に

追ひのけ散らしエルサレム 珍の都に聳りたつ

黄金山に向ふなる 鬼春別の軍隊を

片つ端からことむけて 神の御國の福音を

傳へにや置かぬ吾一行 厚く守らせたまへかし

高天原の靈國や 天國樂土に集まれる

神々様も吾々が 忠誠無比の眞心を

憐れみたまひて逸早く 神素盞鳴大神の

嚴の御前に復り言 申させたまへ惟神

謹み敬ひ願ぎまつる あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

晴公は又歌ふ。

古今無雙の宣傳使

治國別の一行は

天地の花と謳はれて

美名を萬世に轟かし

現し世の事皆終へて

靈の故郷の天國へ

意氣揚々と進むべく

其歡樂の大基礎を

造らむための首途だ

あゝ有難し有難し

神素盞鳴大神の

瑞の御靈の思召

如何に嵐は強くとも

雨は烈しく降り來とも

焼くるが如き夏の日の

大炎熱も何のその

神に任ししこの體

如何でか吾はたゆまむや

ウントコドツコイ

ドツコイシヨ

段々坂がきつくなつて

轟々云ふのは谷水か

木の間を透して眺むれば

白き飛沫が光つて居る

天下に無比の絶景だ

俺も一旦神業を

遂行したる暁は

この麗しき谷水を

眺めて一つ樂隠居

ウントコドツコイして見たい ヤットコドツコイそんな事

思おもうて居をつたら神かみ様に御お罰ばつをうけるか分わからない

心こころの駒こまが躍をどり出だし 思おもはず脱だつ線せんドツコイシヨ

アイタ、タツタ致いたしました 罰ばつは覲てきめん面あし足の爪つめ

尖とがつた石いしで打うちました まことに危あぶない坂さか道みちだ

人ひとの運うん命めいもこの通とほり 油ゆ断だんをしたらドツコイシヨ

忽たちち轉てん落らく目まのあたり する事こと爲なす事こと躓つまづいて

勝しょう利りの都みやこにや往ゆかれまい あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

直なほ日ひに見み直なほし聞きき直なほし 許ゆるさせたまへ天地あめつちの

皇すめ大神おほかみや百ももの神かみ 珍うづの御み前まへに願ねぎまつる

吾わが往ゆく先さきに待まつて居ある ランチ將しやう軍ぐんドツコイシヨ

鬼き神しんを挫くじく勇ゆうあるも 生いく言こと靈たまの神しん力りきに

かけてはドツコイドツコイシヨ 一ひと耐たりなく亡ほろぶだらう

思おもへば思おもへば勇いさましや 朝あさ日ひは照てるとも曇くもるとも



月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

此面白き言靈の 戦がどうしてやめられうか

萬公、五三公しつかりせ お前は元來氣の弱い

口計りの人間だ これから心を取り直し

お臍の下に靈魂を 確り据ゑて進み往け

決して悪い事は云はぬ お前を大事と思ふ故

老婆心かは知らねども 友達甲斐に氣をつける

ウントコドツコイ、ヤットコシヨ これから先は緩勾配

足の進みも樂になる 歌を歌ふはこれからぢや

治國別の一行は 天地に恥ぬ信愛の

誠の道を實行し 世人の鑑と歌はれて

暗黒界の光明と 現はしたまへ惟神

神の御前に願ぎ奉る あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

と歌ひながら山口さして下り往く。

(大正一一・一二・七 舊一〇・一九 加藤明子録)

(昭和九・一二・二三 王仁校正)

第七章 山口の森(一一七六)

五三公は急坂を下り乍ら稍緩勾配になつたのを幸ひ、眞先に立ちて歌ふ。

高天原の靈國に 現はれ玉ふ主の神は

天が下なる民草の みたまを清め愛信の

道を體得せしめむと 三五教を開きまし

悪にくもりし人々の 心に眞如の日月を

照らさせ玉ふぞ有難き 齋苑の館に名も高き

五三公さまは選まれて  
治國別の伴となり

烈風すさぶ河鹿山  
峠を難なく打渡り

曲の軍を追散らし  
さしもに嶮しき下り坂

易々渡り玉國別の  
神の命がこもりたる

祠の森に辿りつき  
ここに二夜を明しつつ

バラモン教の人々を  
數多言向け和し置き

又もやのり出す膝栗毛  
心の駒も勇み立ち

吾身をのせて進み行く  
あゝ惟神々々

尊き神の御恵みに  
人と生れし天職を

完全に委細に盡し了へ  
皇大神の御前に

復命したるその上は  
高天原の「みのり」にて

靈の迷ふ八衢や  
根底の國に落さずに

此身此儘天國の  
夜なき國へ導きて

第二の吾れを末長く  
守らせ玉へ惟神

神は吾等と共にあり

神の御子と生れたる

わが身の上の頼もしさ

朝日は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共

假令大地は沈む共

三五教の皇神の

守らせ玉ふ言靈を

無上唯一の武器となし

八岐大蛇のわだかまる

醜の教を悉く

言向け和し地の上に

高天原の樂園を

開き奉らでおくべきか

吾は賤しき身なれども

神の光に照らされて

奇しき功を立てし上

えり立てられて宣傳使

仕へ奉るも遠からじ

ランチ將軍片彦の

軍勢は如何に強くと

わが言靈を打出せば

雲霞の如き大軍も

風に木の葉の散る如く

鷹に逢ひたる小雀の

戦き騒ぎ逃ぐる如く

言向け散らすは目の當り

あゝ惟神々々

祠ほくらの森もりに残のこされし  
神かみの恵めぐみの幸さちはひて  
善ぜんをば盡つくし美びを盡つくし  
高たか天あま原はらに千ち木ぎ高たかく  
國こく家か鎮ちん護ごの靈れい場ぢやうと  
神かみの御み前まへに五い三そ公こうが  
あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら  
御み靈たま幸さちはひましませよ  
玉たま國くに別わけの一行いっかうは  
谷たに間まをひろげ土つちをかき  
大おほ宮みや柱はしら太ふとしりて  
瑞みづの舍み仕あらかへまし  
開ひらかせ玉たまへ惟かむ神ながら  
赤まご心ころこめて祈ねぎ奉まつる

ウラルの神かみのこもりたる  
大おほ氣げ津つ姫ひめの一族いちぞくが  
追おはれて常とこ世よへ逃にげしより  
數あまた多たの兵つは士もの引ひ率きつれて  
城しろの周まりに火ひを放はなち  
その名なも高たかきアーメニヤ  
コークス山ざんの神しん人じんに  
バラモン教けうは虚きよに乗じやうじ

焼き盡したる悲しさに

一人の兄を尋ねむと

暗にまぎれてアーメニヤ

立出で四方の國々を

さまよひ居たる折もあれ

バラモン教の捕手等に

思はぬ所で見つけられ

危き生命を救けられ

隙を窺ひ虎口をば

漸く逃れて駆け出し

月の國々巡歴し

ウラルの教の聖場を

兄は居ぬかと尋ねつつ

二年三年経つ内に

バラモン教の神司

エール、オースに見出され

拔擢されて片彦が

祕書役までも上りつめ

大黒主の命を受け

齋苑の館へ攻めよする

軍の中に交はりて

駒に跨りイソイソと

河鹿峠に来て見れば

三五教の神司

治國別の言靈に

打なやまされ散々な

憂目に出逢ひ片彦や

部下の軍兵悉く

雲を霞と逃げ散りぬ

後に残りし吾々は

薄の穂にも怖れつつ

足をしのばせ山神の

祠の前に来て見れば

豈はからむや兄さまの

龜彦さまは言靈の

妙力得たる宣傳使

治國別と相分り

狂喜の涙やるせなく

道公さまのもてなしで

治國別に對面し

名乗り玉へと訪へど

バラモン教に仕へたる

汝の如き弟は

わが身に持てる覺えなし

なぞと首を横にふり

劍もほろろの御挨拶

頼みの綱も切れはてて

取つく島も泣ジャクリ

わが捕へたる伊太公を

玉國別の御前に

返し奉らにやどうしても

兄弟名乗は出來よまいと

早くも胸に悟りしゆ

龍公さまを伴ひて

青春山の岩窟へ

到りて伊太公救ひ出し

漸く兄の怒りをば 解いたる時の嬉しさよ

それにまだまだ嬉しいは ハルナの都に蟠まる

八岐大蛇の征討に 参加なさしめ玉ひたる

神の尊き御恵み 幾千代迄も忘れまじ

假令天地はかへるとも わが魂は永久に

巖の如く動かさじ 短き此世に存らへて

有らむ限りの力をば 盡し了りて神の身の

夜なき國の樂みに 浴し奉らむ嬉しさよ

治國別の宣傳使 此松公が言の葉を

完全に委曲にきこし召せ 皇大神の御前に

祈らせ玉へ惟神 神かけ念じ奉る

と歌ひつつ行くのは、治國別の弟松公にぞありける。

龍公は又歌ふ。



☐ 朝日は照る共曇る共  
月は盈つ共虧くる共

假令大地は沈む共  
バラモン教の悪神を

言向和し神國の  
榮えを世界に輝かし

生きては此世の神となり  
死しては高天の天人と

なりて常世の花の春を  
歡ぎ樂しむ靈にと

すすませ玉へ惟神  
われ等は神の子神の宮

肉の宮をば脱出し  
夜なき國へ行く時は

吾一代の功名を  
神はうべなひ玉ひつつ

數多の乙女を遣はして  
歌舞音樂を奏しつつ

芳香四方にくゆらせつ  
榮え久しき天國に

歡び迎へ給ふまで  
心を盡し身を盡し

善と眞とを地の上に  
輝き渡し三五の

神の御むねに叶ふべく  
守らせ玉へ天地の

畏き神の御前に  
龍会社が謹みて

一重ひとへに願ねがひ奉たてまつる 此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ 唯何事ただなにごとも人ひとの世よは

過あやまち多おほきものならば 廣ひろき心こころに宣のり直なほし

又またもや見みなほ直ほし聞きき直なほし 許ゆるさせ玉たまへ惟神かむながら

神かみの御前みまへに願ねぎ奉まつる

斯かく歌うたひ乍ながら漸やうやくにして山口やまぐちについた。谷川たにがはは左ひだりにそれて水音みなおとさへも聞きえなく

なつて來きた。此處ここには可かなり大おほきな老樹らうじゆの茂しげつた森もりがある。之これを山口やまぐちの森もりといふ。

一行いっかう六人ろくにんは夜露よつゆを凌しのがむと宵暗よひやみの中なかを足あしさぐりし乍ながら進すすみ入いる。古ふるい祠ほこらの跡あとと見み

えて臺石たいいしばかりが殘のこつてゐる。此處ここに一行いっかうは蓑みのをしき一夜いちやを明あかす事こととなりける。

治國別はるくにわけ 山口やまぐちの時雨しぐれの森もりに來きて見みれば

鳥とりさへ鳴なかぬ暗やみの靜しづけさ。

此先このさきはバラモン教けうの戰士いくさびと

われを討たむと待ち構ふらむ。  
如何程の猛き魔人の攻め來とも  
わが言靈に伊吹き拂はむ

萬公 月かげもなきくらがりの木下暗

明かして通る吾師の一行。

河鹿山漸くここに下り來て

神の恵みに一息するなり。

御恵みの露は邊りに光れども

月なき夜半は見るすべもなき。

やがて又東の空をてらしつつ

月の大神上りますらむ

晴公はるこう 『星ほしかげは眞砂まさごの如ごとく輝かがやけど

木の葉こはのしげみに隠かくれましぬる。

よをてらす月の御神みかみの功いさをしは

天照あまてる神かみに劣おとらざるなり。

天傳あまつたふ月日つきひの神かみの御みめぐみに

人ひとはさらなり萬物ばんぶつ榮さかゆく』

五三公いそこう 『齋苑館いそやかたしづまりゐます素盞鳴すさのをの

瑞みづのみかげを今いまぞしのばゆ』

松公まつこう 『道みちのため世よのため盡つくす赤心ましろこころは

暗夜やみよを照てらす月つきにあらずや。

あかつき そら  
曉の空をてらして紅の  
くれなゐ

くも おしわ のほ ひ  
雲を押分け上る日の神。  
かみ

ゆふぐれ そら かがや  
夕暮の空に輝く三日月に

あま いはと あ おも  
天の岩戸の開けしかとぞ思ふ。

つき み もも き  
月見れば百のうきごと消えて行く

みづ みたま あら  
瑞の靈の洗ひますらむ。

ひと みな ゆべ みち かむながら  
人皆の行く可き道は惟神

かみ こころ かな  
神の心に叶はむがため。

このもり いちや あ あす また  
此森に一夜を明かし明日は又

うきき もり あめ  
浮木の森に雨やどりせむ  
」

たつこう  
龍公「バラモンの醜の司の此處彼處

つかが こころ  
伺ひよらむ心しませよ。

片彦の目付の神は河鹿山

山口四邊に彷徨ふと聞く

治國別 何事も神の心に任すこそ

人の行く可き大道なるべし

此處に一行は蓑を布き夜露を冒して安々眠りに就きにける。

（大正一一・一二・七 舊一〇・一九 外山豊二録）

（昭和九・一二・二六 王仁校正）

第二篇 月明清楓

第八章 光と熱（一一七七）

天王星の精靈より

降り玉ひし自在天

大國彦を主神とし

靈主體從の御教を

普く宇内に輝かし

世人を救ひ守らむと

計りて立てるバラモンの

教は元より惡からず

さは去り乍ら現幽の

眞理を知らず徒に

輕生重死の道を説き

有言不實行に陥入りて

地上の人は艱難に

耐へ忍びつつ生血をば

出して神に供物

なす時や神の御心に

叶ふものぞと誤解して

知らず知らずに曲つ神

八岐大蛇に迷はされ

人を救はむ其爲に

却て人を根の國や

底の國へとおとしゆく

其慘状を憐みて

高天原の主の神と

現はれ玉ふ嚴御靈

國治立の大神は

天地上の別ちなく

大御寶の靈をば

永遠無窮に救ひ上げ

慈愛と信仰の正道に

導き恩賴をば

與へむものと日に夜に

心を配らせ玉ふこそ

實に有難き次第なり

常世彦神常世姫

これ亦惡魔に魅せられて

ウラルの教を建設し

盤古神王を主の神と

仰いで世界を開き行く

其勢ひの凄じさ

至仁至愛の大神は

いかでか許し玉はむや

神の御子たる人草の

身魂を清く美はしく

洗ひ清めて天國の

御苑を開かせ玉はむと

嚴の御靈の神柱

瑞の御靈の御柱を

此世に降し玉ひつつ

いろいろ雑多に變化して



埴安彦や埴安姫

神の命と現はれつ

三五教を建設し

黄金山は云ふも更

ウブスナ山や萬壽山

コーカス山や靈鷲山

自凝島に渡りては

綾の聖地に天國の

姿を映し玉ひつつ

世人を誠の大道に

救はせ玉ふぞ有難き

瑞の御靈とあれませる

神素盞鳴の大神は

現幽神の三界の

身魂を残らず救はむと

尊き御身を世に下し

千座の置戸を負はせつつ

天が下をば隅もなく

人の姿と現はれて

沐雨櫛風冰雪を

凌ぎて此世の熱となり

光ともなり鹽となり

みのりの花と現はれて

暗に迷へる諸々の

身魂を救ひ玉ふこそ

實にも尊き限りなれ

神の教の宣傳使

治國別の一行は

嚴いづの御言みことを蒙かつむりて 元もとつ御神みかみの祭りまつたる

齋苑いその館やかたを後あとにして 荒風あらかぜすさぶ荒野あれのほら原

險けはしき山坂やまさか乗越のりこえて 祠ほらの森もりに到着たつちやくし

玉國たまくに別のわけ一行いっかうに 思おもひ掛がけなく出會しゆくわいし

茲ここに二夜ふたやを明あかしつつ 別わかれて程經ほどへし弟おとうとの

松公まつこう其他そのたに巡めぐり會あひ 驚喜きやうきの涙抑なみだおさへつつ

又またもや神かみの御宣示ごせんじに 五ご人の伴ともを引ひきつれて

河鹿かじか峠たうげの峻坂しゅんぱんを 世よにも目出度めでたき宣傳せんでん歌

歌うたひてやうやう山口やまぐちの 老樹らうじゆ茂しげれる森もりかげに

安全あんぜん無事ぶじに着つきにけり 老樹らうじゆ茂しげれる森もりかげに

神かみの御靈みたまの幸さちはひて 治國はるくに別のわけ一行いっかうは

神かみの使命しめいを恙つつがなく 實行じっかうなして復かへり言ごと

神かみの御前みまへに申まをすべく 守まもらせ玉たまへと瑞月ずめげつが

旭あさひの光ひかりを浴あび乍ながら 龍宮りうぐう館やかたに横臥わうぐわして

東枕ひがしまくらに述のべ立たつる

あゝ惟かむながらかむながら神々々

尊たふとき神かみの御みめぐみ恵みに

此このものがたり物語ちたい遲ち滞たいなく

進すすませ玉たまへ天地あめつちの

元もとつ御み祖おやと現あれませる

國くに治はる立たの大神おほかみや

豊とよくにひめ國おほかみ姫かみの大おほかみ御み神かみ

神かむすさのを素おほかみ盞おほかみ鳴おほかみの大神おほかみの

御みまへ前つしに謹つしみ願ねぎまつる。

治はる國くに別に一いつ行かうは老らう樹じゆ鬱うつ蒼さうたる河か鹿じか山やまの南なん麓ろく山やま口ぐちの森もりに黄た昏そ時が漸れくき到やう着やくし、晝ひる猶な暗ほくら

昔むかしは山やま神かみの祠ほこらと云いつて、大おほ山やま祇まつ神かみが祀まつられてあつた。自し然ぜんの風ふう雨うに晒さらされ荒くわ廢わい

に任まかされ、乞こ食じきの焚たき火びの爲ために祝し融ゆ子うしの災わざはひにかかりしまま、再さい建こんするの機き會わいもな

く、又また熱ねつ心しんなる信しん仰かう者しやもなく、憐あはれ果はかなき殘ざん骸がいを止とどめてゐたのである。それ故ゆゑ

に此この森もりは何なに神がみの祀まつられありしやを知る者ものは殆ほとんどなかつた。併しかし乍ながら此この森もりは相さう當たう

に廣ひろく足あしを踏ふみ入いれた者ものはない。もし誤あやままつて森しん林りん深ふかく進すすみ入いりし者ものは、再ふたび歸かへり

來くることなきを以もつて、一いち名めい魔まの森もりとも稱となへてゐた。何なんでも巨きよ大だいなる蛇へび潛ひそみ居をりて、

人を呑むとさへ稱へられ人々に恐れられてゐた。

河鹿峠の祠の森は、實際は自在天を祀つたものであるが、いつとはなしに山の祠と稱へらるるやうになつた。それは此山口の森の神と混同されて了つたのである。すべて古き神社の祭神の不明になるのは、右様の理由に依るものが甚だ多いやうである。

萬公は鼻をつままれても分らぬ様な暗さに、空を打仰ぎ、梢をすかして星の半片だも見えざるやと、憧憬の心を以て、上方を眺めて居る。

何とマア暗いと云つてもこれ位暗い森はありませぬなア。月も星も太陽も、一つも残らず、大蛇の様に呑んで了つたと見えますワイ。此奴ア山口の森といふから、山位呑むのは何でもないと見える。天の星さへ一個も残らず呑んで了うといふ怪しい森だからなア。オイ、晴公、氣をつけないと、此森の奴、俺達の身體も一緒に呑みよるか知れぬぞ。萬公が氣を付けるぞよ」

「ナアニ、曇つてゐるのだよ。やがて此晴さまがお這入りになつたのだから、すぐに空が晴るるのは受合ひだ」

「そら」何を言ふ。何程晴れたつて、此密樹の蔭をすかして、如何して人間の目で、天の星が見えるものかい」

「ナア二松公さま、心配御無用だよ。晴公の生言靈の神力に依りて、大蛇も悪魔も千里の外に却け、天津御空を水晶の如く晴らして御覽に入れる、さうすればお前も疑を晴らすだろ」

「お前の言靈も怪しいものだ。先生の言靈はすぐに神力が現はれるが晴公の言靈と云つたら、ダミ聲の皺枯れ聲、晴れる所か俺達の心迄陰鬱になり、耳が痛くつて、根底の國へ落ちるやうな氣分がするよ、この萬公さまにはよ」

「ナア二、先生の言靈だつて、晴公さまの言靈だつて、言靈に違があるか、信仰に古い新しいの區別がないと、神さまは仰有るぢやないか」

「それなら一つ言靈を以て、萬よく此暗をチツとでも明かくしてみたらどうだ、それが現實の證據だから、それ見た上で萬公さまも満足するからナ」

「先生がアオウエイと仰有る言葉も、晴公さまのアオウエイと云ふ言葉も別に違ひはないぢやないか、言靈といふものは圓滿清朗スラスラと樂に出さへすれば、

天地の神明が感動遊ばすのだ、俺達は百遍位言靈を繰返してもチツとも苦しうないが、かう云ふと先生にお目玉を頂戴するか知らぬが、此間も先生がアオウエイの言靈を發射された時、ズツポリと汗をかき、半巾を以てソツと顔を拭いてゐらつしやつたぞ。年が老るとヤツパリ腹に力がないと見えるワイ。なア先生、さうでしたね工」

「ウン、俺も若い時や、言靈の百遍や千遍言つた所で、チツともエライとも苦し  
いとも思はなかつたが、此頃はお前の言ふ通り年の爲か、天津祝詞を一回奏上し  
ても、身體中が嚴寒の日でもビシヨぬれになるのだ。併し乍ら、若い時の千遍よ  
りも今の一遍の方が效能があるのだから、不思議だよ」  
「オイ、晴公、お前の言靈は暗に鐵砲だ。的の方向も知らずに、安玉を亂射して  
ゐるのだらう。一寸涼し相な浪花節のやうな聲を出しよるが、根つから利いたこ  
とはないぢやないか、きくといふのは俺達の耳丈だ。チツトも言靈の機能が現は  
れて來ぬのだから、何と云つても、ヤツパリ木つ端武者は木つ端武者だよアツ  
ハ、ハ、」

晴公は躍氣となり、少しく鼻息を荒くし乍ら、

「コレヤ萬州、餘り馬鹿にするない。人は見かけによらぬ者だ。どんな隱藝があるか分つたものぢやないぞ。待て待て一つ言靈の神力を現はして、萬公の奴に萬々と驚異の歎聲を連發さしてやらう。捻鉢巻をして頭のわれぬやうに、臍の宿替をせぬやうに、腹帯をしつかりしめて居れ。四十八珊の巨砲を打出したやうな言靈だから、聽音器を破損せぬやうに用意をしておけよ。サア、いよいよ言靈發射の筒開きだ。一二三ン」

と言ひ乍ら、臍下丹田に息をつめ、左右の手で、帯のあたりをグツと握り、身體を直立になし、

「烏羽玉の暗打ち拂ふ吾なるぞ

御空を晴らせ天津神たち。

ウ……………ン

「アハ、ハ、ハ。暗がりくらりで雪隠せんちへ行いつた様な按配式あんばいしきだ、何なんだウンウンと、きばり糞ぐそをたれるやうな、蠻聲ばんせいをこき出だしよつて、チーツとも明あかくならぬぢやないか。

萬公まんこうさまの目めにはだんだん暗黒あんこくの度どが増まして來きた様やうだよ」

「天てんの神様かみさまにも準備じゆんびがある。今いまいうて今いまといふ事ことがあるかい。明あかくなる前まへには

一旦いつたんくら暗くらくなるものだ、光明くわうみやうの前まへの暗黒あんこくだ。ウラル教けうぢやないが……一寸いっすんさき先さきや暗夜やみよ、

暗やみの後あとには月つきがでるのだからマア二時ふたとき計ばかり待まつてゐよ、さうすれば俺おれの言靈ことたまで月つき

がパツと東天とうてんから輝かがやいて來くるワ、それを證據しやうこに疑うたがひを晴はらすのだよ」

「アハ、今夜こんやは十八日じふはちにち、四ツ時よつときになれば月つきの上あがるのはきまつてゐるワイ。貴様きさま

の言いひ草ぐさは春はるになつたら花はなを咲さかしてやると云いふやうなものだ。サツパリ言靈ことたま戰せん

も零敗ゼロはいだ。アハ、ハ、ハ、さすがの萬公まんこうさまも呆あきれ返かへるよ」

「貴様きさまが交まつ返かへすものだから、晴公はるこうと思おもつた空そらが段々だんだん曇くもつて來くる。餘程よほど神様かみさまの御ご

機嫌げんを損そこねたとみえるワイ。コレ見みる、俺おれの言靈ことたまが逆ぎやくに利きいていよいよ益々ますます暗くら

なつて來きた、偉えらいものだろう、兔角とかくどちらなりと變化へんくわさへあれば言靈ことたまの利きいた

印しるしだよ」



「先生、斯うなつちやたまらぬぢやありませぬか、どうぞ貴郎の言靈で面影位見えるやうにして下さいな。暗くなつた計りか、何となく陰鬱の氣が漂ひ、鬼哭愁々墓場の如き感がするぢやありませんか」

「さうだなア。餘り言靈が利き過ぎたと見える。そんなら私が一つ神様に願つて見やうかな」

と云ひつつ恭しく拍手をなし、臍下丹田に水火をつめ、無我無心の境に入つて、音吐朗々と天津祝詞を奏上し終つて、

「面影も見分けかねたる暗の森を

晴らさせ玉へ天地の神

と歌ひ了はるや、眞黒なる暗の帳はうすらいで朧月夜の如き明かりが漂ふた。治國別は再び神言を奏上し、吾言靈の神力の言下に現はれし事を神に向つて感謝した。

何とマア黑白の違といふのは此事だなア。先生、エ、神さまの聖言に、初に道あり、道は神也、神は道と共にあり、萬の物之に依つて造らる云々と云ふことがありましたなア。實に「ことば」といふものは不可思議力を持つたものですなア」

「ウン、道は萬物の根元だ。造物主だよ」

「併し乍ら先生、言葉で萬物が出来るのならば、貴方が今茲で、人間一人生れよと仰有つたら、茲に現はれ相なものですなア。それが現はれないことを思へば、何うも言葉の正體が萬公には解しかねます。詳細の説明を承はりたいものですなア」

「治國別は歌を以て之に答へける。」

高天原の天國に住む天人は人の如  
智性と意志とを皆有す 智性的生涯を作り出す  
ものは天界の光なり そはこの光は神眞の  
中より出づる神智ぞや その意志的生涯作り出す

ものは天界の熱と知れ  
これより神愛出る也

そもこの熱は神の善

切て天人の生命は

神の善なる熱よりす

生命の熱より來ることは

熱なきものは生命の

亡ぶを見ても明けし

無愛の眞と無善眞

これ亦生命亡ぶべし

眞は信眞の光にて

善は愛善の熱ぞかし

これ等の事物は神界の

熱と光りに相應する

一定不變の力なり

地上を守る熱または

光を見れば明瞭に

これ等の道理を覺り得む

世間の熱は光と和し

地上の萬物を啓發し

残る隅無く成育す

熱と光とが相和すは

春夏の兩期に在るものぞ

熱なき光は萬物を

活動せしむることを得ず

却て死滅に到らしむ

冬期は熱と光との和合なく

光のみにて熱はなし

高天原の天界を

樂園なりと唱ふるは

熱光の相應あればなり

眞と善とが相合し

信と愛との合するは

地上の春期に當るとき

光熱和合する如し

天地の太初に道あり

道は神と共にあり

道は即ち神なるぞ

萬物これにて造らるる

造られたるもの一として

之に由らずして造られし

ものは尠しもあらずかし

之には清き生命あり

いのち 生命は人の光なり

かれ世に在まし世は彼に

まづた 全く造り上げられぬ

けだ 蓋し道は肉體と

なりて吾曹の間に宿る

われ 吾その光榮を見たりてふ

せいじや 聖者の道は主の神の

ちから 力を意味するものぞかし

いかん 如何となればそは道

にくたい 肉體となれりと云ふに由る

されど道は殊更に

なに 何を表はすものなるか

知るもの更に無かるべし

これより進むで龜彦は

いと細やかに説示せむ

ことば 道といふは聖言ぞ

せいげんすなは 聖言即ち神眞ぞ

この神眞は主の神に

そん 存し玉へば主神より

あら 現はれ来る光なり

ひかり 光は主神の神眞ぞ

たかあまはら 高天原にて一切の

ちから 力を有つは神眞ぞ

しんしん 神眞なくば力無し

ゆゑ 故に一切の天人を

よ 呼びて力と稱ふなり

げ 實に天人は神力の

しよじゆしや 所受者なるのみならずして

神力ちからを收をさむべき器うつはなり  
如上によじやうの如ごとく觀くわんずれば

天人てんにんすなは即ちからち力ちからなり  
此このしんりき神力しんりきを有たもつ故ゆゑ

地獄界ぢごくかいまで制裁せいさいし  
それに反抗はんかうするものを

全まつたく制禦せいぎよし得えらる也なり  
たとひ數萬すまんの叛敵はんてきの

現あらはれ來きたる事ことあるも  
高天原たかあまはらの神光しんくわうと

稱たたへまつれる神眞しんしんゆ  
かがやき來きたる一いち道だうの

光明くわうみやうに遭あひしその時ときは  
直ただちに戰慄せんりつするものぞ

以上いじやうの如ごとく天人てんにんの  
天人てんにんたるは神眞しんしんを

清きよけく攝受せつじゆし得うる故ゆゑに  
全ぜん天界てんがいの根元こんげんを

組織そしきするものは神眞しんしんの  
光ひかりに決けつして外ほかならず

そは天界てんがいを組織そしきする  
ものは天人てんにんなればなり

神眞中に斯の如く  
 偉大無限の神力の  
 潜み居るとは現界の  
 眞理を以て只思想  
 又は言語に外なしと  
 思ふ學者の中々に  
 信じ能はぬ所なり  
 思想や言語は自身にて  
 力を有するものならず  
 主神の命に従ひて  
 活動する時始めてぞ  
 力を生ずるものとなす  
 されど神眞はその中に  
 自らなる力ありて  
 天界こそは造られぬ  
 地上の世界もその中の  
 萬物併せて悉く  
 之にて造られたるものぞ  
 斯くも尊き神力の  
 神眞の中にあることは  
 二個の茲に比證あり  
 即ち人間にある善と  
 眞との力その次に  
 世間よりする太陽の  
 光と熱との力にて  
 神の稜威を明かに  
 覺り得らるるものぞかし  
 ア、惟神々々

神のまにまに答へおく」

「イヤどうも有難う御座いました。萬公マンマン満足致しました」

「萬公、お前、本當に私の云ふことが分つたのか」

「マンマン、半解位なものですなア。併し乍ら半開の花はキツと【満】開します。與ふるに時間を以てして下さい。萬公の了解した時が、即ち花の【満】開ですかなア。モウ少し、細かく分解的に仰有つて貰へますまいかな」

「此事が略了解がついた上で、又教えることにしよう。此解決をお前達の兼題としておくから次が聞たくば、此歌を繰返し繰返し靈魂に浸み込ますが良い、讀書百遍意自ら通ずと云ふからな、餘り一時に餌を與へると靈魂が食傷し、腹痛下痢を起しちや、俺も厄介だから、モウチツとといふ所で止めておかう。腹に一杯與へては、折角の御馳走が御馳走にならぬからなア。アハ、ハ、ハ、」

「サア、一同の方々、萬公が導師で之から天津祝詞を奏上致しませう」

「其次に天地の神、其次に神言の奏上といふ段取だな、オイ萬公、人の眞似なら



この晴公さまでも出来るよ。ウツフ、フ、フ

(大正一一・一二・八 舊一〇・二〇 松村眞澄録)

(昭和九・一二・二七 王仁校正)

## 第九章 怪光(一一七八)

治國別外五人は祠の跡に蓑を敷き端坐し、天津祝詞を奏上し神言を唱へ、漸く寢に就きぬ。晴公は萬公に力一杯罵倒され且つ言靈の神力の現はれざりしに胸を痛め、五人の躰を聞き乍ら首を左右に振り治國別の言靈の解説歌を思ひ出し、萬公よりも早く眞意を諒解しアツと言はせて呉れむものと一睡もせず雙手を組み瞑目正座し考へ込でゐる。夜はおひおひと更け渡り冬の初めの木枯は森の老樹の枝を揺り、分の厚い枯葉はパラパラと雨の如くに落ちて来る。四邊はシンとして聲なく物淋しさは刻々に身に迫り來たる。何とはなく身體震ひ出し恐怖の念は刻々

に吾身を襲ふ。暫くありて、一道の光明遙の彼方より輝き來たる。晴公は稍得意となつて獨語、

「何とまア有難いものだナア。先生始め四人の連中は何にも知らず、白河夜船を漕いでゐる間に此晴公は言靈の理解について研究した結果、此暗黒の闇に光明がさし出した。一つ萬公に見せてやり度いものだな。何だか淋しくなつたと思へば、こんな光明が現はれる前提だつたのか。さうするとウラル教も萬更捨てたものぢやないワ。暗の後には月が出ると云ふが本當に俺の言靈は不思議だ。下の方から月光がさして來る。光と云ふものは空から來るものとばかり今の奴は信じて居るが俺の言靈は偉いものだワイ。地の中から月光が輝くのだから豪氣なものだ。先生だつてこれ丈の神力は滅多にお出さなかつた事はあるまい。一つ揺り起して御覽に入れようかな。追々と近くなつて來る。やア瑞の魂と見えて三つの玉が光つて來るぞ。ヒヨツとしたら三光の神がおいでになつたのかな。一つ萬公を揺り起して見せてやりたいものだナア」

治國別は熟睡を装ひ晴公の獨語を聞き、可笑しさに堪へず

笑ひを抑へ、體中を揺つて目から涙を出し氣張つてゐる。晴公は得意氣に、

「やア近付いた近付いた」

と目を圓うして見つめてゐると頭に三本の蠟燭を立て胸に鏡をつり、其上に鉄を二つばかり釣つてゐる。さうして口は耳迄引き裂け顔は眞蒼に右の手には金槌、左の手には五寸釘、白い布を三間ばかり垂らした異様の怪物、歩く拍子に鉄と鏡と當り合つて、チャンチャンと音を立て蠟燭の火は鏡面に映じ晴公の面を照した。晴公は忽ち眞蒼になり唇を慄はせ、

「せ、せ、先々々……先生」

と云ひ乍ら體をすくめて目を塞ぐ。怪物は六人の姿を見て、厭らしき細い聲を絞り、

「やア、残念至極、口惜やな、今日は三七日の満願の日、人に見つけられては願望成就せぬと聞く。もうかうなる上は死物狂ひだ」

と云ひ乍ら懐劍をスラリと引きぬき、先づ晴公に向つて飛びかからむとするにぞ、晴公はキヤツと一聲、其場に打倒れた。治國別は寝たまま「ウン」と一聲鎮魂を

かけた。怪物は土中から生えた樹木の如く懐剣をふり上げたまま硬まつて了つた。晴公の叫び聲に萬公、五三公、松彦、龍公は目を覺まし形相凄じき怪物の姿を見て又もやキヤツと聲を上げ慄ひ戦いて居る。怪物は目を「きよる」つかし口をもがもがさせ、舌をペロペロ出し乍ら依然として懐剣をふり上げたまま睨みある。

「セ、先生、夕、大變です。起きて下さいな。晴公がしようもない言靈を上げるものですから地獄から萬公を迎へに來ました。ド、何卒追ひやつて下さい。あの……言靈で……」

治國別は少しも騒がず、

「ハ、まア修行のためだ。一つあの鬼娘さまと抱擁接吻でもやつて來たらどうだい。何程怖い顔だと云つてもヤツパリ女だからな」

「メ、滅相な、何程女早魘の世の中でも、アタ恐い、アタ厭らしい、誰があるな奴にキ、キツスするバ、馬鹿がありますか、萬公とに恐い化者だ」

「ハ、おい晴公さま、お前の言靈は大したものだナ。到頭鬼娘を生んで了つたぢやないか。言葉は神也。神即ち言葉也。言葉は神と共にあり。萬物之によ

つて造らる。實に大成功だ。然しお前のは言葉は鬼娘也、鬼娘即ち言葉也。言葉は鬼娘と共にあり。怪物これに依つて造らる、と云ふのだから天下一品だよ。おい何を慄つてゐるのだ。お前が生んだ鬼娘だから、さアさアお前が形づけるのだよ」

「南無幽靈鬼女大菩薩頓生菩提、消滅し給へ、晴公の言靈に逃げ出し玉へ、隠れさせ給へ、かなはぬからたまちはへませだ。あゝア、先生もう駄目ですわ。そんなにイチヤつかさずに早く、あのオゝゝ、鬼娘を退却さして下さいな」

「俺は年が寄つて言靈を一度奏上すると熱湯の様な汗が出るから最前の言靈で最早原料缺乏だ。お前は百遍、千遍、言靈を發射しても體が弱らない、汗一つかないと云つたぢやないか。聲量タツプリ餘裕綽々たる晴公に頼まねば、最早治國別は言靈の停電だよ」

「あゝア、困つた事だな。言靈の貧乏な先生について歩いて居ると、こんな時には仕方がないわい。オイ、こら松彦、龍公、チツと起きぬかい。千騎一騎の場合だ。何をグウスウ八兵衛と寝て居るのだ。味方の勇士一團となつて只今現はれた

強敵きやくてきに向むかひ言靈ことたまを發射はつしゃしようぢやないか〇

「俺おれやまだ三五教あななひけうへ入信はいつてから二日ふつかにもならぬのだから言靈ことたまの持合せもちあはがないわい。兄貴あにき、お前まへがしやうもない事を云いつて、あんな鬼おにを呼び出よしたのだから、お前まへがすつ込こめて呉くねばどうも仕方しかたがないぢやないか。こんな事を先生せんせいに御苦勞ごくらうをかけるると云いふ事ことがあるものか、あゝ厭いやらしい。首筋くびすぢがゾクゾクして來きた。龍公たつこうさまの髪かみの毛けは針はりの様に立たつて來出きたしたワ〇と云いひ乍ながら頭あたまを抱かかへ俯向うつむいて了しまつて居ゐる。

「あゝア、何奴どいつも此奴こいつも、言いはいでもいい言靈ことたまは自然しぜんに發射はつしゃし乍ながら肝腎かんじんの時ときになつて言いはねばならぬ言靈ことたまを發射はつしゃする奴やつは、先生せんせいを始めはじめ一人ひとりも半分はんぶんでもありやせぬわ。えー晴公はるこうさまも、もう仕方しかたがない。これ、鬼娘おにむすめ、どうなつと貴様きさまの勝手かってにし  
たがよいわ〇

と捨鉢すてばちになり無性むしやう矢鱈やたらに喋しゃべり立たてる。松彦まつひこはムツクと立たち上あがりツカツカと鬼娘おにむすめの前まへに進すすみ寄より、念入ねんいりに頭あたまの上うへから足あしの下迄したまでのぞ覗のぞき込こみ、  
「ハ、ア、頭あたまに三德さんとくを冠かむり蠟燭らふそくを三本さんぼん立たてて居ゐるな。何だ、顔かほに青あをいものや赤あかい

ものを塗り、口を大きく見せて役者の様な奴だ。何だい、光つたものをブラブラとつりよつて、長い尾を引き摺り、金毛九尾の狐と枉鬼と八岐大蛇と、つきませた様な凄じき形相をやつてゐるな。何だい、懐剣を振り上げたまま金佛の様にカンになったか。エー弱い鬼だな。此奴アよく人の云ふ丑の時詣りかも知れぬぞ。しよつたのか。エー弱い鬼だな。此奴アよく人の云ふ丑の時詣りかも知れぬぞ。おい娘、お前は女の身として此厭らしい人里離れた魔の森へやつて来るのは、何か深い仔細があるだらう。もう斯うなる以上は有態に白状して了へ。俺の力で叶ふ事なら何でも聞いてやる」

「女は強直したまま首から上は自由になるを幸ひ、两眼より涙をハラハラと流し、ザ、ザ、残念でムります。私の両親はバラモン教のランチ將軍と云ふ悪人に捕へられ今は浮木ヶ原の陣營で颯り殺にあつたと云ふことでムります。それ故三週間以前からこの魔の森へ丑の時詣りをして親の敵を討たむと思ひ森の大杉に呪ひ釘を打ち、ランチ將軍の滅亡を祈つてゐるものでムります。どうやら貴方は三五教のお方と見えますが何卒お助け下さいませ」

とワツと泣き叫ぶ。治國別は「ウン」と一聲靈縛を解いた。女は忽ち身體自由となり、治國別の方に向つて合掌し感謝の意を表したり。

「やア何處のお女中か知らぬが様子を聞けば實に氣の毒な話だ。まアここへ來て坐りなさい。トツクリと話を聞かして貰はう。都合によつたらお前の力になつてやるまいものでもないから」

と親切相に云ふ。萬公は、

「ア、もしもし先生、ナ、何と云ふ事を仰有います。あんな鬼娘が側へやつて來て堪りますか。早く追ひ散らして下さいな」

「アハ、何と強い男ばかり寄つたものだな。まるで幽靈の様な代物ばつかりだワイ」

「おい、晴公、五三公、龍公、貴様もチツと確りして、何とか彼奴を追ひ捲つて呉れ、萬公の一生のお願いだ」

「何、こんな時には先生に任しておけばよいのだ。先生がよい様にして下さるわ。なア五三公、龍公、さうぢやないか」



「何と云つても、先生は先生だ。松彦さまもヤツパリ御兄弟だけあつて肝が太いわい、五三公さまも感心仕つたよ」

「何と女と云ふものは恐ろしいものだのう、俺やもう之を見たと一生女房持たうとは思はぬわ。翠玉も何も何處か洋行して了つたワ。もう立上る勇氣もなし、腰は變になる、最早人力の如何ともする所でない。あゝ惟神々々、御靈幸はひましませよ。朝日は照るとも曇るとも、月は盈つとも虧くるとも、龍公さまに取つてこんな恐ろしい事が又と三千世界にあるものか。おゝゝゝ恐ろしい……もゝゝゝ森だな」

「これ、娘さま、そんな顔して居つては皆の連中が肝を潰して困るから一つ顔を洗ひ髪を撫で上げ、もとの人間に還元して、それから詳しい物語をこの松彦に聴かしたらどうだい。此側に清水が湧いてゐる。さアここで一つ蠟燭の火があるのを幸ひ顔を洗ひ身繕ひを改めなさい」

「ハイ、有難うムります。えらい失禮を致しました」  
と云ひ乍ら、女は傍の水溜りで念入りに彩つた顔をスツカリ洗ひ落とし、胸にかけ

た鏡かがみや鉄はさまを其場そのばに棄すて、髪かみを撫なで上げ白びやくい衣いを脱ぬぎ棄すてた。見みれば十七じふしち八はつ才さいと覺おぼしき妙めうれい齡れいの美人びじんである。

「やア、見みかけによらぬ立派りつぱなナイスだ。おい龍公たつこう、松彦まつひこがきいて居をれば、貴様きさまは今いま一生いっしやう女房にやうぼうを持もたぬと云いつたが、これなら随分ずぶん氣きに入いるだらう、アハ、ハ、ハ、」  
「女をんなは化物ばけものと云いふ事ことは聞きいて居あたが本當ほんたうに恐おそろしいものだな。いやもうどんなナイスでも龍公たつこうさまは女をんなと來きちや一生御免いっしやうごめんだ。一つ違ちがへばあれだからなア。俺おれやもう一目見ひとめるなり百年程ひやくねんほど壽命じゆみやうを縮ちぢめて了しまつたよ」

「アハ、ハ、ハ、氣きの弱よわい男をとこだな」  
と松彦まつひこは吹ふき出し笑わらふ。

女をんなはチヤンと身繕みつくるひをし乍ながら治國別はるくにわけの側そばへ恐おそる恐おそる進すすみ寄より、土下坐どげざし乍ながら優やさしき聲こゑにて、

「三五教あななひけうの宣傳使様せんでんしさま、誠まことにお寢やすみ中ちゆうを驚おどろかせまして申譯まをしわけがムりませぬ。私わたしはライオン河がはの邊ほとりに住すむ首陀しゆだの娘むすめでムります。私わたしの兩親りやうしんはライオン川がはに釣魚つりをする時とき、ランチ將軍しやつくんの部下ぶかがやつて來きまして「其方そのほうは三五教あななひけうの間諜者まわしものだらう」と云いつて高たか

手て小こ手てに縛いましめ陣屋ぢんやへ連れ歸かへり鬪殺なぶりころしにしたと云いふ事ことでムごります。もとはアーメニヤうまの生うれでムごりますが大騒動おほさわうどう以來いらい、兄あにの行衛ゆくゑは分わからなくなり、年とし老おいたる兩親りやうしんと私わたしは、そこら中ぢやうを乞食巡禮こじきじゆんれいとなつて經巡へめぐり、漸やくライオン川がはの片邊かたほとりに小ちひさき庵いほりを結むすび親おや子こ三人山さんにんやまに入いつて果實このみを採とり其日そのひを送おくつてゐました處ところ、黄金姫様わうこんひめさまとか云いふ立派りつぱなお方かたがお通とほりになり、一寸休ちよつとやすんで下くださいまして「お前はまへはこんな川かはべりに一軒家けんやを建たてて何なにをして居をるか」と仰おつしや有ありましたので私わたしの兩親りやうしんはいろいろと來歴らいれきを申まを上げた處ところ、その黄金姫様わうこんひめさまが仰おつしや有あるには「お前はまへはこれから三五教あななひけうの神様かみさまを信しん仰かうせよ。さうすれば世よの中なかに何なにも恐おそるべきものはない」と仰おつしや有あつて下くださいました。それ故朝晩三五教ゆゑあさばんあななひけうの祝詞のりとを覺おぼえて祈念きねんを致いたして居をりました。さうするとランチ將軍しやうぐんの手下てしたの者ものがドカドカと五六人飛ごろくにんび込こみ來きたり「其方そのほうは今三五教いまあななひけうの祝詞のりとを唱となへて居をつた怪けしからぬ奴やつだ。大方敵おほかたてきの間諜まわしものだらう」と云いつて兩親りやうしんを捕とらへ歸かへつて了しまひました。私わたしは幸さいはひ廁かはちに這入はいつて居をりましたので命いのちだけは助たすかりました。それからテームス峠たうげをソツと渡わたり齋苑いその館やかたへ參拜さんばいせむと來きて見みれば、河鹿峠かしかたうげの中程なかほどにバラモン教けうの軍勢ぐんぜいが張はつて居あると云いふ事ことなので峠たうげを越こゆる譯わけにも行ゆかず此森このもりの片隅かたすみに洞穴ほらあな

のあるのを幸ひ、そこに身を忍び夜中丑満の刻を考へ、どうぞして兩親の敵を討ち戀しい一人の兄に會はして下さいと、今日で二十一日の間お詣りを致しました。實に不仕合せな女でムります。何卒お憐れみ下さいませ』  
とワツとばかりに大地に身を投げ棄てて泣き叫ぶ其いぢらしさ。治國別を初め一同は、娘の物語を聞いて悲嘆の涙にくれみたりける。

（大正一一・一二・八 舊一〇・二〇 北村隆光録）

（昭和九・一二・二七 王仁校正）

## 第一〇章 奇遇（一一一七九）

萬公、晴公、龍公はやつと胸撫で卸し、瘡の落ちたやうな顔をして女の顔を不思議さうに見守つて居る。松彦は何呉となく親切に女を勞り、いろいろと慰安の言葉を與へて居る。治國別は氣の毒さに頭を垂れ、目を瞬き涙をそつと拭ひなが

ら、

「承はれば貴女の家庭には悲惨の幕が下りたものですなア。そして黄金姫様に神様の話を聞かして頂き三五教の祝詞を奏上して居たために、バラモンに捕へられなさつたとは實に氣の毒な事だ。併し乍ら御安心なさいませ。キツと貴女の兩親は命に別條ありません。これから私が何とかして救ひ出して貴女にお渡し致しますませう」

をんなは、嬉し涙を拭ひながら、

「ハイ御親切によう云つて下さいました、あり難うございます。神様に遇ふたやうに存じます。何卒憐れな私の境遇、お助け下さいませ。兩親はキツと助かりませうかなア」

「キツと助けてみせませう。御心配なさいませ。さうして貴女の兩親の名は何と云ひますかな」

「ハイ父の名は珍彦、母は静子と申します。そして私の名は楓と申します」

「さうしてお前の尋ぬる兄の名は何と云ふのかなア」

「ハイ、兄の名は俊と申しました。其兄に廻り會ひたいばかりに、親子三人が廣いフサの國を彷徨ひ、漸くライオン河の邊まで參つて……兩親は老い、足の歩みも、はかばかしくないので、つひそこへ住居を定めて居たのでムいます」  
晴公は此女の物語を聞き、太息をつき、口をへの字に結び、目を閉いで、頻りにウンウンと溜息を吐きながら、何か深き考へに沈んで居る。

萬公は勢ひよく、

「オイ晴公、何だい、【こくめい】な顔をしよつて、貴様が生んだ【ナイス】ぢやないか。仕様もない言靈を出して鬼女を生んだと思へば何の事はない、天下無雙のナイスだ。ちつと噪がぬかい、こんな時こそ貴様の威張る時だよ。」

思ひきや鬼女と思ひし其影は  
譬へ方なきナイスなりとは

だ。本當に貴様は今夜の言靈戦の殊勳者だ。この女を發見して一つ手がかりを得、

ランチ將軍の陣營を根底より覆へし神力を現はす機運が向いたのだ。何をウンウンと溜息をつくのだ。ちつと確りせぬかい、エーン」

晴公は力なげに、

「ア、濟まぬ。如何したらよからうかなア」

と云ひながら豆のやうな涙をパラパラと降らして居る。折から十八夜の月は、河鹿山をかすめて上り初めた。森の中とは云へ全體的にホンノリと四邊は明るくなつて来た。蠟燭の火はつき換へられた。

萬公は元氣よく、

「何だ晴公、貴様は泣いて居るのだな。三五教の宣傳使の卵が何だ、メソメソと

吠面をかわくと云ふ事があるかい。俺が一つ活を入れてやらう確りせい」

と云ひながら拳を固めて二つ三つ晴公の背をつげ打ちにした。

「今あの楓の云つた兄と云ふのは俺だよ、この晴公だよ」

「何、お前があのナイスの兄貴か、ヨウさう聞くと、どこともなしに似よつた處

があるやうだ。もし先生妙な事があるものですな。これもやつぱり神様のお引き

合せでせう。晴公がしやうもない言靈を寝もせず、上げて居つたのを見て怪體な男だと怪しみながら寝て居ましたが、矢張り蟲が知らしたので寝られなかつたのですな。兄妹の靈魂が交通したのでせうかな。ヤア晴公さまお目出度う。楓さまお目出度う。お祝ひ申します。私の先生もこの松彦さまと久し振りで兄弟の御對面なさつたのだ、何と人間の運命は分らぬものだなア、先生、本當に不思議ぢや御座いませぬか」

「さうだなア、不思議な事もあればあるものだ。何れ宣傳使になるものは親兄弟に生き別れたり、再び世に立つ可からざる運命に陥つた者ばかりが神の恵に救はれて御用をして居るのだから、誰だつて其來歴を洗ひ曝せば、皆悲惨な者ばかりだよ。人間心に立ち歸つて考へ出した位なら一時も心を安むずる事は出来ないのだが、愛と信と神様の光明に照らされて地上の憂さを忘れて居るのだからなア」と悄然として首垂れる。萬公は涙聲を態と元氣らしく、

「先生貴方からそう悄氣て貰つては、吾々は如何するのです。人の心靈は歡喜のため存在すると何時も仰有つたぢやありませんか。どうやら貴方は歡喜去つて



悲哀來ると云ふ状態ですよ。ちつと確りして下さいな」

「イヤわしは歡喜餘つての悲哀だ。つまり有難涙に暮れて居るのだ。神様の御恵を今更の如く感謝して居る隨喜の涙だからさう心配をして呉れるな」

「私も歡喜の涙がアンアン溢れますわい。オンオンオンイ晴公、いや俊さま、お前も嬉し涙が溢れるだらう。歡喜の涙なら堤防が崩れる處迄流したらよからう。アンアンアン餘り嬉しくて泣き堪能が仕度いわい」

晴公は又涙聲にて、

「治國別の先生様有り難うムいます。何卒妹の身の上を宜しく願ひ致します」

「ウン私も満足だが、お前も嘸満足だらう」

「あなたは兄上でムいましたか、妾は楓でムります。ようまあ無事で居て下さいました。どうぞお父さまやお母さまの命を救うて下さいませ。貴兄にこの事さへ

知らして置けば楓は此儘死すとも此世に思ひは残りませぬ、あゝ惟神靈幸倍坐世」

「妹隨分苦勞をしたであらうなア、俺だとして親兄妹の事を一時も忘れた事はない。

雨の晨風の夕ア、メニヤの空を眺め、兩親は如何に、妹は如何にと、涙の種がつ

きる程<sup>ほど</sup>どれ丈<sup>だけ</sup>泣<sup>な</sup>き暮<sup>く</sup>らしたか知<sup>し</sup>れない。治<sup>はる</sup>國<sup>くに</sup>別<sup>わけ</sup>の宣<sup>せん</sup>傳<sup>でん</sup>使<sup>し</sup>に拾<sup>ひろ</sup>はれて神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>のお道<sup>みち</sup>に  
入<sup>い</sup>り、歡<sup>くわん</sup>喜<sup>き</sup>の雨<sup>あめ</sup>に浴<sup>よく</sup>し、「かへらぬ事<sup>こと</sup>を思<sup>おも</sup>ふまい」といつも心<sup>こころ</sup>を紛<sup>まぎ</sup>らし、馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>口<sup>くち</sup>  
ばかりたたいて浮<sup>う</sup>世<sup>よ</sup>三<sup>さん</sup>分<sup>ぶ</sup>五<sup>ご</sup>厘<sup>りん</sup>で表<sup>へう</sup>面<sup>めん</sup>は暮<sup>く</sup>らして居<sup>ゐ</sup>るもの、恩<sup>おん</sup>愛<sup>あい</sup>の羈<sup>きづ</sup>はどうして  
も切<sup>き</sup>る事<sup>こと</sup>は出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ。妹<sup>いも</sup>、俺<sup>おれ</sup>も會<sup>あ</sup>ひたかつた」  
と人<sup>ひと</sup>目<sup>め</sup>も構<sup>かま</sup>はず楓<sup>かへで</sup>の體<sup>からだ</sup>を抱<sup>いだ</sup>きかかへ、一<sup>ひと</sup>言<sup>こと</sup>も發<sup>はつ</sup>し得<sup>え</sup>ず泣<sup>な</sup>き崩<sup>くづ</sup>れて居<sup>ゐ</sup>る。勇<sup>いさ</sup>みをつ  
けむと治<sup>はる</sup>國<sup>くに</sup>別<sup>わけ</sup>は立<sup>た</sup>ち上<sup>あが</sup>り聲<sup>こゑ</sup>も涼<sup>すず</sup>しく歌<sup>うた</sup>ひ出<sup>だ</sup>しぬ。

☐ 朝<sup>あさ</sup>日<sup>ひ</sup>は照<sup>て</sup>るとも曇<sup>くも</sup>るとも 月<sup>つき</sup>は盈<sup>み</sup>つとも虧<sup>か</sup>くるとも

假<sup>た</sup>令<sup>へ</sup>大<sup>だい</sup>地<sup>ち</sup>は沈<sup>しづ</sup>むとも 曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>の神<sup>かみ</sup>は荒<sup>すさ</sup>ぶとも

誠<sup>まこと</sup>一<sup>ひと</sup>つ<sup>と</sup>の三<sup>さん</sup>五<sup>ご</sup>の 教<sup>をしへ</sup>の道<sup>みち</sup>は世<sup>よ</sup>を救<sup>すく</sup>ふ

神<sup>かみ</sup>が表<sup>おもて</sup>に現<sup>あら</sup>はれて 善<sup>ぜん</sup>神<sup>しん</sup>邪<sup>じゃ</sup>神<sup>しん</sup>を立<sup>た</sup>て分<sup>わ</sup>ける

此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>を造<sup>つく</sup>りし神<sup>かみ</sup>直<sup>な</sup>日<sup>ひ</sup> 心<sup>こころ</sup>も廣<sup>ひろ</sup>き大<sup>おほ</sup>直<sup>な</sup>日<sup>ひ</sup>

唯<sup>ただ</sup>何<sup>なに</sup>事<sup>ごと</sup>も人<sup>ひと</sup>の世<sup>よ</sup>は 直<sup>な</sup>日<sup>ひ</sup>に見<sup>み</sup>直<sup>な</sup>せ聞<sup>き</sup>き直<sup>な</sup>せ

身<sup>み</sup>の禍<sup>わざはひ</sup>は宣<sup>の</sup>り直<sup>な</sup>せ 天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>を造<sup>つく</sup>りたまひたる

誠まことの神かみのます限りかぎ 信しんと愛あいとの備そなはりし

誠まことの氏うぢ子の身みの上うへを 守まもりたまはぬ事ことやある

晴はる公こう楓かへでの兩りやう人にんよ 心こころ安やすけく平たいらけく

神かみに任まかせよ千ちは早はや振ふる 尊たふとき神かみの御み惠めぐみに

親おや子こ兄きやう妹まい廻めぐり會あひ 天てん國こく淨じやう土どの樂たのしみを

攝せつじゆ受うし得うるは目まのあたり 治はる國くに別わけは三あな五なひの

神かみの力ちからを頼たよりつつ 汝なんぢ等ら二ふ人たりの望のぞみをば

必かならず叶かなへ與あたふべし 神かみは汝なんぢと共ともにあり

吾われ等らも神かみの子こ神かみの宮みや 神かみに任まかせし身みの上うへは

如何いかに惡あく魔まの荒すさぶとも 如何いかでか恐おそれむ敷しき島しまの

大やま和とこ心ころを振ふり興おこし 四よ方もの醜しこ草ぐさ薙なぎ拂はらひ

天てん地ちに塞ふさがる叢むら雲くもを 生いく言こと靈たまの神しん力りきに

吹ふき拂はらひつつ天あまつたふ 月つきの光ひかりの清きよきごと

天あま津つ日ひかげの照てる如ごとく 吾わが神しん力りきを輝かがやし

バラモン教の曲神を

言向け和し歡樂の

海に眞如の日月を

浮べて歡喜の小波に

此世を渡す法の船

心安けくおぼされよ

いざこれよりは曲神の

軍の砦に立ち向ひ

天津御神の給ひてし

生言靈を打ち出して

天地清淨山川も

木草の端に至るまで

歡喜の雨に浴せしめ

救ひて往かむ惟神

神の御前に龜彦が

治國別と現はれて

偏に願ひ奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ。

今のぼる月の御光親と子の

身の行末を守らせたまへ。

今いま暫しばし時ときをまたせよ楓かへで姫ひめ

珍彦うづひこ静子しづこの親おやに遇あはさむ。

たらちねの親おやの恵めぐみは日月じつげつの

空そらに輝かがやく光ひかりなるかも。

七里ななさとを照てらすと云いへる垂乳根たらちねの

親おやの光ひかりぞめでたかりけり。

治國はるくに別神わけかみの命みことは村肝むらきもの

心こころの限かぎり汝なれをたすけむ

楓かへでは唄うたふ。

たまちはふ救すくひの神かみに遇あひしごと

吾われは心こころも勇いさみ來きにけり。

有ありがた難たき神かみの恵めぐみに照てらされて

吾父母に遇ふ日待たる。

吾兄に思はぬ處で廻り會ひ

嬉し涙のとめどなきかな。

三五の神を恨みし吾こそは

身の愚さを今ぞ悔いぬる。

垂乳根の親は如何にと朝夕に

胸迫りつつ神詣でせし。

父母を奪ひ去りたる曲神を

憎みしあまり醜業せしかな。

大空を照らして登る月影を

見るにつけてもうら恥かしきかな

晴公 三五の恵の露に浴しつつ

浮世うきよの夢ゆめを覺さましけるかな。

妹いもつとと聞きくより心こころ飛とび立たちて

抱だきつきたくぞ思おもひけるかな。

バラモンとらに捕とらへられたる父母ちちははの

身みの行末ゆくすゑを果はかなくぞ思おもふ。

さりながら神かみの惠めぐみは垂乳根たらちねの

身みを隅くまもなく守まもりたまはむ。

垂乳根たらちねの父珍彦ちちうつひこよ母ははの君きみよ

今いま兄妹きょうまいが救すくひまつらむ。

さは云いへどか弱よわきわれの力ちからならず

産土山うぶすなやまの神かみの惠めぐみに。

治國はるくに別神わけかみの司つかさに助たすけられ

吾わが垂乳根たらちねを救すくふ嬉うれしさ。

曲神まががみの如何いか程ほどせまり來きたるとも

神かみの力ちからにおひ退そけやらむ。

妹いもぢよ心こころ安やすかれ三五あななひの

神かみは吾等われらを見捨みすてたまはじ

楓かへで 有あり難がたし兄あにの命みことの言ことの葉はを

胸むねにたたみて守まもりとやせむ。

ア—メニヤ戀こひし家いへをふり捨すてて

道みちひし親おや子の身みの果はかなさよ。

黄金わうごん姫ひめ神かみの司つかさに助たすけられ

またもやここに救すくはれにけり。

何事なにごとも皆みな神様かみさまの御經綸おんしぐみ

見直みなほし見みれば憂うき事こともなし。

憂うき事ことのなほ此上このうへに積つもるとも



何なにか恐おそれむ神かみのまにまに」

松彦まつひこ「月つきも日ひも大空おほぞらに照てる世よの中なかは

曲まがのかくらふ隙すきはあらし。

ランチいんきてふ軍いんきの司つかさの前まへに出でて

生言いくこと靈たまをたむけてや見みむ。

愛信あいしんの誠まことの劍つるぎ振りかざし

曲まがのとりでを切きりはふりなむ。

面おも白しろしあゝ勇いさましき門かど出でかな

神かみに仕つかへし軍司いんきつかさの」

萬公まんこう「世よの中なかに吾子わがこに勝まさる寶たからなし

珍彦うづひこ静子しづこの心こころしのばゆ。

珍彦うづひこよ静子しづこの姫ひめよ待まてしばし

救すくひの神かみと現あらはれゆかむ。

ゆくりなく廻めぐり會あひたる山口やまぐちの

森もりは結むすびの神かみにますらむ』

龍公たつこう『常暗とこやみの森もりを照てらして進すすみ來くる

怪あやしき影かげに驚おどろきしかな。

さりながら世よにも稀まれなるナイスぞと

悟さとりし時ときの心こころ安やすけさ。

今いまとなり身みの愚おろかさを顧かへりみて

顔かほの色いろさへ赤あかくなりぬる。

吾わが胸むねに醜しこの曲津まがつの潜ひそむらむ

正ただしき人ひとをおぢ怖おそれけり。

村むら肝きもの心こころに潜ひそむ曲まが神かみを

拂はらはせたまへ三五あななひの神かみ。

治はる國くに別わけ神かみの司つかさに從したがひて

言こと靈たま戰いくさに向むかふ嬉うれしさ

治はる國くに別わけ山やま口ぐちの森もりに休やすらひ兄おとど妹ひの

名な乗のりあげたる事ことの床ゆかしさ。

片かた彦ひこやランチ將しやう軍ぐん何なに者ものぞ

彼かれは人ひとの子こ人ひとの身みなれば。

吾われこそは神かみの御み子こなり神かみの宮みや

いかで恐おそれむ人ひとの御み子こらに。

さりながら心こころ高たかぶる事こと勿なれ

言靈戦に向ふ人々。

たらちねの親子兄妹廻り會ひ

抱き喜ぶ時の待たる。

夜や更けぬ月は御空に上りましぬ

いざいねませよ百の人達

晴公 神司宣らせたまへる言の葉も

守るよしなき今日の嬉しさ。

村肝の心勇みて森の夜の

明けゆく空を待ちあぐむなり

楓 なつかしき兄の命よ治國別の

神かみの司つかさの御言みこと守まもりませ  
さりながら妾わらわも心こころ勇いさみ立たち  
ねるに寝ねられぬ今宵こよひばかりは

治國はるくに別わけ 兄きやう妹だいの心こころはさもやあるべしと

直日なほひに見直みなほし聞きき直なほしおく

いざさらば萬公まんこう五三いそ公こう龍公たつこうよ

松彦まつひこ共ともに一ひとねむりせよ

松彦まつひこ 吾兄わがあにの言葉ことばにならひ人々ひとびとよ  
よくなむりませ寅とらの刻こくまで

斯く歌ひて治國別一行は、やすやすと眠りについた。晴公、楓の兄妹は嬉しさの餘り一睡もせず邊りを憚り、ひそびそと長物語を涙とともに語り明かさむと此場を立出で兄妹は月光を浴びて森の外を逍遙する眞夜中、初冬の月は皎々として満天に輝き、此森の外面は白く光つて居る。

(大正一一・一二・八 舊一〇・二〇 加藤明子録)

(昭和九・一二・二七 王仁校正)

## 第一章 腰ぬけ(一一八〇)

晴公、楓の兩人は兄妹睦じく手をひき乍ら、森の木間を漏る月影を幸ひに枯草の茫々と生え茂つた細道を逍遙し、知らず知らず二三丁計り南の方へ進むで行く。南方より二三人の男、忙しげに提燈をとぼしてやつて来る。兄妹は之を眺めて彼の提燈の「しるし」は三葉葵がついてゐる。擬ふ方もなきバラモン教の捕手に

間違ひない、見つけられては一大事と大木の幹に姿を隠した。三人はツト立止まり、

甲「オイ此邊で一先づ一服して行かうぢやないか。これから先は危険區域だ。何程斥候隊だと云つても、僅かに三人位では心細いぢやないか。三五教の言靈宣傳使とやらに出會したら、大變な目に逢ふと云う事だ。一つ此邊で團尻を下ろして馬に水でもかうたら何うだい」

乙「オイ何處に馬が居るのだ。貴様チツと呆けてゐやせぬか」

甲「貴様は馬で、モ一人が鹿だ。大分最前からヒイヒイと汽笛をならしてゐるぢやないか。それだから此の出水で馬に水を吞ませと云ふのだよ」

乙「何を吐すのだ、黽奴が。先へ行きよつて臭い臭い屁を連發しよつて、コレ見ろ、俺の鼻は曲つて了つた。眉毛迄立枯が出来てきたワ。本當に困つた奴が先に

立つたものだな」

甲「俺の最後屁で鼻が曲つたのぢやないわ。貴様は先天的に鼻曲りだ。親讓りの片輪迄俺の屁に轉嫁さすとは、チト蟲が好すぎるぞ。何うだドツと張込で此處

で休息しようぢやないか。さうすりや、やがて本隊がやつて来るのだから、先づ  
斥候だと云つても一丁位の距離を持つて行かなくちやコレから先は心細いよ」

乙「それだから貴様は融と云ふのだ。直に糞をたれ屁古垂れよつて何の態だ」

甲「ヘン偉さうに云ふない。臆病たれ奴、三人の眞中へ入らにやヨウ歩かぬと云  
つたぢやないか。ポンポン乍ら此アーちやまは敵の矢玉を受ける一番槍の御先頭  
だぞ。何なら貴様、先へ行つたら何うだい。俺が眞中から行つてやらうか」

乙「先輩が先へ行くのは當り前だよ。總て物には順序がある。長幼序あり夫婦別  
あり、といふからなア」

甲「夜道に行く時丈貴様は長幼序ありを振り廻すのだから耐らぬワ。なア丙州、  
一つ此處で休んで行かうぢやないか」

丙「モ一二三丁北へ行けば古社の跡がある。ウン其處には大變都合のよい段があ  
つて、腰をかけるに持つて來いだ。そこ迄行かうぢやないか」

甲「そこ迄行くのは知つて居るが、なんだか俄に足が進まなくなつたのだ。出る  
のぢやないか。エー」



丙 出るとは何が出るのだい。怪體な事をいふ奴だな

甲 出るとも出るとも大に出るのだ。モウ夜明けに間もあるまいから、此處で一  
寸休みて行かうかい

丙 〇アハ―此間から噂に聞いた鬼娘の事を思ひ出しよつたな。ソレは貴様、人の  
話だよ。幽霊と化物と鬼とは決して此世の中にあるものぢやない。そんな迷信を  
するな。さア、行かう

乙 〇ヨウ其奴は一寸見ものだ。併し乍ら見たところが、何の役にもならないから、  
マア此邊で一層の事一服しようかい。その方が餘程安全だぞ

丙 〇アハ、この奴も到頭本音を吹き居つた。やつぱり鬼娘が恐いと見えるワイ。  
頭に蠟燭を三本立て、面を青赤く塗りたて、口を耳迄裂けたやうにして、ピカッ

ピカッと暗を照らし乍ら、白い尾を引ずつて来る姿を見たら餘り氣味がよい事  
ない事ない事ないワ。俺も何だか身柱元がぞくぞくして來はせぬワイ。さア、何  
奴も此奴もそこ迄進めとは云はぬわ

甲 〇アハ、やつぱり此奴も屁古垂れ組だな。時にランチ將軍さまは何故ア

ンナ爺や婆を大事相に駕籠に乗せて河鹿峠を越ゆるのだらうかなア。些とも合點が行かぬぢやないか。彼奴は三五教の空助や、黒姫が化けてゐるのだと云ふ噂だが、俺も一寸面を見たが、餘り恐さうな奴ぢやなかつたぞ

乙「それが化物だよ。人殺をしたり、強盗する奴には決して悪相な奴は無いだ。蟲も殺さぬ丸で女の様な優しい面をして居つて、陰で悪い事をするのだ。俺の様な閻魔面は世間の奴が初めから恐がつて油断をせぬから、一寸も悪い事は出来はせない。外面如菩薩、内心如夜叉と云つてな、外から弱そに見える奴が挺子でも棒でも了へぬ奴だよ

丙「さうすると彼の空助、黒姫を駕籠に乗せ、河鹿峠を通過せうといふ算段だな

ア

甲「ウンさうだ。何でも治國別とか、玉國別とか云ふ豪傑が祠の森や、懐谷邊に陣を構へて頻りに言靈とやらを打出しよるものだから、何うしても進む事が出来ない。そこで三五教の空助、黒姫が初稚姫を伴ってライオン河の畔にバラモン軍の動靜を考へて居つたのを甘く捕獲し、河鹿峠を無事に通過しようといふ計略だ。

もし言靈でも打出し居つたら駕籠の扉をパツと開き、槍で殺すが何うだ。コレでも言靈を發射するかと兩人の胸元へ突きつけるのだ。さうすると如何に無謀な宣傳使でも、三五教切つての豪傑空助、黒姫を見殺にする譯には行かぬ。【せう】事なしに屁古垂れ居つて、何卒無事に御通過をして下さいと反對に頼むやうに仕組まれた仕事だ。随分ランチさまも智勇兼備の勇將ぢやないか」

兄妹は一口々々胸を轟かせ乍ら聞きみたり。

丙「何だか人くさいぞ。怪體な匂ひがするぢやないか」

乙「人くさいなんて丸で鬼のやうな事をいふない。アタ厭らしい、鬼娘の出る森だと思つて馬鹿な事を云ふものぢや無い。ナーニ此處に人が居つて耐るか。俺様のやうな英雄豪傑でも氣味の悪い山口の森だ。こんな所へ夜夜中うるついて居ようものなら大蛇に吞まれて了ふワイ」

丙「それでも何だか人間の匂ひがするやうだ、併し人間の臭のするのは當然だらうよ。此處にも一人人間が居るのだからなア」

乙「人間が一人とはなんだい。三人居るぢやないか」

丙「俺は人間だが他は鼬と鹿だ」

乙「ナニを吐すのだい。ドー狸奴が」

丙「狸でも何でもホツチツチだ。俺の人間さまの鼻には何うも【異性】の匂ひが

するのだ。随分【威勢】のよい匂ひだよ。一寸男の匂ひもするやうだし」

乙「ハー、さうすると貴様もやつぱり四足だ。犬の生れ代りだな。さうでなくち

や、それ丈鼻の利く氣遣ひはないわ。【ハナハナ】以て奇妙奇天烈な動物だなア」

楓は可笑しさに唳えかね、「ホ、ホ、ホ、ホ」と吹き出せば、

乙「ソラ鬼娘だ。ホ、ホ、ホ、だ。オイ逃げる逃げる」

甲丙「逃げるといつたつて逃られるものか。モウあきらめるより仕方がないわ。

肝腎の腰が命令權に服従せぬのだから」

傍の木蔭から、

「アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、」

丙「ソレ見たか、俺の鼻は偉いものだろ。若い男女が手に手を取つて、ソツと吾

家を脱け出し、たとへ野の末、山の奥、虎狼の住處でも、などと洒落よつて戀の

道行きをやつてるのだよ。斯う分つた以上は矢張人間だ、驚く必要はないわ」

甲 乙は胸をなで下ろし、

「誰も驚いてゐるものがあるかい。貴様一人驚いて居よるのだ。オイ若夫婦、そんな處へ隠れて居らずに、御遠慮なく此處へ罷りつン出て、何んな面付きをして居るか、一つ御慰みに供したら何うだい」

楓はやさしい聲で、

「兄さま、三人の御方がアナイ云うてゐやはりますから、一寸顔を拜まして上げませうかなア。ホ、ホ、ホ、」

甲 「ナ、ンだ、馬鹿にしやがるな。拜まして上げようなんて、何んなナイスかしらぬが、女位に精神をとるかすアーちやまぢやないぞ、エー。世間體をつくりよつて「兄さま、ホ、ホ、ホ、」が聞いて呆れるワイ。貴様は親の目を忍んで喰つ付いてゐるのだろ。サア此處へつン出て何も彼も白状するのだ。早う出て來ぬかいグツグツしてゐると爺婆の駕籠が出て來ると迷惑だ。それ迄に首實檢をしておく必要があるワ」

楓かへで「ホ、、、、アタイもアンタ方の首を實檢して置く必要があるのよ。幸ひお月様も御照り遊ばし、よく見えるでせう。アタイ毎晩此森に現はれて来る鬼娘ですわ。ビックリなさいますなや」

甲かひ「エー、氣味たの悪い事を吐す奴だ。モウ拜謁はまかりならぬ。勝手に森の奥へすつこみて、萬劫末代姿を現はさぬやうにいたせ」

楓かへで「アタイその爺さまと婆さまとが喰ひたいのよ。それで此處に青鬼の兄さまと待つてゐるの。皆さま、御苦勞だね。馬さま、鹿さま、狸さま。ホ、、、、」

甲かひ「エー鬼娘迄が馬鹿にしよる哩。コリヤ鬼娘、コレでも一人前の立派な兄さまだぞ。澤山のナイスにチャホヤされて袖が千切れて忪らないから、浮世のうるさを避けてバラモン教の先生になつてゐるのだ。何程惚たつて駄目だ。四十八珊瑚のクルツプ砲を發射してやらうか。貴様も地獄から來たのだらうが、地獄へ歸つてアーちやまに肱鐵をかまされたと云つては貴様の面が立つまい。さア、早く退却々々」

斯かる處へ十七八人の同勢、抜き身の鎗を振りかざし、二挺の駕籠をかつがせ

てスタスタとやつて来る。先頭に立つた男は三人の姿を月影に眺め、  
男「ヤア此處に何だか怪しいものが居る。大方三五教の奴だろ。オイ皆の者、首  
途の血祭に芋刺しにして行け」

甲乙丙は驚いて両手をひるげ、

「アーモシモシ アクに、タクに、テクだ。一寸此處で鬼娘が出やがったから評  
定をしてゐるのだ。見違へて貰つちや困るぞ」

槍持「ナンダ斥候隊の阿克、タク、テクぢやないか。何故こんな處にグツグツし  
てゐるのだ。敵状は何うなつたか」

甲「何うも斯うもあつたものぢやない。今此處に鬼娘が現はれたのだ。聲ばつか  
り聞えてチツとも姿が見えないのだよ」

槍持はビクビク震へ出した。

「ナ、ナ、ナニ鬼娘が出たと。ソ、ソ、ソ、そしてそれは何うなつたのだい」

甲「俺に惚よつたと見えて、どうしても斯うしても除かぬのだよ。大雲山のお札  
でもあつたら貸て呉れないか」

男「怪體な事を云ふぢやないか。ママア此處へ一つ駕籠を下ろして調べて見よう。全隊止まれ！」  
と號令する。十七八人の同勢は鎗を杖につき足を揃へてピタリと止まつた。二人を乗せた籠は手荒く地上に下ろされた。  
森の中から邊りに響く大聲の宣傳歌さやさやに聞え來たる。

神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

三五教の宣傳使

われは治國別の神

ランチ將軍片彦の

手下の奴共よつく聞け

河鹿峠に陣取りて

生言靈に妙を得し

天下無雙の宣傳使

汝等一族悉く

生言靈に拂はむと

今や此處迄向うたり

もはや逃れぬ百年目

汝の運も早つきぬ

二つの籠をそこに置き

一時も早く逃げ歸れ



拒むに於ては某が  
又もやきびしき言靈を

霰の如く打出し  
曲に従ふ者共を

木端微塵に踏み碎き  
滅しくれむは目の當り

此世を造りし神直日  
心も廣き大直日

唯何事も吾々は  
直日に見直す宣傳使

汝の罪は憎けれど  
皇大神に神習ひ

仁慈を以て救ふ可し  
あゝ惟神々々

神の言葉に従へよ

此言靈に不意を打たれて二挺籠を路上に捨てた儘、バラバラパツと蜘蛛の子を散らすが如く生命からがら逃げて行く。アク、タク、テクの三人は腰をぬかして逃げ後れ、路傍に四這ひとなつて慄ひ戦いてゐる。楓は森かげを立出で山駕籠の扉を開いて、アツと計りにおどろき叫ぶ。

(大正一一・一二・八 舊一〇・二〇 外山豊二録)

(昭和九・一二・二七 王仁校正)

第一二章 大歡喜(一一八一)

治國別の言靈に一同は驚き目を覺まし、萬公は目をこすり乍ら、

先生貴方は俄に言靈を發射なさいましたが、何か變つた者が現はれたのですか

ウン

オイ晴公、楓さまの姿が見えぬぢやないか。大蛇に吞まれて了つたのぢやあるまいかな。オイ五三公、龍公、何をグツグツしてゐるのぢやい。サア探した探した

と慌まはる。五三公、龍公、松彦も目をキヨロキヨロさせ乍ら四邊を見まはし、二人の姿の無きに驚いて居る。

御苦勞だが四人共、森の外へ出て、ここへ駕籠をかついで來てくれ

萬公まんこう「駕籠かごを昇かげとは、ソリヤ又また妙なことを仰おつ有しいますなア」

治國はるくに「行いつて見たら判わかるのだ。晴公はるこうと楓かへでさまが、待まつてゐるよ。サア四人よにん共とも早く

行いつたり行いつたり」

萬公まんこう「オイ、何なには免ともあれ先生せんせいの御命令ごめいれいだ。行いつて見みようかな」

三人さんにんは「ヨ―シ合點がつてんだ」と萬公まんこうの後あとにつき、森もりの外そとへと走はしり行ゆく。後あとに治國別はるくにわけは

合掌がつしやうし乍ながら、獨言ひとりごと、

「あゝ有難ありがたい、神様かみさまの御引合おひきあせ、どうやら親子きやうだい兄妹たいめんの對面たいめんが許ゆるされた様やうだ。之これか

ら一骨折ひとほねをらなくてはなるまいと、昨夜さくやも思案しあんにくれて眠ねむられなかつたが、何なんとマ

アよい都合つがふに神様かみさまはして下くださつたものだ。之これと云いふのも昨夜さくや言靈ことたまの宣傳せんでん歌うたを歌うたつ

た神力しんりきの御蔭おかげだらう。道ことばは神かみと共ともにあり、萬物ばんぶつ之これに依よつて造つくらるゝとの聖言せいげんは今いま

更さらの如ごとく思おもはれて實じつに有難ありがたい、あゝ偉大あだなる哉かな神かみの御神力ごしんりき、言靈ことたまの效かう用よう」

と感歎かんとんし乍ながら、東ひがしに向むかつて天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、天あまの數歌かずうたを歌うたひ上げ、神言かみごとまで恭うやうや

しく詔上のりあげて了しまつた。そこへ二挺にちやうの駕籠かごを昇かいで、一行いっかう六人ろくにんは歸かへり來きたる。

治國別はるくにわけは、

「ヤアお目出度う。晴公さま、楓さま、神様の御神徳は偉いものですなア」

「先生、晴公は、おかげで両親に夕、対面が出来ました」

と早くも聲を曇らしてゐる。楓は紅葉のやうな愛らしき手を合せ、治國別に向ひ、  
覺束なげに泣聲交りに惟神靈幸倍坐世を幾度となく繰返して居る。

「先生、イヤもう何うもかうもありません。偉いものですなア、大したもの  
ですなア、エ、ー、こんな結構なことは萬々ありません。本當に嬉しいですワ、  
何と云つて御挨拶を申上げたならよいやら、萬公は言葉も早速に出て來ませぬワ」

「ヤア結構だ、萬公サア早くお二人をここへ出して上げてくれ」

「萬々々承知致しました。コレコレ晴公さま、楓さま、何を狼狽へて居るのだい。  
お前さまも手傳はぬかい、コラ五三公、松彦、龍、何をグツグツしてゐるのだい。  
千騎一騎の此場合安閑としてゐる時ぢやないぞ。サア対面ぢや対面ぢや、言靈だ言

靈だ、言靈の幸はふ國だ」

と萬公は駕籠のぐるりを幾度ともなく、お百度参りの様に廻轉してゐる。老夫婦  
は悠々として駕籠より立出で、治國別の前に兩手を合せ、

「三五教の活神様、有難うムいます。私は珍彦と申す者でムります」

「妾は妻の静子でムります。お禮は此通りでムります」

と両手を合せ、嬉し涙を瀧の如くに流してゐる。晴公も楓も茫然として、餘りの嬉しさに言葉もなく、兩親の顔を横から見守りゐるのみ。

「何とマア偉いこつちやないか、エ、ー。本當に誠に欣喜雀躍、手の舞ひ足の踏む所を知らずとは此事だ。餘り嬉しくてキリキリ舞を致すものと、怖うてキリキリ舞致す者と出来るぞよ、信神なされ、信神はマサカの時の杖になるぞよ……との御聖言はマアこんな事だらう、萬々々萬公の満足だよ。」

あゝ有難い有難い 神の力が現はれて

常夜の暗の如くなる 此山口の森蔭で

親子四人の巡り合ひ おれの親でもなけれ共

矢張嬉しうて萬公は 手の舞ひ足の踏む所

知らぬばかりになつて來た 三五教の神様は

本當ほんたうに偉えらいお方かたぢやなア

バラモン教けうの曲神まがかみは

バカこつちやうの骨頂こつちやうだガラクタの

力ちからの足たらぬ厄やくざがみ雜神

折角せつかくここ迄までやつて來きて

肝腎かんじん要かなめの品物しなものを

途上とじやうに放ほり出だし逸いち早はやく

治國はるくにわけ別ことの言靈たまに

恐おそれて逃にげ出だす可を笑かしさよ

あゝ面おも白しろい面おも白しろい

オツトドツコイ有あり難がたい

それだに依よつて萬公まんこうは

何時いつも喧やかましう言いうてゐる

三あな五な教ひけうぢやないことにや

誠まことの救すくひは得えられない

生言靈いくことたまの神しん力りきは

本當ほんたうに偉えらい勇いさましい

齋苑いその館やかたに澤山たくさんの

神かみの司つかさはあるけれど

一いち番ばん偉えらい空助もくすけの

あとに續つづいた龜彦かめひこは

治國はるくにわけ別ことと云いふ丈だけで

天下てんか無む雙さうの宣傳せんでん使し

俺おれの肩かたまで廣ひろうなつた

オイオイ五い三公そう龍公たつこうよ

お前まへのやうな仕合しあはせな

奴やつが世せ界かいにあらうかい

サア是これからは是これからは

ハルナの都を蹂躪し 大黒主の素つ首を

言靈隊の神力で 捻切り引切り月の海

ドブンとばかり投込で 天が下にはバラモンの

曲津の神の影もなく 伊吹拂ひに吹き拂ひ

天地を浄め神界の お褒めをドツサリ被りて

至喜と至樂の天國を 地上に建設せうぢやないか

治國別の先生よ 本當に貴方は偉い方

始めて感じ入りました どうぞ私を末永う

お弟子に使うて下さんせ コレコレ晴さま楓さま

お前も一つ喜んで 歌でも歌うたらどうだいナ

地異天變もこれ丈に 突發したら面白い

オツトドツコイ有難い 三五教の神様に

早く御禮を申しやいのう 何をグズグズしてムる

側から見てもジレツたい あゝ惟神々々

神の御前に萬公が

今日の恵を謹みて

感謝し仕へ奉る

朝日は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共

假令大地は沈む共

星は天よりおつる共

三五教はやめられぬ

ホんに結構な御教だ

不言實行といふことは

三五教の神様が

手本を出して下さつた

これから心を改めて

口を謹み行ひに

誠の限りを現はして

神の御子たる本職を

盡そぢやないか皆の者

あゝ有難い有難い

有難涙がこぼれます

ヤツトコドツコイ ドツコイシヨ

ドツコイドツコイ

コレワイシヨ ヨイトサア ヨイトサア

ヨイヨイヨイのヨイトサア

ドツコイドツコイ ドツコイシヨー

と夢中になつて、廣場を飛廻る。治國別は言も靜に、



「珍彦さま、大變な苦しい目に會はれたでせうな。お察し申します。静子さまも無御心配をなされたでせう」

珍彦は涙を拭ひ乍ら、

「ハイ有難うムいます。アーメニヤの大騒動に依つて親子思ひ思ひに離散し、漸くにして娘の所在を尋ね、三人手に手を取つて、兄俊彦の行衛を尋ねむものと、いろいろ艱難辛苦を嘗め、TEAMス山の麓を流るるライオン川の畔迄参りました所、老の疲れが來たものか、不思議にも夫婦の者が身體の自由を失ひ、一人の娘に二人の親は介抱をされ、あるにあらぬ困難を致して居りました所へ、黄金姫様が美しい娘さまと共に通り合はされ、いろいろと結構なお話を聞かして下さいまして、お蔭で夫婦の者は氣分も爽快になり體の悩みも段々と癒つて参りました。小さい草小屋を造り、川端の一軒家で親子三人が暮して居りました所へ、ランチ將軍の手下がやつて來て、夫婦の者の祝詞の聲を聞き……貴様は三五教の間者だろ……と云つて、無理にも高手小手に縛められ駒に乗せられ、ランチ將軍の陣營迄送られました。吾々夫婦はどうなつても構ひませぬ。惜くない命なれど、娘や

兄あにの事ことが案あんじられ、寝ねても起おきても、夫婦ふうふの者ものが霜しも寒さむき陣營ぢんえいに捉とらへられて、無念むねんの涙なみだを絞しぼつて居をりました〆

と言いひさして、ワツとばかりに男泣をとこなきに泣なく。

治國はるくにわけ別べつは憮然ぶぜんとして慰なぐさめるやうに、

「それは御老體ごらうたいの身みを以もつて、エライ御艱難ごかんなんをなさいましたな。併しかし乍ながら最早御安もはやごあんし心をなさいませ。吾々われわれのついでにゐる限りは最早大丈夫もはやだいぢやうぶですから〆

珍彦うづひこは「ハイ」と云いつたきり、又またもや泣なきじやくる。静子しづこは又またもや涙片手なみだかたてに、

「お話申はなしまをすも涙なみだの種たね乍ながら、ランチ將軍しやうぐんの陣營ぢんえいへ夫婦ふうふは連つれ行ゆかれ、鬼おにのやうな番ばん

卒そつに朝あさから晩迄ばんまで、身みに覺おぼえもないことを詰問きつもんされ、身體しんたい所構ところかまはず鞭むちうたれ、實じつに苦くる

しうムごぎいました。そしてランチ將軍しやうぐんの前に時々ときどき引出ひきだされ……其方そのほうは三五教あななひけうの空助もくすけ

であらう。汝なんぢは黒姫くろひめであらう、白状致はくじやういたせ。そして其方そのほうの同居どうきよしてゐた娘むすめは初稚姫はつわかひめ

に違ちがひなからう。サアどこへ隠かくした、所在ありかを知らせ……とエライ拷問がうもん、到底命たうていのちは

なきものと覺悟致かくごいたして居をりましたが、死ぬしる此身このみは厭いとはねど、どうぞして吾子わがこ二ふた

人りに廻めぐり合あはねば死ぬしぬにも死しねないと思おもひまして、嘘うそを言いつては濟すまないと思おもひ存ぞんじ

乍ら、向うの尋ぬるままに、夫は空助でムいました、……と答へ、私はまがふ方なき黒姫だ、そして娘は初稚姫に相違ムいませぬ……と言つてのけました。そして所がますます詮議が厳しくなり、三五教の宣傳使はハルナの都へ向つて、何人ばかり出張したかとか、いろいろと存じもよらぬことを詰問され、苦しさまぎれに口から出任せの返答を致しました所、齋苑の館へ送つてやらうと云つて、吾々夫婦を後手に縛り山駕籠に投込み、家來に昇がせてここ迄つれて來ました。吾々夫婦はどうなることかと胸を痛めて居りましたが、思ひもよらぬ貴方様のお助けに預かり、其上焦れ慕うた二人の子に會はして貰ひ、斯様な嬉しいことは、天にも地にもムりませぬ。命の親の活神様』

と又もや手を合はしてワツとばかりに泣伏しにける。

晴公は珍彦の側に寄り、

「父上様、お久しうムいます。よくマア生きてゐて下さいました。私は俊彦でムいます、若い時はいろいろと御心配をかけましたが、三五教の教を聞くにつけて、親の御恩を思ひ出し、何卒兩親に會はして下さいませと、朝夕祈らぬ間とはム

いませなかつたのでムります」

と又もや涙を絞る。珍彦は鼻を噉り乍ら、皺手を伸ばして、晴公の頭を撫でまはし、

「あゝ俊彦、よう言うてくれた。其言葉を聞く以上は此儘國替をしても、此世に残ることはない。あゝ有難い。持つべきものは吾子だ。コレ俊彦、安心して呉れ、私は年はよつてゐても體は達者だから、ここ二年や三年にどうかうはあるまいから」

「ハイ有難うムいます、これから力限り孝行を勵みます。今迄の罪は許して下さいませ」

といふ言葉さへも涙交りである。楓は静子の手をシツカと握り、  
「お母アさま、随分お困りでしたらうねえ。私、どれ丈泣いたか知れませぬよ。ウブスナ山の齋苑館へ参拜して、御兩親の所在を知らして貰はうと、身をやつして、河鹿峠の山口迄参りました所、道行く人の話に聞けば、バラモン教の軍勢が谷道を扼してゐるといふことを聞きましたので、あゝ是非がない、モウ此上は兩

親しんの無事ぶじを祈いのり、かたきの滅亡めつぼうを祈いのるより、私わたしとしての盡つくすべき途みちはないと思おもひ、此この恐おそろしい魔まの森もりの奥おくに大蛇をろちの岩窟いはやのあることを聞きき、ここに忍しのびて居をればバラモンさんしちにじふいちの捕手とりても滅多めつたに尋ねては來きまいと思おもひ、恐おそろしい岩窟いはやに身みを忍しのび、三七廿一さんしちにち日の夜よまみ參まりを、鬼おにに化ばけて致いたして居をりました。心願しんぐわんが通とほつたと見みえて、三七日さんしちにちの上あがりに兄にいさまに巡めぐり會あひ、又またお父とうさまお母かアさまに會あはして頂いたきました。どうぞ御安心ごあんしん下さいませ、斯かやう様な偉えらい宣傳使せんてんし様の懷ふところに抱いだかれた以上いじやうは最早もはや大丈夫だいぢやうぶでムい  
ます」

と涙交なみだまりに慰なぐさめる。静子しづこは楓かへでの背せに喰くらひつき、嬉うれし涙なみだにかきくれる。これより治はる國別くにわけの命めいに依よつて、珍彦うづひこ、静子しづこ、楓かへで、晴公はるこうの四人よにんを玉國別たまくにわけのこもつてある祠ほくらの森もりへ手紙てがみを持たせてやることとした。そして山口迄やまぐちまで宣傳使せんてんし一行いっかうは送り届とどけた。親おやこ子こ四人よにんは玉國別たまくにわけに面會めんくわいし、神しん殿造營でんざうえいの手傳てつたひをなし、夫婦ふうふうは遂つひに宮みやのお給仕役きふじやくとなり、楓かへでは五十子いそこ姫ひめの侍女じぢよとなつて、神しん殿落成でんらくせいの後齋苑館のちいそやかたに歸かへり、神かみの教をしへを研究けんきうし、遂つひには立派りつぱなる宣傳使せんてんしとなつて神かみの御恩ごおんに報はうずる身みとはなりにける。

(大正一一・一二・八 舊一〇・二〇 松村眞澄録)

(昭和九・一二・二八 王仁校正)

第一三章 山口の別(一一八二)

治國別一行は珍彦親子四人を河鹿峠の上り口迄送り届け、  
茲に一行は路傍の巖  
に腰うちかけ、別れの挨拶に代へて歌ふ。晴公の歌、

☐ コーカス山に現はれし 大氣津姫の部下となり

八王神の列に入り 時めき給ひし吾父も

コーカス山を退はれて 落ち行く先はアーメニヤ

ウラルの彦やウラル姫 開き給ひしウラル教

鹽長彦の大神を 盤古神王と稱へつつ

教を四方に傳へ行く 數多の司を従へて

ときめき渡り居たりしが  
バラモン教の大棟梁

鬼雲彦の部下共に  
打ち亡ぼされ神司

信徒共に四方八方に  
雲を霞と逃げ散りぬ

其時吾は辛うじて  
夜陰に紛れ逃げ出し

彼方此方とさまよひつ  
吾兩親や妹の

在所求むる時もあれ  
三五教の神司

龜彦司に助けられ  
齋苑の館に導かれ

尊き神の御教を  
朝な夕なに教へられ

御伴となりて河鹿山  
烈しき風を浴び乍ら

漸く越えて山口の  
森の木蔭に来て見れば

蟲が知らすか何とやら  
寢られぬままに只一人

吾師の君の宣らせたる  
生言靈を思ひ出し

考へすます折もあれ  
かすかに見ゆる火の光

嬉しや嬉しや言靈の  
吾神力の現はれて

暗やみに包つつみし此この森もりを 隅くまなく照てらすか有あり難がたや

吾わが言こと靈たまの神しん力りきも 愈いよいよ現あらはれ來きたりしと

笑えつ壺ぼに入いりし時ときもあれ おひおひ近ちか寄よる火ひの光ひかり

よくよく見みれば此こは如い何かに 形ぎやう相じやう實じつにも凄すさまじき

肌はだへ粟あはを生しやうずべき 鬼き女ぢよの姿すがたに驚おどいて

何なんと言こと葉はも行ゆきつまり 慄ふるひ戦おのく時ときもあれ

吾わが師しの君きみの御み諭さとしに 怪あやしの女をんなは妹いもうとと

分わかりし時ときの嬉うれしさよ 歡くわん喜きのあまきり氣きは勇いさみ

寢ねられぬまいまもに妹いもうとの 手てを曳ひき乍ながら森もりの外そと

小こ徑みちを傳つたひスさんタちやうと 三さん丁ちやうばかり進すすむ折をり

足あしを早はやめて馳はせ來きたる 三みつ葉は葵あひの紋もん所ところ

記しるした提ちやう燈ちんぶら下さげて 此こ方なたをさして出いで來きたる

こは一いち大だい事じと兄きやう妹だいは 大おほ木きの蔭かげに身みを寄よせて

様やう子すつ覗かがひ居ゐる中うちに 巴ばラらモん教けうの斥せき候こう兵へい



アク、タク、テクの三人は 臆病風にさそはれて  
 下らぬ事を喋り出し 終には父母の所在迄  
 知らず知らずに喋り出す アツと驚く間もあらず  
 後より来る山駕籠は まさしく吾の父母と  
 覺りし時の驚きは 何に譬へむ物もなし  
 三五教の大神の 深き恵みと師の君の  
 生言靈の力にて 親子兄妹巡り合ひ  
 互に昔を語り合ひ 嬉し涙にくれにける  
 あゝ惟神々々 神の恵みの浅からず  
 日頃慕ひし父母や 吾妹に目のあたり  
 無事なる顔を合せつつ 親子兄妹勇み立ち  
 ウブスナ山に禮詣り 吾師の君に許されて  
 祠の森に籠もります 玉國別や五十子姫  
 司の前に進み行く 吾身の上こそ樂しけれ

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くとも

星は空より落つるとも 山裂け海はあするとも

皇大神の御恵みは 夢に現に忘れむや

吾師の君よいざさらば 神の恵みを蒙りて

一時も早くハルナ城 大黒主を言向て

太しき功績を立て給へ 皇大神の御前に

花々しくも復り言 申させ給ふ吉日を

指折り數へ大神の 御前に祈りて待ち奉る

あゝ惟神々々 御靈幸ましませよ。

三五の神の恵みに送られて

河鹿峠もやすく越えなむ。

玉國別神の司のあれませる

祠ほこらの宮みやに疾とくも進すすまむ。

皇神すめかみの瑞みづの御舍みあらかた建て終をほせ

神かみの御稜みいづ威をを四方よもに照てらさむ

治國はるくにわけ別ち千早ちはや振ふるる神かみに習ならひて親おやと子こは

世よびと人まもを守まもれ千代ちよに八千代やちよに。

河鹿山かじかやまたうげ峠は如何いかに險さかしとも

神かみの惠めぐみにやすく渡わたらむ。

玉國たまくにわけ別かみ神かみの命みことに會あひませば

治國はるくにわけ別はよしと傳つたへよ。

松彦まつひこや萬公まんこう、五三公いそこうも恙つつがなく

道みちに盡つくすと傳つたへ給たまはれ

晴公はるこう 有難ありがたし吾師わがしの君きみの言ことの葉はは

胸むねにたたみて忘れわすざらまし。

足乳根たらちねの親おやの命いのちを助たすけまし

妹いもに會あせし神かみぞ尊たふとき。

これよりは親おや子こ兄あ妹いも睦むつみ合あひ

神かみの大道おほぢに仕つかへまつらむ

珍彦うづひこ 千早振ちはやぶる神代かみよの春はるの巡めぐり來きて

親おや子は千代ちよの春はるに會あふかな。

三五あなひの神かみの惠めぐみを今いまぞ知しる

治國はるくに別の口くちを通とほして。

河鹿山かじかやま登のぼりて行ゆかむ吾身わがみをば

守まもらせ給たまへ天地あめつちの神かみ。

海山の恵を受けし師の君を  
朝な夕なに神と齋かむ

静子 千萬の嘆きを受けし吾身にも

今日は嬉しき旅をなすかな。

親と子を救ひ給ひし神と師の

恵は死すとも忘れざるべし。

よしやよし、此まま君に會はずとも

吾魂は君に添ふべし。

師の君の面影見ればなつかしき

思ひに沈む初冬の空。

風の吹き荒びたる山道も

神を思へば苦しくもなし

楓かへで □ なつかしき父ちちと母ははとに巡めぐり合あひ

兄あにの君きみにも會あひし嬉うれしさ。

皇神すめかみと吾師わがしの君きみは何時いつまで迄も

吾等われら親子おやこを恵めぐませ給たまへ。

ゆくりなく暗やみの木蔭こかげに巡めぐり合あひ

神かみの恵めぐみに浸ひたりけるかな。

俊彦としひこの兄あにの命みことの歸かへりまさは

吾師わがしの君きみの氣遣きづかはれける。

さり乍ながら吾師わがしの君きみは活神いきがみよ

罪つみに穢けがれし人ひとの子こならねば。

師しの君きみの行手ゆくてを祈いのり奉たてまつり

朝あさな夕ゆふなに神かみに仕つかへむ □

はるくにわけ  
治國別「かへでひめ  
こころやす  
おぼしめ 楓姫、心安けく思召せ

われ  
吾には神かみ  
まもの守りありせば。

すめかみ  
皇神の道傳みちつた  
かむつかさへゆく神司

まがみ  
さやる魔神の如何いかであるべき「

まんこう  
萬公「としひこ  
ふたり  
おや  
たいせつ 俊彦よ二人の親を大切に

まほもつと  
又妹も慈みませ。

おや  
親となり子こ  
うまと生るも神かみ  
よの代の

えにし  
つきぬ縁と聞きくぞ目め  
で  
た出度き。

ひとびと  
人々に百もも  
おこなの行ひありとても

かう  
孝より外ほかによき道みちはなし。

あさゆふ  
朝夕に神かみ  
あやまを敬あやまひ足たらちね乳根の

おや  
親に仕つかへて世よを送おくりませ。

年若き汝が妹を憐れみて

誠の道に育て給はれ

晴公「あり難し萬公さまの思召

胸にたたみて忘れざるべし。

友垣の情誼を今ぞ悟りけり

汝の心の赤さ親しさ

五三公「晴公よ親を大切に妹を

慈しみつつ神を敬へ。

俺は今吾師の君に従ひて

進みて行かむ神の大道を。



暇いとまあ**ら**ば五い三そ公こうの事ことを思おもひ出だし

神かみの御前みまへに祈いのつて呉くれよ。

さり乍ながら親おや兄きやう弟だいを後あとにして

俺おれを祈いのれと云いふのではない」

晴公はるこう「五い三そ公こうさまいそいそとして居ゐておくれ

お前まへの事ことは忘わすれないから。

噫くつしやみが**出**た時ときや俺おれを五い三そ公こうが

誹そしつて居をると思おもひ喜よろこぶ」

五い三そ公こう「噫くつしやみの**一**つ出でるのは褒ほめられて

居をると思おもうて腹はらを立たてなよ。

噫くつしやみの二ふたつ出でるのは誹そしられて

居をるのぢやけれど俺おれはそしらぬ。

噫くつしやみの三みつつ出でるのは笑わらはれて

居ゐるのだけれど俺おれは笑わらはぬ。

噫くつしやみの四よつつ出でるのは風かぜを引ひく

之これを思おもうて自じ愛あいなされよ。

五い三公そこうは蔭かげぐち口い言いふ様やうな男をとこでは

無ないと云いふ事こと知しつて居ゐるだろ

晴公はるこう「そらさうだ、お前まへに限かぎりそんな事こと

云いふとは更さらに俺おれは思おもはぬ」

龍公たつこう 神様の御縁かみさまのごえんで心安こころやすくなり

もう別わかれるが情なさけないぞや。

晴公はるこうさま二人ふたりの親おやを大切たいせつに

たまには俺おれの事ことも思おもへよ。

その代かはり俺おれは朝夕あさゆふ晴公はるこうの

身みの幸さいはひを祈いのり居をるぞや  
『

晴公はるこう 龍公たつこうさま何卒どうぞ宜よろしう頼たのみます

何時いつかはお目めにかかると時ときまで  
『

松彦まつひこ 河鹿山かじかやまたうげ険けしく風かぜ荒あく

猿さる棲すみ居をれば氣きをつけて行ゆけ。

玉國別神たまくにわけかみの司つかさぢやなけれども

お猿さるの奴やつに崇たられなゆめ。

逸いちはや早く祠ほこらの森もりに行ゆきまして

瑞みづの御舍仕みあらかつかへまつれよ。

道公みちこうや伊太公いたこう、純公すみこうの友垣ともがきに

宜よろしう云いうたと傳つたへて呉くれよ』

晴公はるこう『松彦まつひこがそんな事ことをば云いはずとも

俺おれが宜よいよに云いうておくぞや。

治國別神はるくにわけかみの命みことの神司かむつかさに

山やまより高たかき恵めぐみを感じかんじす。

いざさらば之これより親おや子こ四人よたりづれ

險けはしき坂さかを登のぼり行ゆかなむ。

治國はるくにわけ別その其他た三人みたりの司達つかさたち

神かみの恵めぐみに安やすく進すすめよ

楓かへで 楓かへで いざさらば命いのちの親おやの師しの君きみに

名なごり残をし惜をしくも立たち別わかれなむ

治國はるくにわけ別わけ 親おやと子こと三人さんにん四人よにん睦むつび合あひ

神かみの大道おほぢを登のぼり行ゆきませ

斯かく互たがひに饑別せんべつの歌うたを歌うたひ交かはし南みなみと北きたに袂たもとを分わかちける。あゝ惟かむ神な靈がら幸たま倍ちは坐へ世ま。

(大正一一・一二・八 舊一〇・二〇 北村隆光録)

(昭和九・一二・二九 王仁校正)

第一四章 思ひ出の歌（一一八三）

治國別一行は、河鹿峠の山口にて親子四人に訣別し、再び足を早めて山口の森に向つた。萬公は道々足拍子を取りながら進軍歌を歌つた。

神が表に現はれて 善と惡とを立分ける

この萬公は幼少から あいつは偉い男だと

村人たちにほめられて 奇童神童と讃へられ

吾兩親も喜びて 家の寶が生れたぞ

キット家をば起すだらう 天下無雙の豪傑に

出世をするに違ない なぞと頻りにほめそやし

蝶よ花よと育てあげ 二つの眼へ入つても

痛ない所までかはいがり 噛んだり吐いたり抱いたり

背中におぶつて山路を 助けて日夜に甘やかし

たうとうこんな【ガラクタ】に 寄つてかかつて育て上げ

里人達に 蚰蜒の やうに 嫌はれ 痰唾を

吐きかけられて 犬のよに 杓に水を汲み取つて

追ひかけられるよな 淺ましい 極道息子にして 仕舞つた

親を恨むぢやなければども 可愛がりよが 違た故

鼻垂れ小僧の俺達に 呑ました甘茶が 毒となり

挺子でも棒でも 動かない やんちや男に 作りあげ

女に溺れる 賭博打つ 人の物こそ 取らないが

酒泥棒の【やんちやくれ】 厄介者にして 了うた

あゝ 惟神々々 それでも 尊き神さまは

見捨て給はず 俺のよな 仕様も ようもない 奴を

仁慈無限の手を 延べて 可愛がつて 下さつた

二人の親の愛より も 神の恵は 幾倍か

分らない程有難い 仁慈の教を 聞いてから

拗ねぢけ曲まがつた魂たましひも

根本こんぽん的に改か良りし

今いまは嬉うれしき三あ五なの

名なさへ目め出で度たき宣せん傳でん使し

治は國くに別わけのお伴ともして

惡あく魔まの征せい討たうに上のりゆく

尊たふとき身みとはなりにけり

此この世よをつくりし神かむ直な日ほひ

心こころも廣ひろき大おほ直な日ほひ

直な日ほひにみ直なしき聞きな直ほし

救すくひ玉たまひし皇すめ神かみの

惠めぐみをおも思うひうかか浮うべては

涙なみだの露つゆの晴はれまなし

俺おれもまこころこらこ赤ま心こを

一いつ生しやう懸けん命めいにみがあ研あぎあ上あげ

押おしおもお押おさおれおもおせおなおいおよおな

神かみの司つかさと選えらまれて

先せん祖ぞの御み名なはい云いふいもさ更さら

吾わが兩りやう親しんの御み名な迄までも

現あらはあらあまあつあつありあ養やう育いくの

そそのそ大たい恩おんにむくむ報むはむと

飯めし食くふひ間まもわすわれわなわい

年としの薬くすりと云いふいものか

此この頃ころ親おやがこひこ戀こしこなこり

早はやく安あん心しんさあせあたあいあと

思おもひおはお胸むねにみ満あちあ溢あれあ

氣きがき氣きできなきらきぬき吾わが身み魂たま

二ふ人たりのお親やにかうか行かうを



したい時分にや親はなし  
それぢやと云つて石塔に

温い布團も着せられず  
何程甘い飲食を

供へた處で甘いとも  
何ともかとも云はぬよに

なつて了つたらどうせうぞ  
三五教の神様へ

どんな事でも致します  
どうぞ二人の親達の

命をのばして萬公が  
天晴手柄を致すまで

生かして置いて下さんせ  
それが私の第一の

朝な夕なの願ひぞや  
森の木蔭で晴公が

戀しき親に廻り會ひ  
妹と遇うた嬉しさを

眺めた時の吾心  
飛び立つばかり嬉しうて

じつと濟まして居れなんだ  
慌者だと笑はれよが

剽輕者だと誹られよが  
あの場に臨むでそんな事

構うて居るよな間があるか  
あゝ惟神々々

私を育てた兩親も  
朝な夕なに神様に

両手を合せ萬公が 一時も早く改心し

一人前の益良雄に なつて故郷に錦をば

飾つて歸り來ますやうと 祈つて御座るに相違ない

山より高い父の恩 海より深い母の慈悲

それに増してなほ高い 深い恵は神の恩

あゝ惟神々々 この萬公の赤心を

諾なひたまひて吾靈を 清く守らせ玉へかし

吾師の君に従ひて 旗鼓堂々と神の道

今や進むで出でて往く 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 如何でか忘れむ親の恩

忘れてならうか神の恩 神は吾等と俱にあり

人は神の子神の宮 こんな嬉しき御教を

聞いたる上は一日も 仇に月日は送れない

あゝ惟神々々 恩頼を願ぎまつる

はるくにわけ  
治國別は道々歌ふ。

高天原はいづくなる

清く正しき神の國

榮え久しきパラダイス

御靈の清き人々の

現世の衣をぬぎすてて

常磐堅磐に榮えゆく

いと珍しき神の國

高天原はいづくなる

主の御神のあれませる

夜なき清き神の國

月日は清く明けく

星の影さへキラキラと

地上の世界に比べては

幾百倍の光あり

この樂園に住む人は

皆天人と讃へられ

不老と不死の境界に

置かれて主神を信愛し

無上の正覺開きつつ

いや永久に榮えゆく

あゝ惟神々々

神の御國ぞ尊けれ

高天原の天界は

茲に二つの區別あり

其第一を靈國と

稱へて神の在す國

第二の國を天國と

稱へて清き身靈等の

地上を捨てて天人と

成り濟ましたる人々の

喜び勇み遊ぶ國

靈國、天國諸共に

愛と信との日月は

夜晝なしに輝きて

金銀瑪瑙瑠璃碑磔

玻璃や珊瑚の殿堂や

樹木は野邊に繁茂して

玲瓏玉の如くなる

天人男女は永久に

手を携へて神業に

勤しみ仕へまつり居る

宇宙唯一の神の國

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして

地上に生れし吾々の

身み靈たまを汚けがす事こともなく

現うつしよ世ことの事みな皆を終へて

御み魂たまとなりて天てん國ごくへ

上のほりし時ときは主すの神かみの

尊たふとき恵めぐみに包つつまれて

安やすく樂たのしく永とこ久しへに

住すまはせ玉たまへ天あま津つ神かみ

國く治には立る大た神かみや

ミロクの神かみの御おん前まへに

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる

朝あさ日ひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

神かみに任まかせし吾われ々われは

如い何かでか曲まがに汚けがされむ

至し粹すゐ至し純じゆん神かむながら

神かみに稟うけたる御み魂たまをば

信しんと愛あいとに培つちかひて

此この身み此この儘まま天てん國ごくの

神かみの御み國くにに神しん籍せきを

置おかさせ玉たまへ惟かむ神ながら

神かみの御み前まへに願ねぎまつる

仁じん慈じ無む限げんの大神おほかみは

地ち上じやうに人ひとの種たねを蒔まき

肉にくの宮みやをば胞え衣なとして

清きよき御み靈たまを養やしなひつ

成せい人じんしたる其その上うへは

主す神しんのまします天てん界かいへ

迎むかはせ玉たまひ天てん國ごくの

大神業に仕ふべく

依さし玉ひしものならば

人と生れし神の子は

善をば勵み惡を避け

神をば信じ且つ愛し

神の御子たる本分を

盡す身靈となるならば

如何でか捨てさせ給ふべき

思へば思へば人の身は

實に有難いものぞかし

萬公さまよ五三公よ

龍公さまよ皇神の

仁慈の心汲み取りて

神の教をよく守り

小さき欲に囚はれて

身靈を汚す事勿れ

限りも知らぬ生命を

保ちて榮ゆる天國の

御民となりて地の上の

青人草を守るべき

身靈とならば人として

もはや缺點なきものぞ

ミロクの神が現はれて

現幽神の三界を

立て分け玉ふ世となりぬ

斯かる尊き大御代に

生れあひたる吾々は

至幸至福の者ぞかし

喜び祝へ神の恩　　讚へまつれよ神の徳  
神は吾等と俱にあり　　人は神の子神の宮  
決して汚す事勿れ　　あゝ惟神々々  
みたまの恩頼を願ぎまつる

斯く歌ひて治國別一行四人は夙荒ぶ荒野を渡り、煌々たる太陽の光を面に受けながら、意氣揚々として、又もや山口の森に差かかる。萬公は、  
先生、夜前の活劇場へ又もや到着致しました。随分夜前はよい獲物がありました。たな。今晚もここで一つお宿をかる事に致しませう。今度はひよつとしたら、ヒウドロドロがやつて来るかも知れませぬぜ

ハ、ハ、ハ、ハ、夜前のやうに蒟蒻の幽霊と早替りせらるると困るからなア。此森は危険だよ、サア今日の中に膝栗毛に鞭を打つて浮木の原まで遠乗りをせうかい  
浮木の森迄は幾等程里程がありますか  
まアざつと五十里位のものだらう

☐ それや大變だ。何うしてコンパスが續くものですか☐  
☐ 又萬公弱音を吹き出したなア、神様のお力を借れば五十里位は一息だ、サア往かう☐

と山口の森を一寸目禮し、委細構はずスタスタと、南を指して急ぎ行く。

(大正一一・一二・八 舊一〇・二〇 加藤明子録)

### 第三篇 珍聞萬怪

## 第一五章 變化(一一一八四)

治國別一行は山口の森を後にして、足を速めて二十里ばかり南進した。二十里



といつても極近いものである。一里といへば我國の二百間位なもの、丁度三丁強に當るのである。

治國別は道の傍の細き流れに下りて喉をうるほし、空行く雲を眺めて暫し息を休めてゐた。二十間ばかり隔つた田圃の中にコンモリとした森が、巍然と廣き原野を占領して吾物顔に立つてゐる。其森の中より騒々しき女の聲が聞えて來た。萬公は早くも聞きとり、

「モシ先生、あの森の中に奇妙奇天烈な活劇が演じられてゐるやうです。どうです、今晚は活劇見物がたら、あの森で一宿致しませうか。森林ホテルも乙なものです。夜前も森林ホテル、今晚も又同じくと云ふのだから日記帳につけるのも大變便利がよろしからう。アレアレ御聞きなさいませ。猿を攻めるやうな女の聲、此奴は何か祕密が伏在して居るでせう。兔も角實地探險に參りませうか」

治國別は、

「モウ少し先へ行き度いのだが、あの聲を聞いては宣傳使として見逃して通る譯には行かぬ。大變な茂つた森だから、ソツと忍び寄り、何事か様子を考へて見よ

う

五三公は、

「オイ萬公、又ヒュードロドロだぞ。肝をつぶすな」

「ナア二晝の幽霊が恐くて慄るかい。ドロドロでも泥坊でもかまはぬぢやないか。大方泥坊さまが旅人を引張り込んで衣類を剥ぎ、厭がる女を無理無體に捻伏せて念佛講でもやつて居るのだらう」

「念佛講て何だい。妙な事をいふぢやないか。ハ、ハ、ハ、幽霊が出るので成佛する様に念佛を唱へてゐるのだな。それにしても根っから詠歌の聲が聞えぬぢやないか。薩張金切聲のチャアチャアだ。一寸聞くと狐々様のやうにもあるし、猿のやうにもあるし、女のやうにも聞えて来る。何だか怪體な代物だ。五三公は研究の價値が十分にあるやうに思ひますがなア先生」

「ウン兔も角行つて見やう。併し嵌口令を布いておくから、號令が下る迄、何事があつても發聲する事は出来ないぞ」

「承知致しました。囁き話も出来ませんか、萬公も一寸困るナア」



もハラハラし乍ら、「もどかし」げに眺めてゐた。治國別、松彦は素知らぬ顔で微笑をうかべ乍ら愉快氣に見つめてゐる。女を仰向に寝させ胸倉をグツと取り大の男が蝶螺のやうな拳骨をふり上げ、キア　キア云ふ女を憎々し氣に睨みつけ乍ら、

甲「コリア尼ツちよ、何うしても白状致さぬか。しぶとい奴だなア。貴様は三五教の初稚姫といふ奴だらう」

「イエイエ決して決してそんな女ぢやムいませぬ。山住居をいたして居るもの娘でムいます。何卒御慈悲に御助け下さいませ」

甲は、

「エーしぶとい女奴」

と唝鳴りつけ、拳骨を固めて前額部をコツンと擲る。撲られて娘はキヤアキヤアと叫ぶ。

萬公は今は一矢の弦を離れむとする如き勢で、體を前方に反らせ足をふん張り、マラソン競争の合圖の太鼓が鳴るのを待つやうな構へで、腕を唸らしてゐる。

一方の荒男は又もや聲を荒らげ、

「エーしぶとい。貴様は空助の娘に間違ひなからう。さあ尋常に白状して了へ。貴様の親の空助や、三五教の黒姫はライオン河の畔でランチ將軍様の部下に捕へられ、日夜の責苦に逢うて苦しみてゐるのだ。貴様さへ白状すれば二人の罪は許され、貴様はランチ將軍様のお妾と拔擢されて出世をするのだ。コリヤ女、此處で殺されるのがよいか、將軍様のお妾になつて親の生命を助けるのがよいか。よく思案をして返答いたせ」

「オホ、彼のマア瓢六玉わいのう。何うなと勝手になさいませ。空助などといふ父親は持つた事は△いませぬわ。黒姫なんて出逢つた事もありませぬわ。さア、殺すなと何なとして下さい」

男「ヤア俄に強くなりよつたな。ハ、あまりビツクリして氣が違つたのだな。こんな氣違ひを連れて行つたところで、將軍さまの御用に立つても無し、併し乍ら何處迄も白状さして伴れ歸らねば、俺達の役目が濟まぬ。オイ女、貴様はランチ將軍様を怨んで晝は大蛇の窟に身を隠し、夜は鬼娘と化けて呪ひの五寸釘を打つ

てゐよつたのだらうがなア。そんな事はチャンと探索してあるのだから、モウ駄目だ。俺が此間の夜りだった…頭に蠟燭を立て、鏡を下げ、凄じい様子をして山口の森へ行きよつた時、俺も一寸氣味が悪かつたけれど、なアにバラモン教の神様に頼めば大丈夫だと思ひ、尾行して貴様の言ふ事を聞けば、何卒私の親の仇が打てますやうに、さうして無事に逃れますやう、ランチ將軍が亡びますやうと言つては釘を打つてゐたではないか。そこ迄手證を握つてゐるから、モウ隠しても駄目だぞ。大それた女の分際として大蛇の窟に安閑として高躰をかいて寝てゐやがつた所をとつ捉まへて來たのだ。さア、白状せい。昨日の日暮から殆ど一日一夜骨を折らしよつて、ドシ太い。俺だつて腹が減つて忪らんなぢやないか」

「オホ、何と云ふお前達あ、間抜けだ。その女は楓といつて夜前も釘を打ちに行つたよ。妾と間違へられちや大變だ。偉い災難だよ。三五教の宣傳使に助けられ、今頃は河鹿峠を上つてゐる最中だ。餘程好い頓馬なこと。ホ、ホ、ホ、」

「コリヤ尼ツちよ、そんな事をいつて俺達を胡麻化さうとしても駄目だぞ。チャアンと證據が握つてあるのだから、好い加減に白状致さぬと親の爲に悪いぞ。空

助<sup>すけ</sup>や、黒<sup>くろ</sup>姫<sup>ひめ</sup>が可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>相<sup>さう</sup>とは思<sup>おも</sup>はぬか<sup>か</sup>

「ホ、ホ、ホ、空<sup>もく</sup>さまが何<sup>ど</sup>うならうと、此<sup>こつち</sup>方<sup>ち</sup>や一<sup>ちよつと</sup>寸<sup>と</sup>も【目<sup>もく</sup>算<sup>さん</sup>】が外<sup>はづ</sup>れぬのだから構<sup>かま</sup>やせぬわ。黒<sup>くろ</sup>さまが何<sup>ど</sup>うならうとお前<sup>まへ</sup>さまが【苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>】する丈<sup>だ</sup>けの事<sup>こと</sup>ぢや。殺<sup>ころ</sup>しなつと煮<sup>たい</sup>て喰<sup>く</sup>はふと勝<sup>かつ</sup>手<sup>て</sup>になさいませ<sup>せ</sup>」

「コリヤ女<sup>をんな</sup>、貴<sup>き</sup>様<sup>さま</sup>は親<sup>おや</sup>に對<sup>たい</sup>し孝<sup>かう</sup>行<sup>かう</sup>といふ事<sup>こと</sup>を知らぬのだなア。丸<sup>まる</sup>で狐<sup>こ</sup>狸<sup>り</sup>のやうな奴<sup>やつ</sup>だ。不<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>情<sup>じやう</sup>者<sup>もの</sup>だなア。こんな優<sup>やさ</sup>しい顔<sup>かほ</sup>をしよつて、親<sup>おや</sup>不<sup>ふ</sup>孝<sup>かう</sup>の魂<sup>たま</sup>見<sup>み</sup>下<sup>さ</sup>げはてた女<sup>をんな</sup>だ<sup>だ</sup>」

「妾<sup>わたし</sup>はコソコソさまだよ。お前<sup>まへ</sup>達<sup>たち</sup>は馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>だからつままれてゐるのだ。そんな枯<sup>かれ</sup>木<sup>ぼく</sup>杭<sup>くひ</sup>をつかまへて何<sup>なに</sup>をしてゐるのだイ。よい盲<sup>めくら</sup>目<sup>め</sup>だなア、ホ、ホ、ホ、」

「丸<sup>まる</sup>で狐<sup>きつね</sup>のやうな奴<sup>やつ</sup>だ。ドシ太<sup>ふと</sup>い何<sup>なん</sup>ぼ叩<sup>たた</sup>いても叩<sup>たた</sup>いてもキアキア吐<sup>ぬか</sup>すばかりで往<sup>わつじやう</sup>生<sup>じやう</sup>しよらぬ。此<sup>こいつ</sup>奴<sup>やつ</sup>は不<sup>ふ</sup>死<sup>じ</sup>身<sup>み</sup>かもしれぬぞ。俺<sup>おれ</sup>一<sup>ひとり</sup>人<sup>ひとり</sup>では駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>だ。皆<sup>みな</sup>寄<sup>よ</sup>つてたかつて叩<sup>たた</sup>き延<sup>の</sup>ばしてやらうかい<sup>い</sup>」

「ホ、ホ、ホ、たかが一<sup>ひとり</sup>人<sup>ひとり</sup>の女<sup>をんな</sup>を取<sup>とり</sup>まいて大<sup>だい</sup>の荒<sup>あらし</sup>男<sup>をとこ</sup>がよりかかり、一<sup>いつ</sup>晝<sup>ちゆう</sup>夜<sup>や</sup>もかかつて何<sup>ど</sup>うする事<sup>こと</sup>もようせぬといふやうな閒<sup>ま</sup>抜<sup>ぬ</sup>けが假<sup>たとへ</sup>令<sup>なん</sup>何<sup>なん</sup>萬<sup>まん</sup>人<sup>にん</sup>がかつたつて烏<sup>う</sup>合<sup>がふ</sup>の衆<sup>しゆう</sup>

だから、カラツキシ駄目だよ。御氣の毒様、お前さまの手を御覽なさい。木の缺杭をたたいて血だらけになつてますよ」

「云はしておけば際限も無き雑言無禮、最早勘忍袋の緒が切れた。さア一同寄つてたかつて殺して了へ」

「よし合點だ」

と七八人の荒男は棍棒を打振り一人の女に打つてかかる。何う間違つたか、互に入り亂れて同士討をやつてゐる。女の體よりパツと立つた白煙、太い尾を下げた白狐が一匹、ノソリノソリと歩き出し、コンコンクワイクワイと吠え乍ら、森を見棄てて逃げて行く。

八人の男は女が狐と變じて逃げ失せたるに氣がつかず、一生懸命に同士討ちをつづけてゐる。可笑しさを咏えてゐた萬公は口が破裂した様に「グワツハ、、、」と笑ひ聲を噴出す。治國別外三人もたまりかねて「アハ、、、」と體を揺つて笑ひ出した。此聲に驚いて八人の奴は一生懸命雲を霞と逃げて行く。萬公は、「グワツハ、、、」、道公さまぢやないが、到頭大勢の奴を笑ひ散らしてやつた。



エへ、へ、へ、

一同は、「アハ、ハ、ハ」と吹き出してゐる。

五三公は呆れて、

「先生、貴方は本當に感心ですよ。何故あんな優しい女が虐待されて居るのに平氣で笑つてゐるのか、無情冷酷な御方だと内實は思つてゐました。飛び出したいは山々だつたが命令が下らぬものだから、差控へて居りましたが、彼奴は狐になぶられてゐたのですなア」

「ウン、あの御方は三五教の御守護神、鬼武彦の御眷族、月日明神さまだよ。バラモン教の捕手が山口の森に隠れてゐた楓さまを召捕らうと大蛇の窟迄覗きに行き居つたのだから、月日さまが楓さまの親子對面が出来る迄、あゝして身代りになつてゐて下さつたのだ。而して吾々に御守護あつた事を示すために今迄待つてゐて下さつたのだよ。お前達の目に娘と見えたのは枯木杭だ。可愛相に娘の額だと思つてトゲだらけの缺杭を撲りつけ、血だらけの拳になつて居つたぢやらう」

萬公は、

「へー何だか赤い手袋をはめてみると思つてみました。月日さまといふ明神さまは本當に偉い方ですなア」

「サア今晚は此處で宿ることにしよう。先づ第一に天津祝詞の奏上だ」と治國別の命令に一同は、

「ハイ畏まりました」

と邊りの小溝で口を嗽ぎ、手を洗ひ、型の如く祝詞を奏上し、一夜を此處に明す事とはなりける。あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一一・一二・八 舊一〇・二〇 外山豊二録）

（昭和九・一二・二九 王仁校正）

## 第一六章

怯風（一一八五）

冷たき初冬の凧に  
吹かれて降り来る村時雨

治國別の一行は  
珍彦親子を河鹿山

登り口まで送りつけ  
萬公五三公龍公や

松彦引つれ大野原  
時雨を冒して進み行く

歩みも早き山口の  
森をば右手に眺めつつ

草野を分けてやうやうに  
野中の森に到着し

怪しき聲に木の茂み  
身を忍びつつ窺へば

鬼をもひしぐ荒男  
一人のか弱き女をば

捉へて無體の打擲を  
なし居れるこそ歎てけれ

治國別は木蔭より  
此慘状を一瞥し

其成行に任す内  
女は忽ち白煙と

なつて消えしと思ふ間に  
思ひもよらぬ白狐

のそりのそりと這ひ出し  
野中を指して逃げて行く

七八人の荒男  
互に棍棒ふりかざし

眼くらみて同土打 挑み戦ふ可笑しさに

萬公さまは吹きいだす 治國別も松彦も

五三公龍公もこらえかね 思はず知らず吹き出せば

男は驚き雲霞 森の奥へと一散に

命からがら逃げて行く 治國別の一行は

月日の白狐の出現に 驚異の眼を見はりつつ

白狐の後を伏拜み 森の廣場に蓑を布き

天津祝詞を奏上し 生言靈を唱へつつ

一夜を茲に明かさむと 肱を枕に横たはる

冷たき風は容赦なく 森の梢を揺がして

ザワザワザワと鳴り立てる 彼方此方にキヤツ キヤツと

聞ゆる聲は山猿か 但は魔神の襲來か

只事ならじと萬公は 一人胸をば躍らせて

眠りもえせずパチパチと 目を繁叩き座りゐる。

萬公は何となく、心淋しく、思ふ様に寝つかねば、横になつて見たり、坐つて見たり、一行の寢息を窺つたりなどして、夜の明けるのを一時も早かれと待つてゐる。

先生と言ひ、松彦さまと云ひ、肝玉の太い方計り、斯う他愛もなく寝て了はれては淋しい事だわい、俺や又何うして寝られぬのか知らぬがなア、昨夜のやうに又もや楓の化者がやつて來よつたなら、おらモウ、假令眞人間であらうと辛棒が出來ないワ。七八分迄肝玉をどつかへやつて了つたのだから、強相に言うてるものの、實際はビクビクものだ、誰か起きて下さらぬかいなア。折角の安眠を揺り起してお目玉頂戴してはたまらないし、何だか首筋元がゾクゾクして來だした。誰か物云ふ奴が一人あると、互に語り合つて此淋しさを紛らすのだけれど、計りでは根つから有難くないわい。五三公の奴、怪體な鼾を出しよつて、何だ。がらがらからといふ鼾がどこにあるかい。グツグツグツと鼻を鳴らしてゐるのは、コリヤ龍公だろ、丸でお粥をたいした様な聲を出しよる。エ、こんな聲を聞くと益々淋しうなつて來た。一つ鼻でも摘まんて起してやるかな、怒つたら罪

のない喧嘩けんくわを始めはじめる迄までの事ことだ。何とかして紛まぎらさなくちや、仕方しかたがないワ。オウさうださうだ、言こと霊たまを忘わすれて居をつた。夜前やぜんの先生せんせいに聞きいた言こと霊たまを一つ打うち出して見みよう。さうすれば、陰鬱いんうつな空くう氣きがどつかへ退散たいさんし、俺おれの氣分きぶんもさえるだろ。エーエ、副守ぶくしゅの奴やつ、早はやから泣なき聲こゑを出だしよる。おりやそんな弱よわい男をとこだないが、怪體けたいの悪わるい、弱よわつたらしい守しゅ護ご神じんがくつついてると見みえるわい」

五三公いそこうは昨夜さくやの夢ゆめを見みたと見みえ、いやらしい聲こゑを出だして、

「キヤア、幽霊いうれいだア、鬼娘おにむすめだア、オイ萬公まんこう、ウニヤ ウニヤ ウニヤ

「ア、ア、又またビックリさしよつたナ、此奴こいつア一つ揺ゆり起おこしてやる、襲おそはれてけつかるのだろ。オイオイ五三公いそこう、起おきたり起おきたり、萬公まんこうさまだぞ、大變たいへん魔まされてるぢやないか」

「あ……、恐おそろしことだつた。よう起おこしてくれた。萬公まんこう、お前まへ又また無事ぶじで居をつたのか。マアそれで安心あんしんだ」

「無事ぶじで居をつたかて、……：：：妙めうな事ことを云いふぢやないか、俺おれの夢ゆめでも見みたのかい」

「ウーン、見みた見みた、貴様きさまはなア、昨夜さくや會あうた楓かへさまの變装へんさう以上いじやうの……：：：厭いやらしい

怪物くわいぶつが現あらはれて、赤黒あかぐろい瘦やせた手てを出だして、貴様きさまの素そつ首くびをグツと握にぎり、山奥やまおくへひつ攪さらへて行いつた夢ゆめを見たみのだ。其時そのときにキヤアキヤアとお前まへの泣なく聲こゑが何なんとも知しれぬ厭いやらしかつたよ。まだ誰たれかキヤアキヤア言いつてるぢやないか」

萬公まんこうは身慄みふるひし乍ながら、

「貴様きさまは身魂みたまが曇くもつて居ゐるから、そんなケ、怪體けたいな、惡夢あくむに魘おそはれるのだ。キヤツキヤツ云いうてるのは猿さるの聲こゑだよ。オイちとしつかりせぬかい。エ、ー、萬公まんこうだつて氣味きみが悪わるて、たまらぬぢやないか。せうもない夢ゆめを聞きかされて……」

五三公いそこうは不安ふあんさうに、

「先生せんせいは此處ここに居をられるかなア」

「居ゐられえでかい。現げんに此通このとほり躰いびきがしてゐるぢやないか。餘あまり暗くらくつてお姿すがたはハツキリせぬが、大抵たいてい躰いびきで分わかつてるわ」

「さうだらうかなア。俺おれの夢ゆめには、貴様きさまが化物ばけものに引搥ひつつかまれ、キヤアキヤア言いつて逃げた時とき、治國はるくに別の先生せんせいと松彦まつひこさまとが、後追あとおつかけて行いつて了しまはれた夢ゆめを見たのだ」

「そら夢だ。現に此處に昇をかいて居られるのだからマア安心せい。時に龍公を一つ揺り起してくれぬか、貴様と二人で面白くない話をしてゐると、だんだん體が縮まるやうになつて来るワ、何とマア陰氣な夜さぢやな」

「それ程淋しければ、俺に喰ひついて居れ。言うても五三公さまは肝つ玉が太いからなア」

「さうだらう、夢見てもビツクリするやうな男だからな、へん」

二三閒傍に何かヒソヒソと人聲が聞えて来る。萬公、五三公は俄に口をつめ、抱ついた儘、耳を傾け出した。

「オイ、テク、昨夜は随分驚いたねえ、今晚もこんな所で休むのはいいが、又ホツホ、なつて仰有ると、モウ此上はアクさまも居たたまらないから、小聲で大自在天様を拜まうぢやないか」

「コリヤ、アク、貴様も悪人に似合はぬ氣の弱い奴だなア。人に相談しなくつても、自分の口で神様に願つたら何うだい」

「俺だつて餘りビツクリしたので、神さままでが怖うなつて、連がなくは拜め



ぬぢやないか。どうだ、三人聲を揃へて御祈願せうぢやないか。又ホツホ、がやつて來さうだぞ。どうも陰鬱になつて來た。僅か二十里の道を猫の様に、草原計りやつて來たのだから、枯芒で手も足も顔も疵だらけだ。何だかピリピリと體中が痛くて仕方がないワ」

「さうだから、當り前の道を俺の名のやうに【テク】らういふのに、貴様が臆病風に誘はれて、道もない所を四這になつて歩きよるものだから……自業自得だよ」

「それだと云つて、うつかり立つて歩かうものなら、俺達の體が見えるぢやないか。もしも三五教の宣傳使にでも見つけられてみよ。それこそ大變だ。アクさまの提案を遵奉したお蔭に依つて、やうやう、此處まで安着したではないか。オイ、タク、何だ、糞落着きに落つきよつて、ちと何か話でもせぬかい、淋しうて仕方がないワ」

「おりやモウ腰が痛【タク】て、話どころかい。氣息奄々だ。随分四足の眞似も苦しいものだなア」

「貴様はコンパスが長くて、手の方が比較的短いから、四足になるのもえらかる、

ソリヤ尤もだ。併し足の長いのは手の長いのよりもマシだ。手が長いと交番所の前が通れぬからの才まへ とほ」

「何だか知らぬが、俄に此森へテクリ込んでから淋しくなつたぢやないか。そこらあたりに死屍累々と横たはつてるやうな怪體な氣分がするぢやないか」

「ヒヨツとしたら、ここは墓場ぢやあるまいかな。軒が聞えるやうだ、幽霊がタク山に寝てけつかるのだなからうかな」

「馬鹿言へ。幽霊が軒をかくかい。大方狸が寝てゐるのだらう。確に野中の森だ、墓場の氣遣ひないワ、マア安心せい、テクが保證するよ」

「何だかお粥でもタク否ナ、炊いてるやうな音がするぞ」

「オイ、そんな怪體な話はやめて、トツクリと寝やうぢやないか。寝さへすれば怖い事も何にも忘れて了ふからな。疑心暗鬼を生ずとか云つて、此暗の晩にそんな事計り云うてると、又それ、アク魔がホツホ、ぢや」

「萬公、五三公は二三間側で、三人の話聞き終り、萬公は聲低くに、  
「オイ五三公、此奴アバラモン教の臆病者だ。昨夜晴公や楓さまに脂をとら

れた奴と見えるワイ。オイ一つ俺が晴公になるから、五三公お前楓になつたらどうだ、お前の聲は女に似てゐるからなア」

「ウン、そら面白い。そんなら俺から一つ戦闘を開始しようかな。貴様と俺とは餘程臆病者だと思つてゐたら、モウ一段と臆病者が現はれよつた。上には上のあゝるものだのオ」

と小聲に囁いてゐる。三人はそんな事とは知らず、暗がりには手を繋ぎ合せ、慄ひ慄ひ小聲で囁いてゐる。

「オイどうも形勢不穩だぞ。キヤツキヤツと吐す猿の聲が、何とはなしにアク魔否ナ幽さまの聲のやうに聞えて來るぢやないか。こんな時には腹帶をしつかり締て居らぬと、ヒュードロドロドロとやられちゃ、おたまり小坊子がないからなア」  
五三公は暗がり乍らも、兩手を前にニユツと伸ばし、手首をペロツと下げ、少し立膝をして、螻螂の様に體を前へつき出し、

「ヒュードロドロドロ、ホツホ、」

「ソーレ、アク、幽だ、逃げる逃げる」

「逃にげると云いつたつて、テクると云いつたつて駄だ目めだよ、又また脱ぬけた」

「あゝあ、俺おれもぬけた。アク、俺おれ達たち二人ふたりをかたげてのいてくれ、夕た、夕たクが頼たのむ」

「俺おれもチヨボチヨボだ、アクものは口くち斗ばりだ」

「ホツホ、アツハ、」

「ヤア昨さく夜やの化ば州しゅうだ、執し念ふ深ぶい、どこ迄までもついで來きよるのだな。オイ、夕たク、テ

ク、かう幽い霊れいに魅み入いられては仕しか方たがない、アク胸どを据すえようぢやないか」

斯かく話はなす内うち十九じゅう日にちの夜よるの月つきは東とう天てんをこがして一いっ層そう鮮あかな光ひかりを地ち上じやうに投なげた。丁ちや

度う此こ處こは木きの疎まな所ところで、東ひがしがすいてゐるので、一い同ちどうの顔かほはパツと明あかになつた。

「アハ、これこれで天てん地ち開か明めいの氣き分ぶんになつて來きた、ヤツパリ月つきの大神おほ様かみのお蔭かげ

は有あ難がたいものだな。肚はらの底そこまで光ひかつたやうな氣きがする。モウ大だい丈ぢやう夫ぶだ。オイ龍たつ、

起おきぬかい、萬まん公こうさまだよ」

「ウン」と云いつて起おきて來きたのは松まつ彦ひこである。

「ヤア良よい月つきだな。治は國くに別わけ様さま龍たつ公こうの姿すがたが見みえぬぢやないか、何ど處こへ行ゆかれたのだ

る」

「ヤア、マンマンマン大變だ。知らぬ間に何者か先生を拐はかしよつたなア」  
「ナア二芋でもイソイソ埋けに行かれたのだよ。何俺達を捨てて勝手に往くな  
て、そんな不親切な事をなさるものかい。なア松彦さま」  
「ソリヤ何とも分らぬなア。何程兄弟だつて、心の中迄分らぬからなア、松彦に  
は」

「ヘーン、もしもそんな事だつたら大變ですがな、あ伊ソを盡されたのか」

「師匠を杖につくな、人を頼りにすなと神様は仰有るぢやないか、一丈二尺の禪  
をかいた男がそんな弱音を吹くものぢやない、之から各自單獨で、ランチ將軍の  
陣營へ突撃せよと命ぜられたら何うするか。それでも行かねばなるまい。お前達  
は生の執着が強いから恐怖心が起るのだ。捨身になれば何も恐ろしい事はないぢ  
やないか。最前から随分臆病風に吹かれて居たなア、松彦が聞いて居れば何だホ  
ッホ、ななてせうもない餘興をやるぢやないか」

「何程恐怖心かられたといつても、流石に萬公さまは三五教の信者ですわい。  
餘裕綽々として滑稽を演ずるのですからなア。あれ御覽なさい、あこに三匹の四

足が「へた」つて居りますわ」

「ウン、あれはバラモン軍の斥候を勤めてるアク、タク、テクの三人だ、楓さまに脂を取られた連中だらう」

「松彦さま、貴方は軒をかき乍ら聞いてみたのですかい」

「ウン、軒は軒、聞くのは聞くのだ、鼻は休んで居つても、耳は起きてゐるからなア」

アクは手を合せ、

「モシモシ、三五教の先生、私はお察しの通り、アク、タク、テクの三人でムいます。決して貴方方に仇をするものではムいませぬから、どうぞ宜しく頼みます

……とは申しませぬが、いぢめぬやうにして下さい、構うてさへ貰はねば、何うなつと處置をつけますから、本當に貴方の家來には意地の悪い方がありませんなア。

吾々三人の腰を抜いて了つたのですから本當に困りますワ」

「それは氣の毒だ。併し乍ら二十里の道を四遣になつて來るのは、随分苦しかつたでせうなア、松彦は感心したよ」

「何もかも皆御存じですな。其通り暫く四足の修行をアク迄やつてみましたが、随分苦しいものでムいますよ」

「コンパスの長い手の短いタクさまは餘程お困りだったさうですねえ」

「手の短いのは正直者の證據ですから、どうぞ大目に見て下さいナ、松彦さまとやら」

「アハ、ハ、ハ、マア此方へお出なさい、ゆつくり話を交換しませう」

「オイ、タク、テク三五教の大將は餘程開けてるぢやないかエ、バラモン教の司だつたら、随分威張る所だがなア。ヤツパリ平民主義と見えるワイ、俺や平民主義が大好きだ……三五教の先生、そんなら一切の障壁を除いて御昵懇に預かりませう」

松彦は、

「ハア、お互に御心安う頼みますよ」と軽くうなづく。

「モシモシ先生、あんな事を言つて、様子を考へてゐるのですよ、萬公は氣懸り

ですワ。モ一つホ、ホ、ホ、でおどかして逃がしてやりませう」

「ホツホ、ホ、ホ、モシモシ萬公さま、正體が現はれた以上は、ホ、ホ、モアハ、ホ、ホ、も笑ひの種にこそなれちヨツとも恐ろしくありませんよ。アク迄も得意の

ホ、ホ、ホ、をやつて御覽なさい」

「オイ、五三公、最う駄目だ、仕方が無いなア」

「松彦さまがあゝ仰有るのだもの、俺達は泣き寝入かな。無條件降服だ………否無

條件還附だ。之から臥薪嘗膽、十年の苦をなめて、捲土重來復讎戦をやるのだな

ア、アツハ、ホ、ホ、」

と始めて愉快げに五三公は笑ひ出した。此笑ひ聲は四邊の陰鬱を破つて一同は俄に陽氣となり、敵も味方も聲を揃へて、「ワハ、ホ、ホ、」と高笑ひする、今迄吾物顔に梢に飛び交ひ、キヤツキヤツ囁つてゐた猿は一度に聲を潜めて了つた。

(大正一一・一二・九 舊一〇・二一 松村眞澄録)

(昭和九・一二・二九 於湯ヶ島 王仁校正)



第一七章 罵狸鬼（一一八六）

松彦は宣傳使格となり、萬公、五三公、及バラモン教の阿克、タク、テクの六人は、敵味方の牆壁を忘れ、和氣霽々として俄に笑ひ興じ出した。月はますます冴えて木立のまばらな此森は晝の如く明くなつて來た。

萬公は俄に元氣づいて喋り出した。

「松彦さま、治國別の先生が居られなくなつた以上は、入信の順序として先づ萬公が宣傳使代理を勤むべき所ですな。神の道には依怙鼻肩はチツトも無いのだから、神徳の高きものが一行を統一するのが當然でせうなア」

「こりや萬公、何と云ふ矛盾した事を吐くのだ。入信順から云へば萬公がなる所だと云ふかと思へば、神徳のあるものが當るべきものとは前後矛盾も甚しいではないか、五三公には合點が行かないワ」

「ウン、順序から云へば萬公さまが宣傳使代理を勤むべき處だが、松彦さまは後入信でも、バラモン教で素地が作つてあるから神徳が高い、それだから松彦さま

が宣傳使代理になられたが宜からうと云つたのだよ。宣傳使の弟だつて、何にも神徳のない木偶の坊だつたら、吾々は統率者と仰ぐ事が出来ないと云つた迄だ。それが何處に矛盾して居るか。お前達は根性が曲つてゐるから怪體の處へ氣をまはすのだな。エー」

「後の鳥が先になるぞよと云ふことがあるからな。何程萬公さまが先輩でも駄目だよ。昨夜の言靈戦には先輩が濁つて全敗し、今晚も亦哀れつぽい泣聲を出して全敗したのだから、頼りのない先輩だよ」

「コリヤ五三公、千輩どころかい。俺は萬輩だ。それだから俺は萬公さまだよ。貴様の様な東海道とは違ふわい」

「東海道とは何だ。馬鹿にするな」

「それでも五十三次の五三公でないか。破れた着物は東海道と云ふぢやないか。エー、襪褌布を五千三次つき合して着て居る乞食の代名詞だ。さうだから貴様は破れ宣傳使と云ふのだよ」

「誰が何と云つても、此五三公さまは萬敗さまよりも松彦さまを信用するワ。松

は千年の色深しと云つて末代代物だからな」

「何と云つても萬公の俺には人望がないのだから仕方がない。そんなら、さうと置いて、俺の言靈の神力だけは認めるだらうな」

「ハ、ハ、ハ、笑はしやがるわい。何が言靈の神力だ。全敗萬敗の破れ宣傳使奴が」

「その笑はせやがるのが俺ぢやないか。率先して笑つたのは此萬公さまだぞ。四

邊の陰鬱な空氣を拭きとつた様に笑ひ散らしたのだからな。笑ふと云ふ事は即ち

歡喜の表徴だ。薄の穂にも怖ぢ恐れビリついて居つた貴様等の魂に光明を與へ、

力を與へたのも萬公さまが笑ひの言靈の原料を提供したからだ。ウーピーの主人

公だよ。凡て人の神靈と云ふものは歡喜樂天に存在するものだからな。悲哀の念

を起し嘆聲を洩らすと、神靈忽ち萎縮し、遂には亡びて了ふものだ。抑も人の神

靈は善をなせば増し、惡をなせば減ず、歡喜によつて發達し、悲哀によつて消滅

す。かかる眞理の蘊奥を理解した萬公さまは實に偉いものだらう。五三公が何程

藻掻いた處で、斯くの如き深遠微妙なる宇宙の眞理は分るまい。エヘン」

「それ丈けの眞理が分つて居ながら、何故女々しく悲哀の語調を竝べて慄うて居

たのだ」

「それは臨機應變の處置だ。婦人小兒の敢て知る所でない」

「アハ、ハ、ハ、婦人小兒は何處に居るのだ。俺は決して婦人でも小兒でもないぞ」

「居ないから云つたのだ。そこが臨機應變だよ。時にバラモンの御三體さまを如何處置する積りだ。鱈にする譯にも行かず、吸物にし様と思つても骨は硬いなり、

ナイフはあつても之は人斬り包丁なり、四足を料理する出刃の持合はなし、何う

したら宜からうかな」

「貴様、出齒を持つてるぢやないか。山櫻の萬公と云つて花（鼻）より葉（齒）

が先に出て居るだらう。餅の見せられぬ代物だよ」

「何故この萬公さまに餅が見せられぬのだい」

「それでも出齒に餅見せなと云ふぢやないか。アハ、ハ、ハ、ハ、」

松彦は聲を強めて、

「おい兩人、いゝ加減に擲掬つて置かぬか。アク、タク、テクさまが笑ふてゐる

ぞ。三五教にもあんな没分曉漢が居るかと思はれちや、神さまの面汚しだからの

う

「アクは、にじり寄り、

「ヤア松彦の先生、どうせ人に使はれて歩く様な連中に碌な者はありませんわ。

よう似て居ますわ、私のつれてゐる此兩人も矢張り擔うたら棒の折れる代物です

よ。それは萬々々、話にも杭にもかからぬ五三々々した奴ですわ。アハ、、、、

「こりやアク、貴様の口をアク所ぢやないぞ。萬々々て、何だい。俺の事を諷し

て居よるのだな」

「萬更さうでもありますまい。然し「まん」と云ふ名のついたものに、あまり宜

い物はありませんな。慢心に自慢、高慢、我慢、驕慢、萬引に満鐵、それから病

氣には脹満、と云ふ様なものですな。も一つ悪いのは三面記者の持つて居る萬年

筆、それから慢性の癡呆性位のものですワイ。アハ、、、、」

「賛成々々、仲々バラモンにも氣の利いた奴がある。やア、もうずっと氣に入つ

た。おいアクさま、それほどお前は物の道理を知つて居り乍ら、何故人間の身を

以て四足の眞似をして來たのだ、その理由をこの五三公さまに聞かして呉れぬか」

「別に四足の眞似はし度くなかつたのですが、友達が先へ来て待つてゐるものですからナ」

「その友達と云ふのは誰の事だい」

「そこに鎮座まします出齒彦命さまの事です。萬公さまと云ふぢやありませんか。アクは又早聞きをして馬公さまと聞いて居りました。大分馬鹿の様なお顔付だからな」

「五三公が聞いて居れば、山口の森でも、馬と鹿と鼬の變化した狸が現はれたぢやないか」

「アハ、、、そりや【テング】（冗談）ですよ。吾々三人が互に罵り合つて居つたのです。然し乍ら、正真正銘の人間ばかりだから、あまり見くびつて貰ひますまいかい、アク性な」

「そんなら此萬公さまも矢張り人間だ。あまり失敬な事を云つちやいけないよ」  
「此萬公さまは常世姫命の分靈山竹姫の口から生れた子でせう」  
「五三公は訝かり乍ら、」

何、そんな事があるものか。何故又そんな事を云ふのだ」

常世姫命さまがエルサレムの都で思ふ様にゆかないので、自分の靈を分けて山竹姫と現はれ、何とかして人間の生宮を生まうと天に祈り、口から吐き出した玉が、俄に膨脹して大きな四足の子となつた。そこで山竹姫が吃驚して目を圓うし、口を尖らし兩手を擴げ、體まで反りかへつて「まん」まん「うま」あ」と仰有つた。それから馬と云ふのだ。馬も萬も矢張り山竹姫さまの口から出たのだから、馬の先祖かと思ひましたよ。随分長い顔ですな」

五三公は手を打つて、

「アハ、々、此奴あ面白い。話せるわい」

「ヘン、あまり馬鹿にして貰ふまいかい。そんならアクと云ふ奴の因縁を聞かしてやらうか」

「そんな事ア聞かして貰はなくとも、とつくに御存じだ。抑もアクのアは天の阿だ。クは國のクだ。天津神、國津神の御水火によつて生れ給うた天勝國勝の名をかねたる大神人だが、一寸下界の様子を探るため、「アク」せくと人間界にまは

つて隅々迄歩いて居る良金神さまだよ。悪に見せて善を働く神様だから、暗夜を照らすとは、アーク燈と云ふぢやないか。あまり口をアークと「すこたん」を喰ひますぞや」

「アハ、ハ、ハ、ク、ハ、ハ、ハ、ぢや、抑も萬公さまの考へでは、アクと云ふ奴ア、凡て始末におへないものだ。その灰汁がぬけさへすれば食へぬものでも食へるだらう。果物でも野菜でも灰汁の強い奴は水に漬けておくのだからな。藁にだつて灰汁がある。溝に流れてゐるのは皆悪水だ。その悪水に喜んで棲んでゐる奴が所謂溝鼠だ。鼯も矢張り溝水に近い處に棲むものだ。つまり要するに即ちアクと云ふのは溝狸の事だ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

五三公は吹き出し、

「國常立之尊と溝狸とは天地霄壤の相違ぢやないか」

「至大無外至小無内、無遠近、無廣狹、無大小、過去現在未來の區別なく、或時は天の大神となり、或時は狸は云ふも更、蝶螭蚯蚓と身を潛め、天地の神業に參加するのが即ちアクだよ。良金神様は悪神崇神と人に云はれて、三千世界をお構





「おい、何うやら怪しくなつて來たぞ、何程氣張つても腹の底から慄うて來るぢやないか。何うも合點がゆかぬ。歡喜樂天の奴、いつの間にか萬わるく遁走して了ひよつた。俺の神靈もそろそろ脱出したと見えるわい。五三公お前だけなつと、しつかりしてゐてくれよ」

「何、心配するな。松彦さまがついてゐるわい。あまり頬桁を叩くから神様から戒めを受けたのだよ。サア祈れ祈れ」

「もし皆さま、どうも怪しくアクなつて來たぢやありませんか」

「本當に氣遣ひな狀況になりましたな。皆さま御遠慮は要りませぬ。一所へ五三ぎ密集しませうか」

「おいアク、一所へ寄つちやいかないよ。もしも空から爆弾でも落ちて來たら全滅だ。何事も散兵線が安全だからな、生命は捨「タク」無いからなア」

「それもさうだ。然し何とはなしにアクの守護神がよりたがつて仕様がないわ」  
タク小聲で、

「この暗がりに三五教の側へ寄ると、あの懐劍でグサツとやられるかも知れぬぞ。」

あまり氣を許しちや大變だからな」

アクは故意と大きな聲で、

「何、暗がりで側へ寄ると、三五教が懐劍で突くかも知れぬと云ふのか。何突いても構はぬさ、突かしておけばよいのさ。敵も味方も牆壁をとつて親しく【つき】合ひと云ふのだから、【つく】のは結構だ。【つかれる】のも結構だ。やがて黒雲排して【月】も出るだらう」

タクは袖を引つ張つて、

「おい、アク、さう大きな口を開くものぢやないわ。タク山のタク宣を、そんな大聲でさらけ出されちや堪らぬぢやないか」

「大聲の方がいいのだよ。大聲俚耳に入らずと云うてな。却てこそこそ話をしてみると聞えるものだよ」

斯く話してゐる處へ、暗の中から光の無い薄青い火の玉が永い禪を引ずつて、地上五六尺の處をフワリフワリとやつて來た。

松彦は火の玉に向ひ、

「廻れ右へ」

と號令を掛るや火の玉は松彦の言葉に従ひ俄に頭を轉じ右の方へクルリと廻つた。さうして松彦の額のあたりを尾にて撫で乍らスツと通り、中央にブンブンと呻つて、尾を直立させ火柱を立てた様になつた。

萬公はビツクリしながら、

松彦さま、「廻れ歸れ」と云つて下さいな。随分厭らしいものがやつて来るぢやありませんか」

「アハ、、ありや狸だよ。最前から狸々と罵つたお前の言靈が實地に現はれたのだから、お前が處置をつけねば誰が處置をつけるのだ。それぞれ火の玉がお前の方へ近寄つて来るぢやないか」

「こりや火の玉、貴様の本家は萬公ぢやないぞ。バラモンのアクさまだ。アクさまの方へトツトと行け。戸惑ひするのも程がある。エー」

火の玉はジリジリと萬公目蒐けて迫つて来る。萬公は一生懸命になつて兩手を組みウンウンと鎮魂の姿勢をとつた。火の玉は益々太く長く膨脹するばかり、見

る見る間に鬼女の顔が現はれ頭に三本の蝋燭が光つて來だした。胸には鏡をかける。夜前の楓姫そつくりである。萬公は目を閉ぎ耳をつめて蹲むで了つた。アク、タク、テクの三人はアツと云つたきり大地に横たはつた。目を「ぎよる」つかせ口を開いたぎり、アフィンとしてゐる。怪物は長い舌をペロペロ出し乍ら嫌らしい聲で、

「萬公、五三公、アク、タク、テクの五人の英雄豪傑、大雲山から迎へに來たのだ。さア俺について出てムれ。(大聲) 違背に及べば噛み殺さうか」

「たゝゝゝゝゝ狸の化物奴、なゝゝゝゝ何を吐しよるのだイ。だゝゝゝ誰が大雲山まで行く奴があるか、ばゞゞ馬鹿、五三公の神力を知らぬかい」

と冷汗をかき乍ら唸鳴りつける。怪物の姿は象が屁を放つた様にボスンと云つたまま消えて了つた。中天に昇つた月は、もとの如くに皎々と輝いてゐる。四邊を見れば一匹の白い動物が太い尾を垂らしノソリノソリと森の中を目蒐け逃げて行く。

「アハ、ハ、ハ、ハ、又やられたな」

□へへへへへ□

と一同のかすかな笑ひ聲でつき合ひ笑ひをやつてゐる。これより松彦は五三公、萬公、アク、タク、テクの五人を従へ夜明けを待ち浮木の森をさして出でて行く。

(大正一一・一二・九 舊一〇・二一 北村隆光録)

(昭和九・一二・二九 王仁校正)

## 第一八章 一本橋(一一八七)

松彦一行は野中の森を後にして、宣傳歌を歌ひながら浮木ケ原をさして進み往く。此處には河鹿川の下流が横たはつて居る。此の河は、ライオン川に注ぐと傳へられて居る。

可なり廣い河に、天然の河の中の岩を土臺として、一本橋が架けられてある。橋を渡つて歸つて來る二人の女があつた。一人は中年増、一人は十五六才の少女

である。一行六人は橋の詰めに立つて清らかな激流を眺めて息を休めて居た。萬公は二人の女に向ひ、

「随分、烈しい流れだが、こんな一本橋を女の身としてよく渡れたものだなア、一體お前さまは、何處から来たのだイ」

「ハイ私は浮木の里の者でムいますが、此間から澤山の軍人が私の村に陣取り、女と云ふ女を軒別に徴集して炊事をさせたり、いろいろと辱たりするので、誰も彼も皆逃げて仕舞ひました。私は婆の事なり、相手にはして呉れませなんだが、段々と女が減るにつけ、婆でも少女でも構はぬ、女でさへあれば引張つて歸りますので吾村を逃げ出し、此橋を渡つて小北山の神様のお館へ身を隠して居りましたが、あまり澤山の女で寝る所もなく斷られて、親子二人が此處迄歸つて来たのでムいます」

「アクは言葉せはしく、

「ウン、女計りが小北山に隠れて居るとは一體幾十人程居るのだい」

「ハイ、一寸百人計り集まつて居りますが、私は後から行つたものですから、部

屋と云ふ部屋は酢司詰の有様で軒下にも寝る所がないのでムります。それ故歸つて参りました。此先何うしたらよからうかと思案に暮れて居ます。貴方の笠には十曜の紋がついて居ますが、不思議の事には小北山の神様にも十曜の紋がつけてありました」

「さうして何といふ神様が祭つてあるのだ」

「ハイ國治立命様とか承はりました」

「ハテ國治立命様を祭つてあるとは合點が往かぬ。三五教の一派ではあるまいかなア」

「何だか知りませぬが、小北山の神様と云うて参つて居ります。一寸外からは分りませぬが、あれ御覽なさい、細い煙が立ち上つて居りませう、あすこが神様を祭つてある所です。そして門もあり、澤山の神様も祭つてあつて一々名は覚えて居ませぬが何でも六ヶ敷名のついた神様計りでムいます」

「松彦さま、此婆さまの話は耳寄りぢやありませんか。國治立神様が祭つてあると云ひ十曜の紋がついて居ると云つたでせう。ひよつとしたら治國別の先生が、



其處へ往かれたのではありませんすまいかな

「さうでもあるまいが、松彦もその小北山とやらへ一寸立寄つて様子を考へて見度いものだなア」

「ソんならお伴致しませうか。オイ、五三さま、萬公さま、タク、テク、お前等も賛成だらうなア」

四人一度に「賛成々々」と【ばつ】を合した。

「ヤア小生の提案を満場一致賛成下さいまして、アクの身に取り有り難ういませす」

「ハ、ハ、ハ、アクさま、この二人の女は見殺にする積りかな、何とかして連れて往つてやらねば、可愛さうぢやないか。百人も居る處へ二人位融通のつかぬ筈はあるまい。此婆さまは何か萬びきでもやつたのぢやあるまいかな」

「さうだなア、やりよつたのだらう。随分手癖の悪い奴が、女の中にもあるからなア」

「これこれあなた方、私を手癖が悪いと仰有つたが、さう【どん】どんと仰有る

からには何ぞ證據がありますか、サアそれを聞かして貰はう、こんな事を聞いては、何程女だと云うて聞き捨てになりませぬ、盗人の名をきせられて、先祖に對して申譯がありますか、娘にだつて合す顔がない。何を證據にそんな事を仰有いますか」

と眉を逆立て、睨みつける。

「ヤアこいつは失敗つた、まことに粗疎千萬アク言を申上げました。つい口がにりましてなア」

「口がにつたの、足がにつたのと、そんな事で云ひ譯が立ちますか。私に着せた濡れ衣をサアどうして乾かして下さる。お前さまも世界の人を導いて歩くお方だと見えるが、そんな事でどうして神様の御用が出来ますか」

「イヤ誠に閉口頓首だ、アクの身魂はやられた哩」

「オイ、アクさま、態を見る、餘り言靈を使ひ過ぎると、七尺以上の男が女に屁古まされるやうな事が起るのだよ。アハ、ハ、ハ、萬の悪い代物だなア」

「さうするとお前はアクと云ふのかい、道理で萬引の様な面をしてゐるわい。オ、

恐ろしい恐ろしい、こんな所で追剥せられては大變だ、サア菊、長居は恐れ、早く歸りませう」

「お母さま、浮木の里へ歸ればバラモンの軍人に追剥をされたり、念佛講に合はされたりしては耐りませぬから、一層此處へ身を投げて死にませうか。小北山へ行つても放り出される、ここへ來れば追剥にせられる。家へ歸れば軍人に訶まれる、何うする事も出来ぬぢやありませんか」

「これこれ母子御兩人さま、私は五三公と申すもの、決して盗人ぢやありません。三五教の宣傳使の相伴だ。決して人を難めたり、追剥などはして呉れと云はれても致しませぬから安心して下さい。大切な命をこんな所で果すとは悪い見だ。氣の短いにも程がある。これお菊さま、この叔父さまはそんな怖い者ぢやない、まア安心してお呉れ」

「イエイエお前さまは泥棒だよ。そこにゐる三人のお方は、此間私の村へ出て來て「女徴集だ」と云つて、搔つ攫ひに來たお方ぢや。顔に見覺があります。そんな事を仰有つても私は承知は出来ませぬよ。なアお母さま、さうでせう」

「成る程、その三人の男は家へもやつてきた男だ。隣のお龜を攫へよつたのはその三人だ。バラモン教の目付けたと云つて威張りよつた。こら三人の奴、此婆はかう見えても浮木ヶ原のお寅と云つて若い時には賭場を開帳して居つた白浪女だ。もはや娘が命を捨てると覺悟した以上は、このお寅も足手纏ひがなくて力一ぱい活動が出来る。サア小童共このお寅が河へ投げ込んで村の人の仇を打つてやらう。サアどうぞや」

と目を釣上げ、偉い劍幕で睨めつけた。アク、タク、テクの三人はお寅婆の勢に辟易し、後ずさりして頭を掻いて居る。

「ハ、ハ、ハ、オイ、アク、貴様等三人偉さうに云つて居るが随分悪い事をしよつたなア、年貢の納め時だ。一つ婆アサンとこの激流に投げ込まれて見よ、俺も何なら婆アさまの助太刀をせぬ事もないワ、萬公末代の善の鏡だから」

「これこれお婆さま、さう怒つて呉れては困る、アクの俺は役目で止むを得ず女徴集と出たのだ。役目だと思つてまア見直して呉れ」

「何と云つてもお寅婆が死物狂ひ、許すものかい。これや萬公とやら貴様も同類

であらう。これお菊、お前は死ぬと覺悟を極めた上は一人死ぬのも勿體ない。これ等六人を残らず河へ投げ込んで、大活動をし、天晴れ勇者となつて、冥途に行つた時に其勇名を誇らうぢやないか」

「お母さまそんなら一つ私も死物狂の活動を致しませう。假令一人でも道連にしてやらねば腹が癒へませぬからなア」

松彦は初めて口を開き、

「もしもし、お寅さま、お菊さま、先づお静まりなさい、決して吾々は悪人ではありませんせぬよ。バラモン教の中にもたまには善人が混つて居りますからなア。此三人は成る程女徴集に往つたのは事實でせう。併し今日は最早改心をして三五教の宣傳使のお伴して歩いて居るのだから、どうぞ許してやつて下さい」

「お前さまは一寸賢さうな顔をして居るだけに一寸分つた事を仰有る。許し難き餓鬼なれども、今日は見逃しておきませう。そのかはり三人の餓鬼に「どうも悪かつた」と犬蹲ひになつてお詫をさせにや承知しませぬよ。命だけは助けてやりませ」

「オイ、アク、テク、タク三人薩張顔色無しだナ、女の一人や二人にこみわられて慄つて居るやうな事で、どうして男の顔が立つか。是を思へば悪い事は出来ぬものぢやなア。萬公末代萬年の恥だよ。アハ、ハ、ハ、ハ」

「何も俺は此婆さまにあやまりの條がないのだ。婆さまや娘の體に指一本さへたのでもない、隣の家まで往つたのみだ。オイ婆さま、隣の家を敵打だなんて舊いぢやないか。お前も随分頭が舊いなア」

「エ、つべこべと今の奴は青表紙や蟹文字を噛つてけつかるから、そんな小理屈を吐すのぢや、強太う致して謝罪らぬなら謝罪らないでもよい。此方にも覺悟があるのだから」

「ハ、ハ、ハ、剛情な婆だな、江戸の敵を長崎で打たうとして居る。オイ、俺達三人はこの一本橋を向ふへ渡つて、婆の來ぬやうに、この橋を落してやらうぢやないか、タク、テク、サア來い」

と尻を引き捲り一本橋を無性矢鱈に渡らむとし慌てアクは渦まく激流にドブんと落ち込んだ。タク、テクの兩人は辛うじて向ふへ渡る。お寅とお菊は兩手を上げ

て、ウワイ ウワイとぞめいて居る。

松彦は驚き、

「オイ、萬公、五三公、これやかうしては居られない。婆さまも婆さまだがアクを助けてやらねばなるまい、サア渡らう」

と云ひながら松彦は先に立つて一本橋を渡り初める。續いて五三公も渡り出した。萬公は、

「アクを助けるとは妙だなア、俺だつたら善を助けるがなア」

とほざいて居る。後からお寅は萬公の首筋をグツと引き、お菊は足を浚へ、ドスンと河端に倒して仕舞つた。

「バ、バ、婆さま、ナ、何をするのだ。俺はス、些しもし、知らぬぢやないか」

「知つても知らぬでもよいわ。貴様は敵の片割れだから親子寄つて集つて命を取つてやるのだ」

萬公は吃驚して、

「オイ松彦さま、五三公さま、人殺だ、救けて呉れ」

と聲を限りに叫び居る。激流の音に遮られて向ふ岸には聞えなかつた。四人はアクを助けむと右往左往に周章へ廻つて居る。アクはどうしたものか二三町下手の岸に漸く泳ぎつき、眞裸體となつて濡れた着物を壓搾し初めた。

「アーもう大丈夫だ、矢張アクは偉い奴だ。松彦も感心した。悪運強いとは此事であらう、ハ、ハ、ハ、ハ、」

「もし松彦さま、萬公が居らぬぢやありませんか」

「何、五三公、萬公が居らぬか」

と云ひながら向ふの岸を見ると、二人の女に押へられ藻掻いて居る。

松彦は言せはしく、

「オイ、タク、タクの兩人はアクの方へ往つて世話をしやつて呉れ、五三公は御苦勞ぢやが一本橋を渡つて萬公を助けて来い」

「へい承知致しました、併し貴方はどうなさるお積りです」

「私は宣傳使代理だから先づ中央に坐を占めて兩軍の戦闘振を講評する積りだ、



サア早くゆかないか

「エ、仕方がない」

と五三公は一本橋を又もや渡り、

「これやツ！！」

と唸鳴りつけるを、お寅にお菊は平氣なもので、

「これお前さま何を邪魔をするのだイ。向ふに先生が待つてゐるぢやないか、と

つととあちらに往かつしやれ。此奴は萬公と云つてな、私の娘をチヨロマカした

奴だよ。お菊の姉のお里が野良へ往つた處を待ち伏して野倒しをやり、たうとう

夫婦氣取りで、一年計りも私の家で暮して居つた奴ぢや。お里は悪縁で腹が膨れ、

其ために難産をした揚句に死んで仕舞ひよつた。さうするとこの薄情男奴後足で

砂をかけて逃げてしまひよつたのだ。どこへ往つたかと探して居たが、天命遁れ

ず此處で廻り合つたのだ、娘の敵だ、どうしても殺さねや承知しないのだ。目が

悪いと思つて萬公の奴知らぬ顔して居るが、そんな事の分らぬ婆さまぢやない。

娘の敵この鐵拳でも喰へ

と握り拳をふり上げてコンコンと叩く。

「アイタ、アイタ、萬々々どうぞ勘辨へてお呉れ」

「姉さまの敵承知しないぞ」

と又拳を固めてコンコンと打つ。

「オイ五三公の奴、助けて呉れないか。私も三人や四人の女に弱るやうな男ぢやないが、お寅婆アさまは柔道百段だから、グツと掴まれたら、どうする事も出来ないのだ」

「オホ、オホ、これ五三公とやらこの婆に指一本でもこの體にさへたら承知せぬぞ」

「これや五三公も手の出しゃうがないわい、滅多に命を取るやうな事もあるまいから、精出して叩いて貰へ。なアお婆さま何うぞ強つく、柔かう頼みますよ」

「お母さま、こんな腰抜け男を叩いても仕方がない。もう勘忍してやりませうか。それよりも浮木ヶ原へ歸り、ランチ將軍の陣營に飛び込み、斬つて斬つて斬り死した方が死甲斐があるかも知れませぬぜ」

「さうだ、こんな蠅蟲の二匹や三匹相手にしたつて仕方がない、許してやらう。命冥加の奴だ。今後はきつと慎め、萬公奴」

「ハイ謹みます」

「私の云ふ事を何時迄も覚えて居つて、あの先生の云ふ事を好う聞いて善心に立ち歸るのだよ。サア三千世界の放ち飼ひ、何處へなりと萬公勝手に往け」

と掴むで居た手をパツと放した。萬公はムクムクと起き上り、  
「婆さま大きにお世話になりました。お蔭で肩の凝りが癒りました」  
と捨臺詞を残して逃げて行く。

「仕方がない男だな。彼奴はまだ、どせう骨が直つて居ないと見える。後より追つついて、も一つ折檻してやらう、サアお菊」

と一本橋を渡らうとする。五三公は兩手を擴げ、

「お婆さま、まあまあ待つて下さい、私がつくと云うて聞かしますから、もうこれ切り許してやつて下さい。貴女も一旦許すと仰有つたのだから、もう、これ切り許して下さい。さう執念深く追驅ないでもよいぢやありませんか」

「憎い奴ではあるけれど、たとへ一年でも可愛娘の可愛がつて居た男だから、十分言うて聞かして懲してやり、一人前の男にしてやりたい計りに、かうして母子が手荒い事をしたのだ。萬公を打擲したのは矢張可愛いからだよ。何しに憎うて頭の一つも叩かれやうぞ」

と云ひながら涙を袖に拭ふ。お菊も顔を隠し涙をそつと拭いて居る。

「ア、親の恩と云ふものは有り難いものぢやなア。お婆さま左様なら」と云ひ捨て、五三公は又もや一本橋を慌しく渡つて仕舞ひ、小北の靈場へと急ぎける。

(大正一一・一二・九 舊一〇・二一 加藤明子録)

(昭和九・一二・二九 於湯ヶ島 王仁校正)

第十九章 婆口露(一一八八)

松彦は山道の傍に屹立せる大岩の傍に、五人の従者を集め息を休めて話に耽つてゐる。

「アクさま、随分危ない事だつたな。マア結構だつたよ」

「婆におどかされて走る途端に足をふみ外し、随分冷つ【こい】目に逢ひました。併し乍ら水泳に得意な私ですから助かつたのですよ。タク、テクの兩人だつたら、サツパリ駄目ですわ」

「そらさうぢや。マアよかつた。萬公さま、お前は偉う親子の女にやられて居つたぢやないか。随分弱い男だなア」

「へへ、悪に弱い、善に強い萬公ですもの、無抵抗主義の三五教でなかつたら、婆を河へほりこんで了ふ【とこ】でしたけれども、成る可く直日に見直し聞直して、無抵抗主義を固く守つてをったのですよ。さうしたところ婆と娘とが按摩をしてくれました。肩をうつつやら腰をもむやら、足を引ぱるやら、おかげで體が樂になりましたよ」

「五三公はふき出し、」

「アハ、ハ、ハ、負惜みのつよい男だな。キヤアキヤア云つて泣いて居つたぢやないか」

「ナ、ニあれは「こそばいところ」を揉むものだから笑つてみたのだよ。貴様には泣いた様に聞えるか」

「それでも人殺、助けてくれと云つたぢやないか」

「ウン、一寸テングに言つて見たのだ。その證據には婆さまと娘とが泣いてをつたぢやる。俺は一寸も泣きはせぬよ、大丈夫たるもの女位に泣かされてたまるかい」

五三公は、

「モシモシ松彦さま、此奴の秘密を探つて來ました。仕方のない奴です」

「ナニツ、秘密をさぐつたと、そりや面白い。どんな事だ、差支なくば聞かしてくれ」

「コリヤコリヤ五三公、他人の秘密をあばくやうな不道德はないぞ、慎まぬかい」  
「それなら仕方がない、五三公も沈黙しようかな、お里がわかると氣の毒だからなア」

「コリヤお里の事は云はぬやうにしてくれ。さう親友の事を公衆の前にさらけ出すものぢやないわ」

「松彦さま、あー云つて頼みますから、五三公も友情を以て、或時期まで保留しておきませう。その代りに、萬公が私の命令を奉じない時には、さらけ出します。なア萬公、その條件附で暫く沈黙を守ることによろいかい」

「どうぞ頼む、萬公末代云はぬやうに」

「ヨシヨシその代りに俺の尻を拭けといつても拭くのだぞ。滅多に違背はあるまいなア」

「へん馬鹿らしい。誰が貴様の尻をアタ汚い拭く奴があるかい。體ばかりか心迄汚い代物だからなア。吝坊で悪口言ひで穴さがしで、奸黠で、狡猾で、不道德で、權謀術數家で、強欲で丸で旃陀羅の【けつ】に醬油の實をつけて甜つてるやうな奴だ。こんな奴に祕密を握られて居ると一生頭が上らぬから、イツソの事俺の方から松彦さまの前で公開をするから構うて呉れな。オイ五三公さま、えらい御心配をかけました。別に人のものをチヨロマカシたのでも無し、聞いたら涎の

出るよなボロイ面白い話だから、別に恥にもなるまい。誰だつて多少のローマン  
スはあるのだからなア。女なんか胸が悪いと云ふやうな顔をしてゐ乍ら、人の見  
ぬところでは、女に湯巻の紐でしばかれて涎を練つて居る奴が多いのだから、多  
少の戀物語があるのは寧ろ誇りだ。貴様の様な唐變木では、春が來ても花は咲き  
はせぬぞ」

「何うなと勝手にほざいたが好いわい。俺やもう干渉せぬわ。その代り貴様が失  
敗しても五三公は高見から見物するから、さう思つたがよからう」

「なんだか様子ありげな口振だな。そのローマンズとやらをアクも聞きたいものだ  
よ」

萬公は肱を張り、

「きかしてやらう、謹聽せい」

と今や話の糸口を解かむとしてゐる所へ、以前のお寅、お菊はスタスタとやつて  
來た。

「モシモシ、萬は其處に居りますかなア、あの惡たれ男は」



「そーれ、やつて来たぞ。萬公、喜べ、モ一遍按摩をして貰つたら何うだい」  
「お婆さま、モウ澤山でムいます、イヤもうズンと萬公も改心いたしました。何卒歸つて下さいませ」

「イヤイヤ未だ改心が出来て居らぬ。娘と二人よつて折檻をしてやるのに結構な按摩で肩の凝が下つたと捨臺詞を残して逃げて行くよな男だからな。死なねば治らぬカク病だ、エーエ、骨の折れた事だが思ひ切つて荒療治をしてやらう。オイ萬、此方やへ来い」

萬公は小さくなつて慄ひ戦いてゐる。

「アハ、ハ、ハ、やつぱり何處か心に光明があると見えて、恥を知つて顔を隠しよる。マア頼もしいものだ。コレコレお前さまは萬の親方と見えるが、こんな厄介物を連れて旅をなさるのは、嘸お骨が折れる事とせう。此婆が物語をするのを聞いて下さいませ。此奴の缺點をよく呑み込んでおいて貰ひませぬと、貴方の御迷惑になるといけませぬから、後へ引返して参りました」

「何事が存じませぬが承はりますせう。此男には一つの秘密があるさうですなア」

「お寅さま、殺生な、コレお菊、どうぞお前仲裁して止めてくれぬか。あんな事を云はれちゃ顔が赤くなつて、ついに行く事が出来ぬからなア」

「お母さま、一つか二つ程にして、みんな云はないやうにして上げて下さい。押かけ婿に入つて来た事やら、私を手込にしかけた事は云はないやうにしてねー」

「コラお菊、そんな秘密が何處にあるか。肝腎の事を皆云つて了つたぢやないか、萬公さまを馬鹿にするない」

「私は子供上りだから何云ふかしのれないよ。氣にかけずに許して頂戴ね」

「アハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、到頭面の皮をむかれよるのか。イヒ、ハ、ハ、ハ」

と五三公、アク、タク、テクの四人は手を拍ち踊り上つて喜ぶ。

「松彦の先生様、此の婆の云ふ事一通り聞いて下さい。此の萬と云ふ男は酢でも菟弱でも行かぬ動物でムいますよ。一昨年の冬だつたか、凧のピューピューと吹

く夕間ぐれ、家の門前に見すばらしい乞食が「ふるう」てみると、僕の者が奥へ

知しに来たものですから、私も小北山の神様を信心して居るのだから、人を助けるのは神様の御奉公だと思ひ握り飯を一つ持つて門口迄出て見れば、若布の行列

か、シメシの親分と云ふよなツツレの錦を着て、蓆をかぶつて慄うて居る奴乞食があるぢやありませんか。そこでアー可愛相に同じ様に神様の息から生れた人間だ、助けてやるのが神様への孝行だと思ひ、握り飯を一つお盆にのせて、アタ汚い乞食に御叮嚀に、さア嘸おひもじうムいませう。さあ、これでも食べて歸つて下さいと云ふと、その乞食は黒い黒い顔から、眼をむき出し、吐すことには「アー世界に鬼はない、誠に有難うムいます。此御恩は忘れませぬ」と米搗バツタの様に腰をペコペコ百遍計りも曲げて拜むぢやありませんか、私も不愆が重なつて何とかして湯巻の古手でも探して被せてやりたいと思つて居りました。お盆に握り飯をのせて突出して居るのに取らうともせず、腰ばかりペコペコさして居る。辛氣くさくて仕方がないから、お前、此の握り飯が氣に入らぬのかいと聞くと、その乞食の云ふには今近所で葬式の残りの御馳走を鱈腹頂いて来たところだから、握り飯は欲しくはありません、暖かいお茶が一杯頂きたいと云ふので、私も浮木の村のお寅と云つて仇名を取つた女侠客だから人を助けてやらぬ譯にも行かず、苔だらけの手を握つて奥へつれて行き、たぎつて居つた茶を出して、サア之をお

上りなさいと茶椀を添へて出しておきました。而して奥の間へ入つて障子の破れから考へてみると生れついでに乞食だと見えて、アタ行儀がわるい。土瓶の口から煮え切つた茶をグツと呑み込み、喉に焼傷をして目をクルクルとむき、泡を吹き七轉八倒してゐるぢやありませんか。エー怪體のわるい、ド乞食を引張込んだものだと思ひ、慌て行つて見れば、大切にしておいた靑土瓶はポカツと二つに破れ、折角沸かした茶は疊にこぼれ、疊が御馳走とも何とも言はずに「けるり」となめて、細い目を澤山ならべて睨んでゐるぢやありませんか。ホ、ホ、ホ、そのド乞食が仰向に倒れてゐるところを見れば、煤で煮めたような禪を垂らし、吊柿のよな眞黒氣のものを出して倒れてゐる。サア大變だと家内中がよつてたかつて水をのませ、いろいろと介抱した結果、ようよう息を吹きかへした。併し乍ら舌を「やけど」したものだから、舌も口も腫れ上り、國所を尋ねようにも名を聞こうにも物が言へないので、聞く譯にも行かず、筆紙を持つて來て名を書けと云つても、此奴は明き「めくら」と見えて一字もよう書かず、仕方なしに藪醫者を頼んで來て裏門から灌腸して到頭物を云ふ様にしてやりました。それから蝨だらけの

衣物きものを油あぶらをかけて、焼やいて了しまひ、亡なくなつた爺ぢいさまの一番いちばん古い衣物きものを着きせてやつて、行く處ところもない代物しろものだと云いふから下僕しもべにつかつて野良のら仕事しごとに使つかつて居をりました

五三公いそこうは首くびをかたむけ乍ながら、

「そら誰たれの事ことですか、よもや萬公まんこうさまでは有ありますまいナ」

「云いはいでも知しれたこつちや、此この萬まんのことだよ」

「何なんと【マン】のわるいところに出會でっくはしたものだなア、萬公まんこうさま」

「アハ、面白おもしろい面白おもしろい、お婆ばあさま、しつかり頼たのみますデ。千兩せんりやう々々せんりやうアクアク

するワ」

「コリヤ、アクの奴馬鹿やつばかにすまない、俺おれは瑞みづの【みたま】だ。アクの鏡かがみが映うつつとるのだから、俺おれの事ことぢやない、世間せけんの奴やつの悪わるい事ことが奇麗きれいな【みたま】の俺おれにうつつたのだ。其そのつもりでお婆ばあさまの云いふ事ことを聞きけよ。取違とりちがひと慢心まんしんは大怪我おほげがの基もとだから、お婆ばあさまの云いふ事ことをよく味あぢはうて聞きくがよいぞよ。人ひとの事ことだと思おもへば皆吾みなわが身の事ことであるぞよ。世界せかい中ちゆうがかうなつて居ゐると云いふ事ことを變性へんじやう女子によしの身魂みたまにさして見みせてあるぞよ。……と云いふ教をしへをきいて居ゐるだろ、それが俺おれの事ことだからのう」

「フ、フ、フ、お婆さま、その次を松彦にお聞かせ願ひます」

「一寸此處で中入といたしまして、又後はゆるゆると御清聴を煩はします。オホ、万公さま随分耳が痛からうなア」

「チヨツ、萬公も萬がわるいワイ」

「ア、ア、こんな事は云ひたい事ないけれど、これも萬公の將來の爲だから、モウ一息先生のお耳をわづらはしませうかなア。コレ萬公さま、お前が決して憎うて云ふのぢやない、たとへ三日でも因縁があればこそだ。お前の爲に云ふのだから、聞いて下さい。どうせチツトは耳が痛いのは請合だが、罪亡ぼしだと思つて辛抱しなさい」

「ナント御親切なお婆さまだナア、五三公もこんな親切に云うて呉れるお婆さまに逢ひたいわ。それからお婆さま、後は何うなつたのだい」

「それからお前さま、此の萬を野良仕事にやつて置いたところが、鼠かなんぞのよに大根を作つておけば嚙ぢつて食ふ。蕪をひいて食ふ、サツマ芋は根からひいて食つて了ふ。まるで土龍を飼うてをるよなものだ。こんなものを飼うてあちや

百姓をせぬがましだと思つて、仕方なしに娘の見守り役にしてやつた。それがサツパリ災の種となつたのだ。此の婆が熱病をわづらつて今日か明日か分らぬといふやうになつたので、孝行な娘のお里が此萬をつれて氏神の社へ参拜をしたのだ。ソゝすると何時の間にかお里の腹がポテレンと太つて來た。婿も貰はぬのに腹がふくれるといふのは、コリヤ屹度脹滿に違ひないと藪醫先生を頼んで見て貰つたら、娘の氏神参りの御かげで私の病氣は直つて了うたが娘が脹滿になつて了つた。醫者も醫者だ。脹滿だ脹滿だといつて矢鱈に苦いものを飲ます、ソレでも十月目にターククの口が開いてホギヤアと一聲、娘はビツクリして其場に氣絶して了つたわいの、アンアン。それから上を下へと大騒動を始め、朝鮮人蔘を飲ましたおかげで、ヤツトの事で氣がつき、おかげで娘の生命はとりとめたが、肝腎の乳が出ぬものだから、生れた子は骨と皮になり、到頭死んで了つた。アーンアーン

「ソリヤどうも氣の毒な事だなア。そしてその子は一體誰の子だい」  
婆は「ところまだら」に残つた齒をかみしめ、イーンイーンと頤をつき出し、

妙な手つきで萬公の肩をこづくやうな手振りをして、

「此奴だ此奴だ、此のガキだよ。アーンアーン」

「オイ萬公さま、まんざらでもないのー。エー、アクにも一杯おごつて貰はうかい」

「ウン」

「それからいろいろと詮議の結果、お里が言ふには萬さまの子だ。こうなるのも前生の因縁づくぢやから、何卒乞食上りの萬さまでも私の夫に違ひない。此人と添はしてくれなければ死にます死にますと駄々をこねるのだ。此道ばかりは親が何うする譯にも行かず氣に入らぬ男だと思つたが、何を言つても肝腎の娘がゾツコン惚こんであるのだから、此婆も我を折つて泣き寝入りにしたのだ。所が運の悪いお里は産後の肥立ちが悪うて、歸らぬ旅に行きました。アーンアーン」

と涙を拭ふ。

「五三公はホツと息をつぎ乍ら、」

「ナント萬公といふ奴は罪な事をしたものだなア。刃物持たずに二人も人を殺し



やがったなア。道理で野中の森で暗うなるとビリビリふるひよると思つた。やつぱり斯う云ふ原因があるのだから、怖ろしがるのだワイ」

萬公は、

「コリヤ五三公、批評はやめてシツカリきけ。これからが性念場だぞ」と焼糞になつて怒鳴り立ててゐる。

お寅は言を次いで、

「それから此萬の恩知らず奴、増長しよつて、まだ蕾の花のお菊を手込めにし、二代目の女房にしようと思つたのだ。流石に偉い女だからお菊はポンと肱鐵をくはした。すると萬公奴、妹に肱鐵をくはされて逢はず顔がないと遺書を書いて吾家を出た切り、膿んだ鼻が、つぶれたとも、河童の屁がくさくさないと云つて來ず、本當に困つたガラクタ男だ。妾は今日小北山の神様に、浮木の森の村に一時も早く軍人が居らぬ様になります様と祈つて居る所へ、娘に神憑があり、今早く行けば萬公に出逢ふ」との御指圖で、實の處は萬公に意見をやらうと思つて出て來たのだ。此上の神様には澤山な人がこもつて居るが、まだ三人や五人

寝られぬ筈はないが、萬公の様子を探らうと思つてあんな事を云つて居つたのだ。  
……松彦の先生さま、私の家では斯ういふ事をやつて居ましたから、嘸世間でも  
悪い事をして歩くでせう。何卒氣をつけて眞人間にして下さい。因縁あればこそ  
娘の腹をふくらしただのですから、娘の惚て居つた男を憎いとは思つて居ませぬ、  
何卒一人前の人間にして貰ひたいと思つて再び引返して來ました  
と涙乍らに語り終る。

「何もかもわかりました。何卒御安心なさいませ。私ばかりか治國別様といふ立  
派な先生がついて居られますから、萬公の事は御案じ下さいませな」

「ハイ有難うございます、何卒よろしう御願ひいたします。サアお菊、失禮して一  
足お先へ行きませう。お龍さまが待つてゐられますから」

「皆さま御面倒いたしました。菊はお先へ失禮いたします」

「左様ならば御機嫌よう」

「五三、アハ、ハ、ハ」

「アク、オツホ、ハ、ハ」

タク、テクは飛び上つて、

「ワツハ、面白面白いオツホ、」

「アア、悪い夢を見たものだ。薩張り俺の顔は臺なした。ドーレこれから一つ花々しい功名をして萬公末代世界に名を残し、お里の靈を慰めてやらうかなア」

「アハ、五三公にまで、萬公、到頭お里が解つたぢやないか。イヒ、」  
(大正一・一二・九 舊一〇・二一 外山豊二録)

## 第二〇章 脱線歌(一一八九)

松彦はお寅、お菊の後を見送つて、

「萬公がお寅婆さまに巡り會ひ

恨みの數々お菊さま哉。

萬まん更ざらに捨すてたものではあるまいと

たかを括くくつた五い三公そこうの口くち。

川かはの邊べで昔むかしの垢あかを流ながしけり

萬まん公こう末まつ代だい取たいれぬ罪つみとがを。

荒あ波らの伊い猛たけり狂くるふ河か鹿か川がは

丸まる木きの橋はしを渡わたる危あやふさ。

猿さる叫さけぶ野の中なかの森もりを立たち出いでて

婆ばさんとはまつた萬まん公こうの破は目め」

萬まん公こう「お寅とらさま、お菊きくをつれて河かはの邊べに

萬まん公こう來くると茲ここに松まつ彦ひこ。

あま相さうなお里さとの浮うき名なを永とこ久しに

流ながしける哉かな河か鹿か川がは原はらに」

五三 「身の油とられた上に小言をば

菊子の姫の耳の痛さよ。

偉相に此行先は言はれまい

お里の分つた萬公の身は

萬公 「コラ五三公、おればつかりぢやない程に

貴様も尻の臭い奴だよ。

吾尻の赤いを知らぬ山猿が

人の事をばかきまはすなり

五三 「恥をかき頭をかきてベソをかき

お寅婆さまにかき毬られる。

アハ、ハ、ハ、開いた口さへ塞がらぬ

ローマンスの口は口と申せば。

大根畑荒す野鼠土龍

お里の芋の穴までねらふか

萬公「穴尊と穴ない教の穴を見よ

宣傳使にも妹が居るぞよ」

五三「芋をほり蕪をぬいてくらふ奴

三五教の大根役者よ」

萬公まんこう「馬鹿ばか云いふな蕪かぶらをぬいた其跡そのあとに

てまりの様な穴あながあるぞよ。

三五あななひの神かみの教をしへと誰たが言うた

貴様きさまの顔かほにも抜穴ぬけあながある。

抜ぬけた面口つらくちあんどあげ乍ながら

三五あななひけう教けうとはよくぬかしたり。

五三いそこう公こうのローマろまンをば尋たづぬれば

磯いその鮑あわびの片かた思おもひかも。

萬公まんこうは何なんと云いうても色男いろをとこ

お里さとの方かたに思おもはれたぞや。

思おもはれて思おもひ返かへすは益良男ますらをの

權威けんいと知しらぬ馬鹿ばか者ものもあり」

アク「アク垂れのババに悪垂れ口いはれ  
へこ垂れよつた萬公の面」

萬公「こりやアク奴、何も知らずに喧ましよう

きさまが口をアク所でない。

山猿の様な面した其方に

戀が分つてたまるものかい」

アク「仕殺したお里の事を思ひ出し

ホ、、とほほゑみをする。

幾度もホ、、と森の中

暗に紛れて死嬢が慕ふ。



おかし奴、何程こがれ慕うとも  
幽霊抱いては寝られまいぞや」

萬公「こらアクよ、貴様は何を幽霊か  
無禮を云ふも程があるぞや」

タク「コレは又面白うなつて來よつたぞ  
お里が墓からお出でお出でする」

萬公「タクの奴何も知らずに八釜しい  
子供に戀が分るものかい」

タク「タクさまは、タク山さんに姫ひめを持つたぞよ

天下無雙てんかむさうのナイスばかりを」

萬公まんこう「何なにぬかす蜥蜴とかげのやうな面つらをして

ナイスもクソもあつたものかい」

テク「こりやタクよ慢心まんしん奴やつこを捉とらまへて

相手あひてにするな人ひとが笑わらふぞ」

タク「笑わらうてもかまふものかい笑わらはれて

油取あぶらとられた萬公まんこうぢやもの」

テクあななひ 三五をしへの教みちの道まんこうの萬公は  
婆ばばと娘むすめにくはれける哉かな ㊦

萬公まんこう ㊦ テク迄までが何なにゴテゴテと囀さへつるか

俺おれの心こころを知しつて居ゐるか。

萬公まんこうは今いまこそ負まけて居ゐるけれど

お菊きく成人せいじんした時ときを見みよ ㊦

五三いそ ㊦ お菊きくさま大おほきくなつたら又またやると  
萬まんが一いちをばあてにしてるのか ㊦

萬公まんこう「コリヤ五三公いそこう、急いそいで事ことはなるものか

先さきを三年みとせの春はるを見みて居をれ」

五三いそ「又またしてもそんな野心やしんを起おこすなよ

今度こんどは首くびと胴どうと別わかれる」

萬公まんこう「三年さんねんの先さきになつたらお寅とらさま

冥途めいどの旅たびに行いつたあとだよ。

何事なにごとも萬まんさまなればお菊きくぢやと

今いまから秋波しゅうはを送おくり居ゐるらし」

松彦まつひこ 「腰折れのみ歌ばかりをうたひ上げ

うたてき事の限りつくせし。

サア萬公まんこう、五三公いそこう、アク、タク、テク五人ごにん

もうボツボツと山やまに登のぼるか」

萬公まんこう 「宜よろしかるお寅婆とらばさまはさておいて

お菊きくの奴やつが待まつてゐるから」

五三いそ 「執着しつちやくの深ふかい奴やつぢやと思おもたけれど

これ程ほど迄までとは思おもはなかつた」

萬公まんこう「呆あきれたかオツたまげたか五三いそ公こうよ

人ひとは見みかけによらぬ者ものだよ。

さり乍ながら俺おれも誠まことの道みちをゆく

萬公まんこうなれば戀こひは廢はいした。

心配しんぱいをどうぞなさつて下くださるな

メツタにお菊きくは思おもはないから」

五三いそ「さうだらう、何程なにほど思おもうてみた所ところが

向むかふが厭いやなら仕方しかたなからう」

アク「コレは又また面おも白しろうなつて來きたわやい

旅たびの慰なぐさめ此上このうへもなし」

テク「テクついて川の畔に来て見れば  
婆さんに追はれてバサンとはまる。  
アク運の強いお方が助かつて  
世に珍しき話きく哉」

萬公「萬さまがあつたらこされお前等も

歡喜の笑に漂うたのだ。

心靈の餌さは歡喜と云ふぢやないか

おれを命の親と尊め」

松彦は先に立つて歩み出せば、五三公は一足々々坂道を登り乍ら笑ひ半分に歌  
ひ始むる。

神かみが表おもてにはれて

善ぜんと悪あくとを立たて分わける

ババが川邊かはべに現あらはれて

萬公まんこうとアクを苦くるしめる

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

此世このよの鬼おにに巡めぐり會あひ

心こころもひどく悄氣返せうげかへり

只何事ただなにごとも人ひとの世よは

直日なほひに見直みなほし宣直のりなほし

只何遍ただなんべんも人ひとの前まへ

なぶられものに會あはされて

身みの過あやまちは宣直のりなほせ

身みの過あやまちを述のべられて

萬公まんこうの奴やつがベソをかく

旭あさひは照てる共曇ともくもる共とも

アク公こうは川かはへはまる共とも

月つきは盈みつ共虧ともかくる共とも

罪つみのあり丈だけさらす共とも

假令たとへ大地だいちは沈しづむ共とも

譬方たとへかたなき大癡呆だいちほう

誠まことの力ちからは世よを救すくふ

萬公まんこうの畜生ちくしやうは夜這よばひする

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

ウラルの教をしへの穴搜あなさがし

ウブスナ山やまを後あとにして

河鹿峠かしかたうげをよぢ登のぼり

ウツカリ川邊かはべに巡めぐり會あひ



嬪かかの親おやになぐられる  
祠ほこらの森もりに來きて見みれば

玉國たまくに別のわけ宣傳せんでん使し  
野中のなかの森もりを立たち出いでて

たまたま會あうた婆娘ははむすめ  
猿さるに目玉めだまをかき取とられ

氣きの毒どくなりける次第しだいなり  
皿さらのよな目玉めだまをむき出だされ

氣きが氣きでならぬ次第しだいなり  
險けはしき坂さかをエチエチと

下くだりて漸やうやく山口やまぐちの  
險けはしき流ながれを打うちわたり

やうやう茲ここに息休いきやすめ  
魔性まじやうの女をんなに出會でつくはし

荒肝あらぎもとられし可笑をかしさよ  
萬公まんこうが婆ばばに追おひつかれ

缺點あらさらされし可笑をかしさよ  
あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

御靈みたま幸さちひまませよ  
あゝ叶かなはぬから叶かなはぬから

目玉めだま飛とび出だしまませよ  
アハゝツハ アハゝゝゝ

イヒゝゝツヒ イヒゝゝゝ  
ウントコドツコイきつい坂さか

萬公まんこうは足あしが「だる」からう  
おれも一度いちどはお菊きくさまに

何なんとか都合つがふよく巡めぐり會あひ  
マ一度いちど萬公まんこうの臆病おくびやう振り

一伍一什を打明けて 愛想をつかさせやらうかい

それが萬公の一生の お爲になるに違ない

これこれもうし松さまへ 私の云ふのが違うたら

どうぞ叱つて下さんせ ウントコドツコイ小北山

ウラナイ教の本山に 一寸よう似た名稱だ

此奴ア大方高姫や 黒姫さまの慢心の

其ほとばりが芽をふいて 怪體な教を立て通し

十曜の紋を引つけて 世界をごまかし居るのだろ

何だか知らぬが五三公は 一寸も氣乗がせないぞや

お寅のよな皺苦茶の 婆さまばかりがウヨウヨと

両手を合せ水鼻汁を 啜りまはして八釜しう

下らぬ事を囁きつ 曲津を拜みてゐるのだろ

あゝ惟神々々 目玉飛出しましたませよ

アハ、ハツハ アハ、ハ、ハ、 最早こころでやめておこ

これから萬公の番ぢやぞや  
息がつまつて出て來ない  
あゝ惟神々々

萬公は負ぬ氣になつて歌ひ出した。

ウントコドツコイドツコイシヨ  
五三公の奴めが悋氣して

何ぢやかンぢやと誂りよる  
貴様の事ぢやあるまいし

かもつておくれなホツトイテ  
法界悋氣も程がある

昔におうた古疵が  
一寸物言うたばかりだ

これも一つの御愛嬌  
昔はつまらぬ奴なれど

今は立派な宣傳使  
治國別の片腕だ

ゴテゴテ言うて貰うまい  
おれにはおれの權利ある

松彦さんが偉うても  
ウブスナ山の神様に

許して貰うた事もなく  
ホンの内證の宣傳使

治國別の留守役だ

本當の事を云うたなら

萬公さまが宣傳使

臨事代理となる所だ

コラコラ五三公アク公よ

タク、テク兩人よつく聞け

すべて此世に大業を

なさうと思ふ人物は

大きな影のあるものだ

それをばお【かげ】といふのだぞ

冷血漢の五三公が

どうして英雄豪傑の

心裡が分つてたまらうか

子供は子供のやうにして

沈黙してるが伶俐だぞ

モウ之からは萬公も

遠慮會釋はせぬ程に

正々堂々先に立ち

治國別の代辨を

努めて見よう皆の奴

おれの命令に反くのは

治國別の命令に

つまり反くといふものだ

旭は照る共曇る共

五三公はこける共這る共

月は盈つ共虧くる共

狐は啼く共吼えるとも

假令大地は沈む共

假令五三公は平太る共

誠の力は世を救ふ

曲津の五三公は世を紊す

此世を造りし神直日

此山登る神の御子

心も廣き大直日

乞食上りの皆の奴

只何事も人の世は

高い山路シトシトと

直日に見直せ聞直せ

竝んでドシドシ登りゆけ

身の過ちは宣り直せ

皆過つてふん伸びよ

三五教の宣傳使

アブナイ教のセンチ蟲

治國別に從ひて

ハアハア山路分け登る

悪魔の征途に上りゆく

飽迄つづくセンチ蟲

あははツはアハハハハ

どうやら種が切れて來た

小北の山の眞中で

ババを垂れるか【こきた】ない

たうとう俺もへこたれた

ハハハ フーフー フースー

オイ皆みなの奴やつ、ドウコイ、皆みなの立派りっぱなお方かた、萬々まんまんここで御休息ごきゅうそくなさつたら何どうですか。歌うたのまづい松彦まつひこさまに、テクへの下手たなテク公こう、ゴータクじやうづの上手うなタク公こう、悪あく運うんの強つよいアク公こう、東海道とうかいだうの五十三次ごじふさんつき、一つひとつここらで、休やすまう……かい」

松彦まつひこは吹ふき出だし、

「ハハ、たうとう弱よわりよつたなア、川端かはばたではいぢめられ、森もりの中なかではおどかされ、又また山路やまみちで苦くるめられ、よくよく萬まんの悪わるい男をとこだなア。アハ、ハ、ハ、併しかし何なんだか松彦まつひこも足あしが變へんになつて來きた。幸さいはひここに口八臺くちやうだいが竝ならんでゐる。全體ぜんたいとまれツ」

此この聲こゑの終はるか終はらぬに萬公まんこうはドスンと腰こしをおろす。續つづいて一同いちどうは嬉うれし相さうに腰こしを下おろし休き息そくする。

(大正一一・一二・九 舊一〇・二一 松村眞澄録)

(昭和九・一二・二九 王仁校正)

松彦一行は暫く休憩の後、一町計り峻坂を登り、細い階段を二百計り刻み乍ら漸く小北山神館の門口に着きける。そこには白髪はくはつの老人らうじんが机つくえを前まへに据すゑ、白衣びやくいに白袴しろはかまで置物の様やつにキチンと坐すわつてゐる。奥おくの方ほうにはザワザワと祈念きねんの聲こゑが聞きこえて居ゐる。松彦は、

「お爺ぢイさま、私は旅たびの者ものですが、結構けつこうな神様かみさまがお祀まつりになつてあると承うけたまはり参さん拜ばいをさして頂いたきました、ここの教をしへは何なんと申まをしますか」

「お前まへさまはどこの方かたか知らぬが、ようマア、御参詣ごさんけいになりました。私は目めが見みえぬので、かうして受付うけつけをやつてゐるのだが、それでも有難ありがたいもので、人ひとの聲こゑを聞きけば、男をとこか女をんなか年寄としよりか若わかい者ものか心こころのよい人ひとか悪わるい人ひとか、よく分わかるのだから有難ありがたいものだ。そしてチヨコチヨコ人ひとに頼たのまれて、此この通とほり繪ゑを書かいてゐるのだ」

「何なんと妙めつですなア、一寸見みせて御覽ごらん」

「ハイハイ見て下さい、これでも信者しんじやの人ひとが喜よろこんで額がくにしたり、掛地かけぢにしたりするのだから……」

「なる程ほど、目めの見みえぬ人ひとの書かいた繪ゑにしては感心かんしんなものだ。ヤア松まつに龍神りゅうじんさまが

巻まきついたり、蕪かぶらに大根だいこん、圓山まるやま應舉おうぎよでも跣はだしで逃げ相さうだ。オイ萬公まんこうさま、お前まへ蕪かぶらに大根だいこんは好物かうぶつだないか、一つ頂いただいたら何どうだ〃

萬公まんこう「松彦まつひこさま、あなたも餘程よほど身魂みたまが悪わるいと見みえて、此この繪ゑを御覽ごらんなさい、お前まへさまの名なの松まつに一本いっほんの角つのの生はえた黒蛇くろくちなはが巻まいてるぢやありませんか〃

「何處どこの方かたが知しらぬが、これは龍宮りうぐうの乙姫おとひめさまの御神體ごしんたいだ。黒蛇くろくちなはなぞと勿體もつたいない事ことをいひなさるな〃

萬公まんこう「それでも大おほきな口くちがあつて黒くろい繩なはが引ひついとるぢやないか。それで私わたしは黒くろい口繩くちなはだといつたのだ〃

「アハ、ハ、ハ、お前まへさまは繪ゑを見みる目めが無ないから困こまつたものだナア〃

萬公まんこう「此方こちらに目めの無ないは當然たうぜんだ。目めの無ないお爺ぢいさまの書かいたもの、こら大方おほかた冥土めいどの龍神りうじんさまかも知しれぬぞ〃

「お前まへさまは此このお館やかたへ冷ひやかしに來きたのだな、そんな人ひとは歸いンで下ください、アタ萬まんの悪わるい〃

松彦まつひこ「お爺ぢいさま、此こ奴いつア、チと氣きが觸ふれてますから、何卒どうぞ了見れうけんしてやつて下くださ



い。實の所は此氣違ひを直して頂かうと思つて連れて來ましたのぢや、田圃の中へ這入つて、大根や蕪の生を嚙つたり、薩摩芋を土のついたなり、ほほばるのですから、困つた癡狂院代物ですわい。何とか直して頂く工夫はありますまいかな」  
「成る程さう聞けばチツと此方は氣が觸れてると見えますわい、どうも私の靈に其様に始めから感じました。氣の毒でムいますなア。この氣違ひは容易に直りますまいから、暫く氣の鎮まる迄、石の牢がしてムいますから、お預かり申して三週間計り暗い所へ突つ込んでおきませうよ」  
萬公「イヤもうお爺イさま結構です。貴方のお顔を拜んでから、次第々に氣分がよくなり何うやらモウ正氣になりました。モウ結構でムいます」  
「それでも再發したりすると困るから、二三日入れて見ませうかな。松彦さまとやらお考へは何うですか」  
萬公は松彦の袖を頻りに引ぱつてゐる。  
「ヤア之位なら大した事はありませんまい。マア暫く容子を見た上で願する事に致しませう」

「そんなら貴方の御意見に任しませう。何時でも御預かり致しますから」

「ハイ有難うムいます。何卒宜しう頼みます」

五三公は小聲で萬公の袖をチヨイチヨイと引ぱり、

「オーイ松に黒蛇、大根に蕪計り書いてるぢやないか、丸で二十世紀の三五教の五六七殿に居る四方文藏さまの様なお爺いさまだねえ」

「ウフ、、オイあこに髭の生えた人が居るぢやないか。あの人こそ本當の神さまみた様なア。あの先生に拜んで貰うたら、有難いに違ひないぞ」

「ナアにあれは謠の先生だ。大分に酒が好きだと見えて、あの顔の色みい、ホテつてるぢやないか」

「コリヤ大きな聲で言ふな。聞えるぞ」

松彦は、

「此教會の縁起が聞きたいものですなア」

と云へば、老爺は心よく、

「ハイ此小北山のお廣間は元はフサの國の北山村にあつたのだ。高姫黒姫といふ

立派な宣傳使があり、高姫さまが教祖で、黒姫さまが副教祖であつた。たうとうあの人も惜い事になつたものだ。アブナイ教とかへ首を突込んで了ひ、今はどうならしやつたか、便りもなし、實にアブナイ事をしたものだ。そこで總務をしてムつた蠓蛭別さまが魔我彦といふ弟子を連れてここへお出になり、小北山の神殿というて、高姫の遺鉢を受け、ここで教を開かれたのだ。随分澤山の神様が集まつてゐる地の高天原ぢやぞえ。お前さまも神様の因縁があればこそ引寄せられなさつたのだよ」

松彦は、

「有難うムいます。其蠓蛭別さまはゐられますかなア」

「ハイ大奥にゐられますが、餘りいろいろの神様が御出入り遊ばすので、お忙しうてお酒の接待計りしてゐられます」

「蠓蛭別様の一つの體にさう大勢お集まりになるのですかなア。ソリヤ大抵ぢやありませぬなア」

「今は【かむづまり】彦命と仰有いましてな、ウラナイ教の教祖でムいますぞ。」

それだから随分澤山の神様が御出入り遊ばし、お神酒をあがるので、朝から晩まで本性はチツともムいませぬ、本當に妙ですワ。今仰有つた事と、少し後で仰有つた事とは、クレリツと違ふのですから、そこが所謂八百萬の神様のお集まりなさる證據です。何と偉いお方もあつたものですワイ」

「さうするとお憑りになる神様は何と申しますかな」

「餘り澤山で早速には數へる事も出来ませぬが、何を言つても、八百萬の神さま

ですから。先づ第一神集ひ彦の神、神議姫命様、葦原の瑞穂彦命様、八洲國平

姫命様、言依さしまつりの命様、荒ぶる神様、言問し姫命様、神拂彦命様、岩根

木根立彦命様、片葉言止め姫命様、天の岩座放ちの命様、天の八重雲姫命様、嚴

の千別彦命様、四方の國中彦命様、下つ岩根彦命様、宮柱太しき立ての命様、天

の御影彦、日のみかげ姫、益人姫、過ち犯し彦、くさぐさの罪の姫、畔放ち彦、

みぞうめ姫、ひ放ちしきまき姫、串さし様……といふ様な立派な神様が澤山に祀

つてムいます」

萬公はあきれ顔で、

「丸で三五教の祝詞そつくりぢやないか。妙な名のついた神さまもあつたものぢやなア」

爺イは眞面目な顔して、

「神様は其お働きに依つてお名が現はれて居るのだから、お名さへ聞けば何を御守護下さるといふ事がよく分るやうに、螾蛸別の教祖がおつけ遊ばしたのだ。元より神様に御名はない、人間が皆お名を差上げて稱へまつるのだからなア」

「成る程、如何にも御尤も。流石は螾蛸別の教祖様ですなア、お爺さま、一つ松彦に神様の因縁を聞かして下さいな、今仰有つた神様はどこに祀られてムいますか」

「其神様は神言殿といふ御殿を立てて祀らねばならぬのだが、まだ準備中だ。かうして山のどてつ邊まで澤山の宮が建つてゐるが、一番下の大きな御殿が大門神社と云つて、世界根本の生えぬきの神様が祀つてあるのだ」

「そして其神様の名は御存じですか」

「アハ、ハ、ハ、肝腎の御仕へして神様の名が分らないで何うなりますか、お前さ

まも餘程分らずやだなアよほどわか」

「分らないからお尋ねしとるのぢやありませんかわか」

「一番此世の御先祖さまが、國治立命様、それから左のお脇立が【ゆらり】彦命、いちばんこのよごせんぞくにはるたちのみことさまひだり

右のお脇立が、上義姫命様だ。そして【ゆらり】彦命様の又の御名末代日の王天みぎわきだちじやつぎひめのみことさままた

の大神様と申しますのだ。それから日照す大神さまといふのが祀つてある、其神おほかみさままを

様の御分靈が羊姫様、羊姫の妹様が常世姫命様だよ。そして稚姫君命様は良の金さまごぶんれいひつじひめひつじひめいもうとさまとこよひめのみことさまわかひめぎみのみことさま

神様坤の金神様の御娘子だじんさむつじさるこんじんさまおんむすめご」

「一寸待つて下さい。ソリヤ少し配列が違はしませぬかちよつとくたすこはいれつちがひ」

「お黙りなさい。神様の戸籍調べをしてゐるのに、勿體ない何をグツグツ云ひなだまかみさまこせきしらもつたいなに

さる。氣にいらな聞いて下さるな。モウいひませぬぞやききくださるな。もういひませぬぞや」

「イヤこれはこれは不調法申しました。どうぞ御教訓を願ひますいやはやはふまをぶてうはふまをどうぞごけうくんねが」

「それなら聞かして上げやう。確り聞きなされ。此大門神社にはそれ丈の神様と、あそれなら聞きあてあしつかきこのおほもんじんじやだけかみさま

まだ外に澤山の神様がお祀りしてあるのだ。稚姫君命様が天地から御預かり遊ばほかたくさんかみさままつわかひめぎみのみことさまてんちおあづあそ

した八人の結構な神様がある。第一に義理天上日出神様、第二に青森白木上の命はちにんけつこうかみさまだいいちぎりてんじやうひのかみさまだいにあもりしらぎじやうみこと

様、次に天地尋常様、これ丈が男の神様、次に常世姫様、次が金龍姫様、次が大足姫様、次が琴上姫様、其次が金山姫様此三男五女が變性男子の系統でムいますぞや。それから又常世姫様が天地の神様から始めてお預かりになり育て上げられた神様が八柱、これは五男三女だ、第一に地上大臣様、次がたがやし大臣様、次が地上丸様、次が「きつく」姫様、次が旭子姫様、次が花依姫様、此神様の靈が猿彦姫と變化、又變化遊ばして「みのり」姫とやがてお成り遊ばすさうだ。それから早里姫、地上姫、以上十六柱が魂の根本の元の誠の生粹の大和魂の因縁の神様でムいます。これを合して四々十六の菊の神様と申します。それから又、義理天上さまが預つて育てた神様が七人ムる。第一に天照彦、天若彦、次が八王大神、大野大臣、それから道城よしのり、大廣木正宗、柔道行成、都合二十三柱の神様が天地根本、生粹の靈の元の神様だ。これ位結構な神様の教を聞き乍ら、第一の教祖の高姫さまはアブナイ教へ沈没して了つたのだから惜いものですわい」

萬公「もし松彦さま、サツパリ支離滅裂ぢやありませんか。親かと思へば子になつたり、子かと思へば親になつたり、なんと譯の分らぬ神さまですな。マンマン

マンマー」

「コレ、支離滅裂とは何を云ふのだ。ヤツパリお前は氣違ひだな、黙つて聞かつしやらぬかいな」

「ハイ萬々聞かして貰ひませぬワイ」

「此奴あキ印ですから、どうぞ氣にさえずに居つて下さい。松彦はお詫します」

「ヨシヨシ、今言うた二十三柱の神様が天地をお造り遊ばし、人間の姿を現はし

て、現界の政治を遊ばしたが大將軍様、常世姫様の夫婦でゝいます。それが又、

大將軍御夫婦が餘り我が強いので、折角の神政が破れ、御退隱なされ、第二の政

治をなされたのが、地上大臣様、耕し大臣様、そこへ地上丸様が御手傳遊ばして、

三人世の元結構な世が開きかけてをつたが、又もや慢心が出て現界の政治が潰れ、

止むを得ず又大將軍様が變化てサダ彦王となり、常世姫様が變化てサダ子姫とな

り、きつく姫、旭子姫、花依姫といふ三人の子をお生み遊ばしたが、又其政治が

潰れ高天原は大騒動が始まりました。それから今度は四代目の天下の政治を遊ば

したのが、八王大神様と王龍姫様、王龍姫は後に大鶴姫とおなり遊ばした。又其



政治せいぢがつぶれ、五代ごだい目の政治せいぢをなさつたのが大野おほのだいじん大臣さま様、大野おほのひめ姫ののお二方ふたかた、此時このときは非常ひじやうに盛さかんであつて、世界せかい中ちゆうが一つひとつに治をさまり、後あとにも先さきにもないやうな世よの中なかの政治せいぢが行おこなはれた。そして青森あをもり行成ゆきなりさまや、義理ぎりてん天上じやうさま、天地てんち尋常じんじやうさまがお手傳てつたひをなさつたので、非常ひじやうな勢いきほひになつて來きた。そして所ところが餘あまり世よが上のほりつめて又大野またおほのだいじん大臣さまの政治せいぢがメチャメチャに破やぶれ、第六だいろく番目ばんめには道場だうぢやう美成よしなりさまと事足ことたり姫ひめの御ごふ夫婦うふが御政治ごせいぢを遊あそばし、大廣おほひろ木正きまさ宗むね、柔道じうだう行成ゆきなりといふ二人ふたりのお子こさまが出來でき、いよいよ神政しんせい成就じやうじゆが成上なりあががつたと思おもへば少すこしの間まに又またもや、慢心まんしんを遊あそばし、八岐やまた大蛇をろちや金毛きんまう九尾きうび曲鬼まがおにの惡靈あくれいに蹂躪じうりんされて、世よの中なかがサーパリ「わや」になつて了しまひ、そこへ變性へんじやう女子によしの素盞すさの鳴尊のみことが現あらはれて、惡あくの鏡かがみを出だしたものだから、今日こんにちのやうな強つよい者勝ものがちの世界せかいが出來できたのだ。此このウライ教けうは御覽ごらんの通りとほ天下てんか太平たいへい上じやう下一かいつち一致いちぢだが三五あななひ教けうにバラモン教けう、ウラル教けうなどは戰いくさばかりしてゐるぢやないか。神様かみさまが喧けん譁くわなさるといふ事ことはある可べからざる事ことだ、お前まへさまもそんな喧譁けんくわ好ずきの神様かみさまを信仰しんかうせずにウライ教けうの神様かみさまを信仰しんかうをなされ、昔むかしの昔むかしのさる昔むかしの因縁いんねんから、根本こつほんの根こつ本ほんから、大先祖おほせんぞの因縁いんねん、靈魂みたまの性來しやうらい、手てに取とる如ごとくに分わかりますぞや。あゝ惟神靈かむながらたま

幸倍坐世ちはへませ」

「アハ、ハ、ハ、萬公は満口が閉さがらぬワ、イヒ、ハ、ハ、ハ、」

「又氣が違ひ出した、困った奴だなア、ウツフ、ハ、ハ、ハ、松彦も困りますよ」

「これで此大門神社の神様の因縁はあらまし分つたでせう」

「ハイ、よく分りました。有難うございました。貴方は随分詳しいお爺さまだが、

お名は何と申しますかな」

「私は「おちたきつ」彦と申しますよ」

「へー、長いお名ですな」

「蠓蝮別様に頂いた神名だから、長くても仕方ありません。名が長い者は長生

をするとかいひますから、もう少し長くてもいいのですが、まだ修行が足らぬので、

ここらで止められて居るのでムいます。私の修行が積みた上は、「おちたきつ」

速川の瀬にます彦命といふ名をやらうと仰有いました」

「ウツフ、ハ、ハ、エツ、ハ、ハ、ハ、」

と一同は笑ふ。

「サア是から、種物神社へ案内致しませう」

「老爺さま、目のお悪いのにすみませぬア」

「目が悪いと云つても、神様の御用ならば何でも出来るのだ。サアついて來なさい。きつい山だぞえ、迂りこけて向脛を打つたり、腰をぬかさぬやうになさいませや」

と云ひ乍ら、種物神社の前へエチエチと登りつめた。

「ここには石造りの宮と木造の拜殿が建つて居りますなア。何とマア偉い斷岩絶壁を開いて建てられたものですか」

「ハイ之は大將軍様の生宮と地上丸さまの生宮が鶴嘴の先が搗粉木になる所迄岩をこついてお造り遊ばしたのだ。何と感心なものでムいませうがなア。此神様に地の世界の大神様と日の丸姫の大神様が祀つてある。そして右の方に義理天上さまと玉乘姫様と祀る事になつて居ります。左の方には大將軍様と常世姫様のお宮が建つのです。これは世界の萬物の種物をお始め遊ばした結構な結構な根本の神様ですから、よく拜みておきなさい。お前さまも若いからどうせ種まきをせにや

ならぬのだろ。神の生宮をポイポイと拵へるのが神の役目だから、今こそ男と女が暗がりで、かが安う生宮を拵へるやうになつたが、昔は人間一人仲々竝や大抵で作れたものでありませぬぞや。其お徳にあやかる爲に種物神社に祭つてあるのだ」

「ハイ有難う」

と松彦はうつむく。

「サア之から、【おちたきつ】彦がモ一つの上的のお宮様を御案内致しませう」

萬公は、

「モシモシお爺いさま、そんな【きつい】岩石を目の悪いのに登つて、何卒谷底へ落ちたきつ彦にならぬ様に願ひますで。サア五三公、アク、タク、テク、お爺いさまのお伴だ。何とマアきつい坂だなア」

「あゝあ、人に改心さそうと思へば仲々の苦勞だ。ソレ御覽なさい、ここに木造りの宮が三社建つてをるだろ。中央が生場神社の大神様、岩照姫の大神様、此御夫婦が祀つてある。右のお社は【りんとう】美天大臣様、木曾義姫の大神様の御

夫婦うふうふが祀まつつてあるのだ。そして左ひだりの方ほうの宮みやには五み六ろく七しち上じやう十じふの大神おほかみさま様さま、旭あさひの豊とよ榮さか昇のぼりの大神おほかみさま様さま御ご夫婦ふうふが祀まつつてあるのだ。モ一ひとつ上うへに三さん社しゃあるけれど、これから上うへは道みちがないから、ここからお話はなししておかう。石いしの宮みやが三さん社しゃあつて、正まん中なかが月つきの大神おほかみ様さま、日ひの大神おほかみさま様さま御ご夫婦ふうふが祀まつつてある。右みぎの石いしの宮みやは末まつ代だい日ひの王わう天てんの大神おほかみさま様さま上じやう義ぎ姫ひめ大神おほかみさま様さま御ご夫婦ふうふが祀まつつてある。左ひだりの方ほうが日ひ照てらす大神おほかみさま様さま、大だい照せう皇くわう大神だいじん宮ぐう様さま御ご夫婦ふうふが御おまつ祀まつりだ。何なんと結けつ構こうな地ちの高たか天あま原はらが開ひらけたものでせうがな

「モウ此この外ほかに神かみ様さまの祀まつつてある所ところはありませぬかナ

「まだない事ことはないが、さう一いつ遍べんにお話はなしすると、話はなしの種たねが切きれるから、又また今こん度んどにのけておきませうかい。お前まへさまも一いつ遍べんに食しよく滞たいしては困こまるからなア

「アツハ、お爺ぢイさま、御ご苦く勞らうでした。實じつの所ところは私わたしは三あな五な教ひけうの宣せん傳でん使し、治はる國くに別け命のみことの片かたうで腕うでの萬まん公こうさまだ。氣きち違がひでも何なんでもないのだから、さう思おもうて下ください。隨ずい

分ぶん怪けつ體たいな神かみさまばかり、能よう拜をがまして下くださつた。これも話はなしの種たねになりますわい。

「靈れい界かい物もの語がたり」にのせたら、キツと大だい喝かつ采さいを得えませう。お前まへさまの方ほうでは種たね物もの神じん社しゃだ。義ぎ理りかき天てん上じやうの神かみ様さまとなつて、これからウラ

ナイ教けうを一生懸命いっしやうけんめいに信神しんじんさせぬワ。オツホ、

「この年寄としよりを此處迄こゝまで連れて来て、何と云ふ愛想あいさうづかしを云ふのだい。それだから三五教あななひけうは悪あくの教をしへといふのだよ。大方おほかたお前まへも變性女子へんじやうによしの廻まはし者ものだろ、油斷ゆだんのならぬ代物しろものだなア」

「此奴こいつア、お爺ぢイさま氣きが違ちがうてるのですから、どうぞ氣きに觸さへて下くださいますな」  
「あゝさうださうだ、氣きの觸ふれた方かただつたなア。何なんぼ氣き違ちがひでも餘あまりな事こと云いふと氣きの宜ようないものだ。併しかし氣き違ちがひとあれば咎とがめる譯わけにもゆかぬ、見直みなほし聞直ききなほしておかう」

「ハイ有難ありがたうムいました。お年寄としよりに高たかい所ところ迄まで御苦勞ごくらうになりましたして申譯まをしわけがムいませぬ」

「お前まへさま達たち、下したの大廣間おほひろまで今晚こんばんはお泊とまりなされ、女をんなばかり百人ひやくにんあまりも鯨詰すしづめになつて寝ねて居をります」

「五三公いそこうはにやりとしながら、  
「オイ、アク、タク、テク、泊とめて貰もらはうかなア」

「なんだ、女ばかり鮪詰になつてると、爺さまが言つたら、顔の紐迄解きよつて、アタ見つともない、女の側は險呑だ。サア松彦さま、遅れちやなりませぬ、折角のお爺さまの御親切だが、今日はマア御免被つて、又改めてお世話になりませうか」

「あゝそれがよからう、お爺いさま、どうぞ蠚蠚別さまに宜しう言つて下さい。今日は急ぎますから、これで御免を蒙ります」

「萬さまとやらを氣を付けて上げて下さいや、危ない一本橋がありますから、川の中へでも、氣の觸れた人は飛込むかも知れませぬからな」

「ハイ御親切に有難うムいます。サア一同の者、お暇乞ひして急がう。發車時間に遅れちや今夜中に萬壽山へ歸れぬからなア。お爺さま左様なら」

「おちたきつ」速川の瀬にます彦の神さま、萬々々公有難うムいました」

「アハ、ハ、ハ、氣を付けてお歸りなさい、萬公さまとやら」

(大正一一・一二・九 舊一〇・二一 松村眞澄録)

(昭和九・一二・二九 於湯ヶ島 王仁校正)

靈界物語 第四四卷 舍身活躍 未の卷  
終り